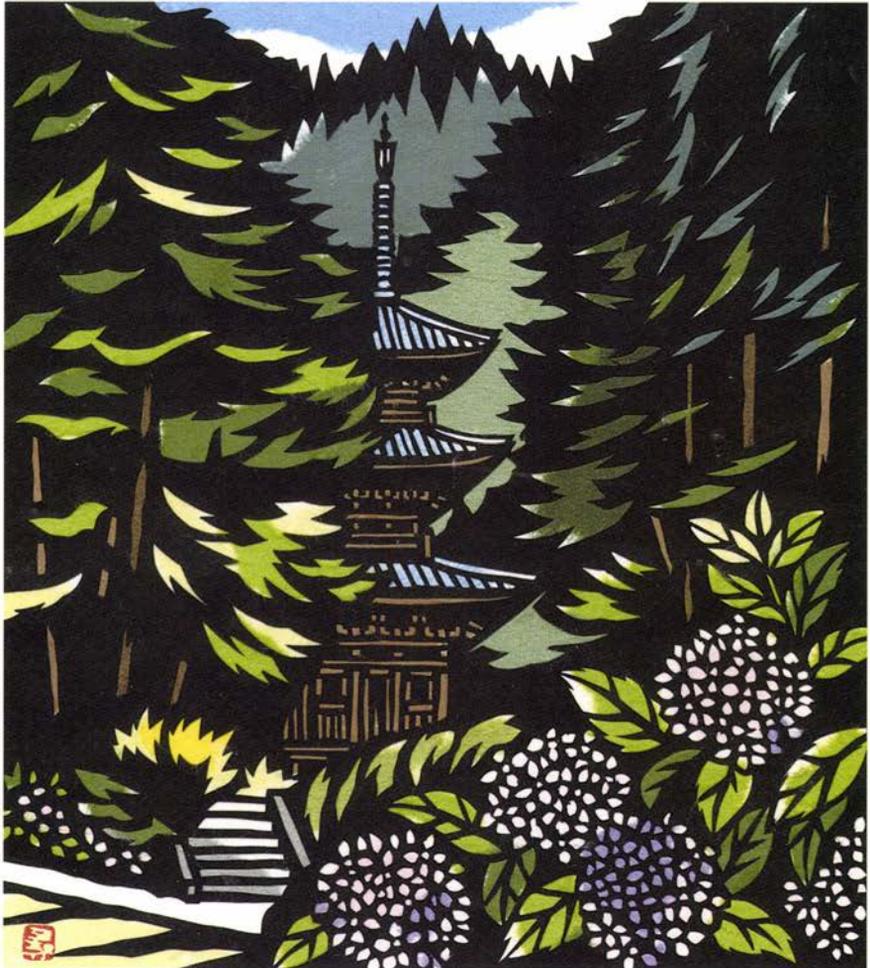


塔柳川



昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十五年六月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷一〇三三号

日川協加盟

No.1033

六月号

第十九回 川柳塔まつり

とき 十月十二日(土)

ところ ホテル・アウイーナ大阪

◎ 詳細は四月号表紙裏をご覧ください。恒例によつて同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催します。同人総会以外はどなたでも参加できますので、ふるってご参加ください。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。5月号巻末の綴じ込み暑中見舞広告原稿台紙に原稿を貼付(又は記入)してお申込下さい。よろしくお願い致します。

★個人 一口 二〇〇〇円

★団体

① 1/3頁 六〇〇〇円 ③ 2/3頁 一二〇〇〇円

② 1/2頁 九〇〇〇円 ④ 一頁 一八〇〇〇円

▼原稿締切 六月二十日

川柳塔社

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

bikenart@ea.mbn.or.jp

歳月の重さ

小島 蘭 幸

クリアブックにまとめてみました。ページを開くとどのページも全部「川柳塔の川柳讃歌」なのでから、これはもう圧巻です。100回の中で私の作品も1句取りあげていただいております。

折り畳み傘持つ男なんて嫌い 蘭 幸

平成25年4月号で木津川計先生の「川柳塔の川柳讃歌」が通算で記念すべき100回を迎えました。新連載は平成17年1月号からですから8年4ヶ月、一回も休むことなく達成したことになります。この100という数字を見つめていますと、歳月の重さがしみじみと伝わって来て、自然と熱いものが込み上げてきました。早速先生にお礼状を差しあげますと、次のようなお返事をいただきました。

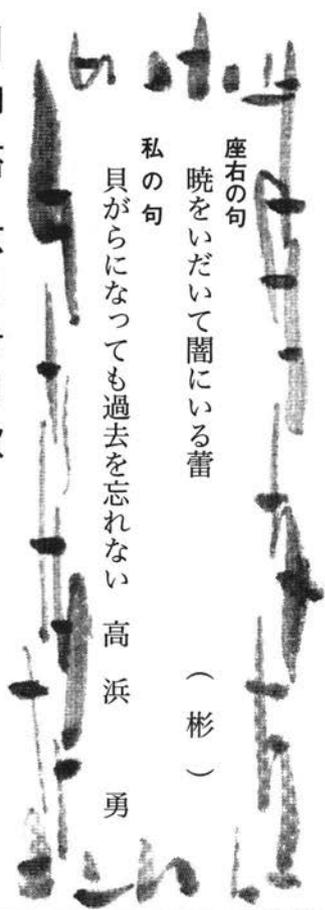
「川柳塔の川柳讃歌」100回も書かせていただき随分勉強になったのです、毎月新鮮な発想と向き合うのが刺激になりそれが私の肥やしになり、ヒントになり、有難いことです」

先生の作品鑑賞の特長は、何といっても博学の深さにあります。そして作者と対話、語りかける文章は力があります。正に木津川計の世界なのです。そこで私は、1回から100回までをコピーして、A4の

この鑑賞が私は大好きなのです。鑑賞を読み終わったあと私は思わず、「永井荷風なら許す」と呟いたほどでした。

川柳塔5月号を開いてみますと、木津川計先生の「川柳塔の川柳讃歌」は101、麻生路郎先生の「新川柳鑑賞」は15、「俳風柳多留」一篇研究」は93、吉村侑久代先生の「英語 de Senryu」は17、「新家完司のせんりゅう飛行船」は29、三好專平氏の「民族の詩歌」は12、「高瀬霜石の津軽発おもしろ景色」は15、小栗清吾先生の「江戸を楽しむ」は5、とありました。

こうして書いてみますと数字の重さ、歳月の重さがひしひしと伝わってきます。有難いことです。どうぞこれからも体調に気を付けられて、100回、200回と続きますことを願っています。そして川柳塔ファンが一人でも多く増えることを願っています。



座右の句

暁をいだいて闇にいる蕾

(杉)

私の句

貝がらになつても過去を忘れない 高浜 勇

川柳塔 六月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「当尾・岩船寺」

■巻頭言 歲月の重さ	小島 蘭 幸	……(1)
水の音	小西 雄 々	……(2)
川柳塔 (同人吟)	小島 蘭 幸 選	……(4)
川柳塔の川柳讃歌 ⑩	木津 川 計	……(47)
自選集		……(48)
温故知新		……(51)
水煙抄	西出 楓 楽 選	……(52)
新川柳鑑賞 ⑬	麻 生 路 郎	……(76)
中島生々庵句抄		……(77)
■特別寄稿 十四字詩について	佐 藤 美 文	……(78)
誹風柳多留 一篇研究 94		……(82)
英語 de Senryu ⑮	吉 村 侑 久 代	……(84)
江戸を楽しむ ⑯	小 栗 清 吾	……(85)
愛染帖	新 家 完 司 選	……(86)

水の音

小西雄々

昭和十七年二月、私は中国の漢口に在った戦車第十三連隊に入隊した。ある時はソ連の戦車との戦闘、いわゆる対戦車戦闘のため蒙古まで移動し、徹夜で激しい実弾の演習も度々あった。

昭和十九年一月、歩兵部隊から転属してきた中に「南京総攻撃に参加し城壁の上で、占領の方歳をした……」と、自慢する曹長がいた。

蒙古から反転して南昌へ攻撃していたある日、山岳地帯にのがれた敗残兵を掃討するため出撃したが、畦道が多いため戦車から降り、徒歩部隊を編成して前進した。ところが思わぬところに敵の狙撃隊がいて機関銃の攻撃を受けた。不意を突かれたが、友軍一同は自然に地面に伏せ、反撃に出たが、それと同じ時「どぶん」と大きな水の音がした。

よく見ると南京総攻撃の自慢話をしてきた曹長が、敵の狙撃をさけるため畦道

檸檬抄「リサイクル」……………	奥田みつ子・森山盛桜共選…	(90)
追悼 井上勝視さん さようなら……………	仁部 四郎……………	(93)
一路集 「真ん中」……………	長浜美籠選……………	(94)
「耐える」……………	細田裕花選……………	(95)
「しつこい」……………	江島谷勝弘選……………	(96)
民族の詩歌 ⁽¹³⁾ ……………	三好 專平……………	(97)
『麻生路郎読本』余滴 ⁽¹⁵⁾ ……………	柴原道夫……………	(98)
初歩教室「束」……………	太田 昭……………	(102)
川柳塔鑑賞……………	古今堂蕉子……………	(104)
水煙抄鑑賞……………	夏目 一粹……………	(106)
せんりゆう飛行船 ⁽³⁰⁾ ……………	新家完司……………	(107)
五月本社句会……………	芳賀 博子……………	(112)
各地柳壇(佳句地十選/井丸昌紀・松本文子)……………	……………	(113)
六月各地句会案内……………	……………	(126)
柳界展望……………	……………	(128)
■編集後記(ひとこと/足立 茂)……………	朱夏・まつお……………	(130)

座右の句

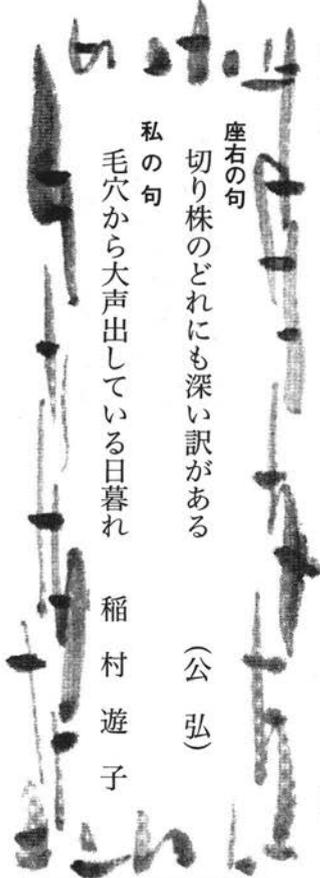
切り株のどれにも深い訳がある

(公 弘)

私の句

毛穴から大声出している日暮れ

稲村 遊子



の近くにあったクリークに飛びこんだ音で顔面は蒼白であった。また、四十代の召集兵は、敵の方へお尻を向け反対側に伏せているし、人間の生き様というか、生きのびる術を知らされる思いであった。このゲリラを反撃して前進中、誰かが笑いながら次の句を述べた。

クリークや曹長飛び込む水の音

これは、俳聖といわれた松尾芭蕉の四十三歳の時の作品で

古池や蛙飛び込む水の音

の有名な句をもじったもので、直感的な感覚には驚いた。この事件があつてから、クリークに飛び込んだ曹長の自慢話も値引きされ信用されなくなり、彼の発言力も少なくなつてしまった。(クリークとは日本では農業用の溜め池のこと) 生か死かの毎日であった戦地で、今も思い出す懐しい思い出であり、兵庫県出身だった元曹長も、十年前に胃癌で他界され、一緒に復員してから一度だけお会いしただけで、寂しい限りです。

ご冥福をお祈りしています。 合 掌

今もなお忘れぬ戦地での思い 雄々



小島蘭幸選

河内長野市 山岡 富美子

雨季乾季だんだん穴が深くなる
歳時記の謀反か晩霜が降りる

アラームがときどき響く預金帳

追伸の一行にある水溜り

絵蠟燭おひとりさまの仄明かり

藪椿かわらぬものがひとつある

大阪府 谷口 義

本人の申出により教える年

コトコトコットンコトコトコットン朝の駅

去年とは少し違っている五月

太ったらあかんし痩せてもあかんし

仕返しはその日のうちに思いつく

友だちから聞いていた友だちに会う

鳥取県 斉尾 くにこ

道端の空き缶雲と語っている

あああつと洩らした記憶の消しゴム

ケータイへ忘れた風がふいに吹く

美しくなつてゆく遠くなる人

渾身のジャンプ同じ場所におり

菜の花のぐわつと咲いて果ててゆく

和歌山市 木本朱夏

人生を教えてくれたのは桜

旅の途上で手紙ばかりを書いている

自転車であらりと春の河口まで

地図のない橋を渡ってきた旅路

葉桜になるまで花と見つめ合う

午後からの雨に逢いたいひとが居る

橿原市 居谷 真理子

たつぷりと空気ふくんで温い人

真つ直ぐに歩けば背くことになる

来たものを愛そうドアは全開に

謀叛などいかがと紅い花が咲く

シンバルが音符の渦の中で待つ

味方からパスされたのは手榴弾

堺市 柴原道夫

校庭の埃つばさは是非もなし

父として転んでみせる春の土手

読みさしの指を栗に思うこと

てのひらを転がっている春の水

知らんぷりしてくれる我が家の猫である

とどのつまりゴミがいちばん正直だ

鳥取市 両川無限

嘘泣きも作り笑いもしてこの世

楽しんで生きよう坂はあとひとつ

日曜の朝はたつぷりジャムを塗る

群集の声が三角波になる

アベノミクスの撒き餌に雑魚が群れてくる

長旅の果てに横倒しのモアイ

熊本市 永田俊子

春一番二番三番負けるな日本

総理から百寿祝われむず痒い

赤紙のように納金切れの通知来る

何も残っていない百寿の手の平

新聞の折り目正しく妥協せず

いいじゃない活断層上花見酒

出雲市 竹治 ちかし

旅立つ日までも磨いておく命

沢山の付箋を貼って見失う

バーゲンの押し合い鬱の字のごとく

平和呆けパンダ交尾というニュース

消費せぬ国も規制をする魚

爆弾も花火も作る人の知恵

西予市 黒田茂代

越冬のつばめに弾む春が来る

街路樹の緑カンフル剤になる

二度とない今日へ思いつ切りジャンプ

目標が見えてしつかりペダル踏み

一泊の旅足取りも荷も軽い

下心見えてますよと叫びたい

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

小さい恋だった今でも宝物

言い訳はよそう鮮度が落ちてくる

日にち薬へ栄養剤を飲み足そう

ほろ酔いは知らず夢ごちも知らぬ

姉の忌にひよつこり陽の目みた手紙

花は地にこんなにかるいさようなら

紀の川市 辻内次根

確実に余命刻んでいる振り子

冷蔵庫一人暮らしに一人分

これからの事を日差しも思いつめ

芋焼酎さつそく買に行く便秘

客観視すると老朽化がわかる

南無観世音と静かに眼を瞑る

豊中市 松村里江

無駄なもの何もないよと大自然

軽いジャブ天狗の鼻はもろかった

湧き水でホッと一息リユック置く

物好きな蝶が来て乗る花筏

バイキングならばだぶだぶワンピース

親ばなれ共稼ぎして米を研ぐ

吹田市 山本希久子

うすむらさきの自画像とたそがれる

振り向けばもう消えていた昨日

優先順位つけて整理はあと回し

おふくろという有難い枷がある

花の下楽しむことは生きること

朝のレモン今日の立ち位置決めておく

弘前市 高瀬霜石

金運のキの字もないという手相

スイッチオン ステテコ親父から戦士

マヨネーズ・ケチャップにゆるりママの味

女子会は元氣還暦・喜寿・傘寿

笑顔には笑顔返せぬお葬式

獅子だからこそ身中に虫がいる

倉吉市 牧野芳光

手の平を温めて幸せを受ける

キヲツケーの形で並ぶエコ風車

一メートル以内に来ると危険です

勲章と思う手の皺顔の皺

厳しさを皺にたたんで老いていく

友達と思えば誰も恐くない

香芝市 大内朝子

夜ざくらの漫ろ歩きを亡母と居る

裸木もどつと御洒落な春を着る

玉筋魚の釘煮の届く友達者

駄菓子屋の風に時どき会いに行く

逆風にまだ対峙する気概あり

思いの丈吐く川柳に救われる

大阪市 津村志華子

あじさいの薄紫は母の彩

さやさやと青田の中に父おぼろ

鳴き砂はキュッキュッキュとラブコール

語りべの民話に旅が深くなる

過去の事みんな忘れて甲羅干し

ジんクスをとやかに言うている曆

島根県 伊藤寿美

判官鼻眞皇太子さま頑張つて

雪柳うつむく癖がなおらない

目の届く距離だしばらく見てみよう

晩学の辞典についできた手垢

眞後ろでわたしの裾を踏む味方

だんだんと独りの音に慣れてくる

西宮市 西 口 いわゑ

春風がふんわり希望くれました
招かれて上座の酒のほろ苦し
婚約発表女一際うつくしい
飛んできた火の粉の中に愛もある
微動だにしない桜の悪女めく
私を変える魔法がほしくなる

篠山市 酒 井 真 由

ちよいと悪戯波紋思わぬところまで
私にも歴史があつて桜さくら
ふかふかの落葉を踏んで会いにゆく
絵硝子の中に私の夢がある
元気かとやさしい風が囁いた
住む里の幸です土筆煮てください

枚方市 伊 達 郁 夫

寝め言葉早く下さい花が散る
雑巾は前の姿は語らない
迷い子の私拾ってください
懺悔した骨だきれいな灰になる
スッピンを想像してる厚化粧
歳置いて出かけて来たの春帽子

西宮市 秋 元 てる

心の網にかかる景色は古里似
キャラメルは今も四角で老いも春
味覚とははつきり言えば郷愁だ

脱ぎ切れぬ昭和を纏い生きる日々
そのうちにどうにかなると箸洗う
迷い事は雲に預けて歩き出す

寝屋川市 森

茜

からからの右脳揺さぶるグレゴリオ
カーテンを閉める温もりあるうちに
亡母の小紋やつとなじんできたような
筋骨隆々ボランティアより帰る孫
鷺一羽動かず目くばりを止めず
京都御所守る凜凜しいセパード犬

松江市 錦 織 禮 子

老いては子…そつと見守る昼の月
復興を期し「故里」の曲流れ
生きがいと王道を行く老奏者
理想郷めざすハンドル高齢マーク
花冷えにより美しくなる桜
厄除けの仏拜んであんみつを

京都市 高 島 啓 子

水盤にしばらく生かす落ち椿
廃業のホテル半分コンビニに
どこで曲るか知っているブーメラン
ヘルパーはTシャツテキパキと動く
じつくりと聞いて忘れておきました
わたくしの名前で夫のとるサブプリ

米子市 竹村紀の治

図書館で後の始末の本借りる
きつちりと飲んだ菓が余ってる
血管も年相応で気張れない
ふたり分淹れて珈琲ひとり飲む
墓参り弱み知ってる人ばかり
斜め読みして上澄みを呑んでいる

東京都 まえで とよこ

大学芋 ほのかにぬくいエコバッグ

隅田川 勝海舟の立つ岸辺

麟太郎のふるさとの川花ざかり

アベノミクストンネルぬける列車かも

記念日のたびにミサイルはこぶ国

ビルの灯のとどきそうなる春の月

神戸市 山崎武彦

祭日は旗を立てよと亡父の声

ぼろぼろのエプロンにある妻の自負

すぐわかる親子アンパンマンの鼻

ぼろぼろになっても君を守り抜く

延命を拒みつづける寒つばき

セールスを断る僕も同業者

西宮市 亀岡哲子

お先にと桃にことわり咲く桜
いらぬものはいらぬと決めて荷が軽い
やじろべえの支点に母の底力

おもしろう生きてゆつくりあの世まで

男八十赤いベストの似合う歳

年金は職場の花を少しだけ

芦屋市 黒田能子

なるようにしかならぬから自然体

人が好き人の集まるところが好き

洗いざらしやさしく肌にそうてくる

しつくりと夫婦茶碗が手に馴染む

絵に描いた約束のまま忘れられ

減塩の食事に慣れてきた体

熊本県 岩切康子

FAXで助けてくれる友がいる

困つたらすぐに尋ねる友のベル

鳶の群れ餌の舞取り面白い

群がつて一人静は賑々し

連れ合いの言葉信じて馬鹿をみた

気になった受診でくすり一つ受け

川西市 西内朋月

長生きをすればするほど金がいる

掃除機が文句を言っている掃除

うっかりと滑つた口に深い傷

落日を浴びて明日も生きられる

乗るとすぐ締めるボタンを押されてる

尿検査も酒を飲むのも紙コップ

大阪狭山市 矢野 梓

花冷えに衣装予報も付け加え
重ね着で春の嵐を迎え撃つ
あと幾度二人で花見分ち合う
突然の話返事はすぐ出せぬ
おいでよと姉いて故郷あたたかい
計算が合った試しのない家計

和歌山市 上田 紀子

一目飛ぶ糸の乱れは気の迷い
未完成だから人には温かい
いろいろなドラマ畳んだ男の背
入れ知恵をされた器が反り返る
信じたい正義が勝つと言う掟
いつの日かお米も消える日本から

河内長野市 村上 直樹

自分史にもしを重ねて春の夢
ぼつぼつと星を数えてみずゞの詩
白寿まで呑める証の顔のしみ
燃える恋拾つて未練なくあの世
未来図を空いつぱいに描いて春
坂道も杖に柱になあお前

大阪市 岩崎 公誠

肩の力抜いてゆつくり息をする
老老の介護甘言などいらぬ
刺ぬいた丸いはなしに味が無い

負け組のペア凭れあい生きてきた
原色の中にくつきり墨一字
ボンコツの梓でのろのろ生きている

八尾市 宮崎 シマ子

来年も来ると花見の客帰る
祖父ちゃんの笑いに乗ってあげましょう
へそくりの通帳ときどき眺めてる
ジंकスを逆手に取っている強氣
土壇場で男の子等は父に従く
笛のよな声で泣いている淋しい日

奈良市 米田 恭昌

迷信も祖母が言ったら真実味
妻の返球サボテンの塊だ
姑のお供いつもとげ抜き持ち歩く
珍しい妻が一緒にのむと言う
賢いのは僕の血筋と譲らない
虎キチに巨人命のシャキシヤキの嫁

藤井寺市 若松 雅枝

陽光燦燦花も小鳥も野に満ちて
父母の住む過疎地に桜真つ盛り
ルビ打って欲しい曾孫の命名に
政権交代我が家の景気良くならぬ
貰つてもきつと飲まない試供菓
歩行器や杖が並んだ長寿会

三田市 久保田 千代

投げられた石に刻んでおく答

死に向かいながら成長する人科

お菓を止めて元気になった姉

一行詩詠んでた頃の雪は好き

その先を言えば崩れる砂時計

早や古稀を迎え私は何をしてきたか

西宮市 山本 義子

世界地図ゴマ粒ほどの旅でした

ぐるり旅人の温さなどいただいで

旅の空少し魂遊ばせる

無人駅に降り蝶々になれました

終着駅あすは始発になるので

ゴミ分別して独り旅企てる

和歌山市 柏原 夕胡

邪気のない笑顔は旅に出たつきり

川底に沈んでいた恋の屍骸

甘えたいのかなピンクが好きになる

ペランダの花満開が居場所です

ギョツと抱いたら泣けてくるぬいぐるみ

何遍も恋の始末書書いている

堺市 澤井 敏治

ヴィヴァルディの音符の跳ねる春の川

愛のムチの躰に学んでるいじめ

正しいと決めるころにある驕り

同居して年齢差より時代の差

蟻だつて皆それぞれの顔を持つ

ゆつくりと歩けば見えてくる寿命

鳥取市 森山 盛桜

臨機応変に右ネジ左ネジ

雑踏に逃れて避ける後ろ指

ズームにはして欲しくない瑕疵がある

プライドがスライスされて落ちて行く

片隅で生きているのか藁草履

丸だけで生き抜く事は難しい

豊中市 松尾 美智代

私を晒しつつして黄昏れる

あたたかい風桜にも私にも

何もかも中途半端に生きて古希

目力が落ちて五感が冴えてゆく

特技などないが上手に米は研ぐ

思い出の中で消えない旅の虹

羽曳野市 徳山 みつこ

心肺停止ほつとして涙出す

こんなにもはつきりとみた喉仏

頑張った骨へただただ手を合わす

子も孫も去つて書類が押し寄せる

ユニクロへ孫と踏み出すスニーカー

私にはすることがある生かさされる

和歌山市 岩本美智子

愛の刺深く入りすぎ血が滲む
フリージャー咲いてわたしの春が来る
カラオケが厭デイサーピスに行けません
デイサーピス古民家の庭ホツとする
歩けよと子ら靴をくれ誕生日

和歌山市 牛尾緑良

したい事たんとあります自由席
自分では出来たつもの力瘤
花吹雪夢ひとつずつ甦る
山門の内では善男で通す
わがままも言えて未だに悪友で

和歌山市 喜田准一

アルバムを手繰り昭和が甦える
踏み込んで行けば後押す風も吹き
亡き母が論す食い過ぎはしやぎ過ぎ
氣遣いが過ぎて浪漫が失せて行く
チマチマと生きなさんなと余命表

和歌山市 楠見章子

薄ピンク着ると元気になる鏡
字幕スーパードだけで終ったスクリーン
さりげない仕草をなぞる帰り道
直角の道で美人とすれ違ふ
風も色もきらきら春の田舎道

和歌山市 坂部紀久子

八十路闊歩まだまだ軽い一万歩
立派な目標ばかり掲げた日記帳
朝寝坊しても朝昼ちゃんとお食べ
取得ない私のつくる目玉焼
ライトアップ満開のまま眠られず

和歌山市 武本碧

ニユートンも真つ青浮かぶオスプレイ
リモコンでイメージ通りいかぬ妻
親のくれた名前に添うて生きている
まごころはガラスケースに閉じ込める
ゴーヤカーテン一石二鳥ぶら下がる

和歌山市 田中みね

満開の桜もよいが早よ食べよ
押すな押すなの人に紛れて見る桜
日に三度なにをお買いに行くお人
生きるとはこうも色々あるものか
以心伝心電話のベルは友だった

和歌山市 玉置当代

正念場であると奥歯を噛みしめる
核心を掴むと結果見えてくる
煩惱を捨てよう花のひとつときは
人々を感動させて花 北へ
家計簿の隅に日記を書き留める

和歌山市 土屋 起世子

地に足をつけて来た道父残す

お天氣の良い日が好きで仕事好き

ルーペまで持っていちやもんつけに来る

買物に免許更新独り住む

曾孫までとんどん先に進んでる

和歌山市 福井 菜摘

迷いから抜けて大きくなる歩幅

並んでるだけで楽しさ倍になる

旧友に会うたびいつも背伸びする

花野から優しい風を持ち帰る

忘れずに心の窓を磨いてる

和歌山市 福本 英子

震度四やっぱり怖いから起きる

ちぐはぐに身体と脳がなまけだす

いぎの時くればライターより燐寸

やっぱり行こか右へならえの会合に

野良猫が子育てしてて家の納屋

和歌山市 古久保 和子

どんな小さな橋にも名前あるように

本日の予定飛び出すトースター

昨日に戻ってからの探し物

ジオラマのおかつぱの子は私です
ゴミ袋の口はおしゃべり好きらしい

和歌山市 堀 富美子

傘寿など何処吹く風のスケジュール

いい方へ転がす今日も順風だ

ライバル視されてる内は花なのか

早とちり修正液が忙しない

七色のレシビ独りの誕生日

和歌山市 松尾 和香

影偲ぶ昭和の駅に立つ夫

旅支度やがて浄土へ辿り着く

夜桜の艶めき人も月も酔う

ふるさとの夕陽に映える母の影

審判の手どきどき見てる甲子園

和歌山市 松原 寿子

草花に囲まれ仮眠とる昼間

それでもなお漕ぎ出す船にある未来

しなやかに風のリズムへ添う花弁

引き返す道から夢が消えていく

山脈の肩のあたりでひと休み

岩出市 藤原 ほか

クラス会みんなおばさんホツとする

あれこれと考えなくても日は昇る

リサイクルされて私が蘇る

足枷にならないように引き締める
足跡に素敵な花を咲かせたい

海南市 小谷小雪

田辺市 岡本昇

中空へ再出発の息を吐く
坂道の半ばでネジを締め直す

川が澄みカワセミいつも飛来する

麗らかに誘われ刺激受けに行く

春からの歯医者通いへ気合い込め

海南市 堂上泰女

思考回路の目詰りほぐす山桜

鈴生りの友の一つの鈴になる

お手製の美味のおこわは隣より

咽から手が出るだけで終った絵画展

爛漫の花行く人へ幸を蒔く

紀の川市 宇野幹子

グーの手を開いて嘘のない握手

阿波踊しながら猪口がやつてくる

独り立ちして温情がよめてくる

振り向けば影も阿弥陀になつてきた

粗衣粗食守り通した健康美

紀の川市 北山絹子

沈丁花の香り駅までついて来る

鯉のぼり五月の風と和を結ぶ

春うらら心の中が蝶になる

恋をして女の顔になつてゆく

黙祷へ冷たい雨が降り止まず

橋本市 石田隆彦

東北へあと一握り愛の手を

復興策の谷間で助け待っている

決断へ迷いはじめてもう五年

激戦を越えて握手の野球帽

賢いをつくづく思う電子機器

京都市 坪井孝一

打楽器が弾んでボクは空に飛ぶ

囁けば萎んでしまう花言葉

止めました探し続けた青い鳥

どう投げてどうなるものかお賽銭

予想通り赤エンピツに嘘はない

京都市 藤井文代

起きたくない日もあるんです妻のスト

やる気より止める気の癖すぐにつく

無添加の言葉使つて四月馬鹿

これ以上積みばしつくりいかぬ嘘

冗談がはまつてそつとそらした目

京都市 榎本宏子

折れかけた心ワインの赤が効く
ラテンライブに酔ってチャチャピンヒール
人前は並んでますが喧嘩中
古稀だから踏んばり止めて昼寝する
代返の恩ビールで返すクラス会

京都市 三宅満子

タレント名思い出せずにもう五日
掘り出した欠けらにロマン抱くマニア
とりたてて特技はないが妻元氣
ほめ上手しつくりこない服を買う
風邪の神温いうどんで追い払う

亀岡市 井上森生

震災の対処次世代への宝物
開花時期狂うて社会大あわて
医療より先ず健康を診る良医
老い最中遊び心の先導で
喜寿を無事まだまだ先の夢が湧く

長岡京市 山田葉子

そのままでもいい囁いたのは森の精
どなたにも寄り添いますとかすみ草
定石のとおりに生きてきましたか
手招きに浮かれ踏みこす境界線
見られたくないのに見舞客が来る

大阪市 池上清治

工事の日ドリルの音も昼休み
病床の電車の音で旅思う
筈は顔を出したらすぐ売られ
雨模様晴着の下に出るシューズ
大学を出ても企業にゆとりなし

大阪市 井丸昌紀

気付かない振りをしてきた黄信号
悪いようにはしないと君に言われても
母さんはいつも何かを縫っていた
考えず走る男で友はなし
柔らかな口調で視線には悪意

大阪市 江島谷勝弘

普通だと思ふ時時うぬぼれる
尖がるのはよそう領土は話し合い
澄ましてはいるが地団駄踏んでいる
年金が低いので目線も低い
いま流行りです第三者委員会

大阪市 榎本日の出

春が来て少し背中も伸びました
赤い服着てもちつとも気が晴れず
ケイタイは家族皆の迷子札
慣れてゆく持病の機嫌取りながら
優しいが母の涙がムチに見え

大阪市 榎本舞夢

伊勢遷宮またもお参り出来て春
孫達も玉砂利踏んで厳かに
温泉に桜ひとひら癒される
友人のみやげ菜の花盛る夕餉
春うららら和服姿で松竹座

大阪市 大川桃花

遅れると見込んだバスに置いてかれ
物作り最後は勘と老農夫
メカ音痴孫の帰りを待ちかねる
人づき合い貸し借りなしにして平和
骨になるまで言わぬと決めたことがある

大阪市 奥村五月

諦めて情性で夫婦つづいてる
俎板の呼び名も知らぬ嫁が来る
聴診器使うことない首かざり
欠け茶碗喜怒哀楽を知っている
茶柱の効果空しくさんりんぼう

大阪市 笠嶋惠美

寄付された雛集まる晴れ舞台
家の中すつきりすると味気ない
入魂に大きく見えた墓の石
肩の荷を降ろし計算案になる
気に入った靴が安くてピタタンコ

大阪市 神夏磯典子

木の精に励ましもらう雨つづく
花菖蒲静かに咲いて 私呼ぶ
大きな目開け探し物見つかった
痛み止め神様からの子守唄
思い出がどつきりあつて動けない

大阪市 川端一步

三月の海は悲しい顔で風ぎ
笑い皺いくら増えても構わない
忙しい言う贅沢の中にいる
ユーモアを腹いっばいに食べて寝る
飛ばされたところで種がでかい花

大阪市 熊代菜月

塞ぐ手のすき間で噂きかされる
レモンティ恋の予感を感じつつ
カーナビに頼り父さん迷つて
鈍行で終着駅をめざす旅
呼ぶ声は何時も淋しい夢の中

大阪市 古今堂蕉子

連戦連敗テニスは歳を裏切らぬ
株高値どうぞ儲けて下さいな
勧誘の電話切り方教えます
一言も聞き洩らさずスプ飲む
我家にも出ました濃霧注意報

大阪市 小谷集一

訥弁の友がメールでよく喋る
ナンバーワンやめてオンリーワン狙う
世間どう見ようと恋もある余生
ガチンコで生きた若さが懐かしい
立ち位置を変えて未来の夢を追う

大阪市 坂裕之

気が置けぬ人を囲んで輪が出来る
そうですかあなたが言つた事なのに
トップより平均点で良いと母
一言が足りない程で丁度良い
一言も文句言えない人と居る

大阪市 佐藤忠昭

車窓には梅桃桜菜の花が
美人の湯スッポンボンで大の字に
客一人宿の主人とサシで飲む
止められぬ岩魚の骨酒三杯目
初対面話が弾む孫自慢

大阪市 澤田定子

一年生歩く動作も微笑まし
衣替え仕立直しは母の技
狭い店客の絶えない菜屋さん
別れ際もう逢えないと言を
入社式胸ふくらんだ時もあり

大阪市 田浦實

大仏さまに逢えば自負心消えて行く
豆の命頂きますと湯葉すくう
へそくりでやつとプライド維持してる
ピンタより良いところ見付け褒めたげよ
過去へ行くタイムマシンは乗り飽きた

大阪市 寺井弘子

家の内波風立てぬ妻の知恵
腑に落ちない巨人轟頂の榮譽賞
地場地産B級グルメ企画する
木のおもちゃかたかた鳴らす温かさ
マネキンを真似てスカーフ春色に

大阪市 津守なぎさ

競いあう同じレベルの新入生
金柑の色あざやかな露地の奥
盲導犬賞められても無表情
反原発世界一つにならぬ謎
継続は力体操欠かせない

大阪市 原田すみ子

言の葉を磨いて己が彩を出す
忘れたい昨日と続けたい昨日
結局は相談のふりしてるだけ
見送るか残るか希望あるけれど
読み終えた本にほんのり染まってる

大阪市 板東倫子

ウオークの鳩が人馴れ飛び立たぬ
指の怪我風呂にはいるのひまが要り
耳遠くなんだか孤立したようだ
悩み事うち消すように髪洗う
孫帰り一息ついてコーヒ飲む

大阪市 松尾柳右子

不可解なりーダーがミサイルもて遊ぶ
寒と暖 桜と梅が入り交じる
海底の燃える氷に持つ期待
寒波来て飾らぬままの雛まつり
寒空に吞まらず帰った花見酒

大阪市 平嶋美智子

あの方に背いて悔いの中にいる
やさしきで包んでくれた人が逝く
坊さんのお経を真似て読んでみる
読経は眠りをさそう良いリズム
饅頭を食べてストレス宥めます

大阪市 伏見雅明

子に続き妻降りたがる縄電車
ライバルを心に決めて記録伸び
もう時効と言われぼつりと喋りだす
縁談を母の介護が遠ざける
ふと視線感じ見上げた仁王像

大阪市 升成好

鈍くさい奴がここにも自然界
人間を鍛えています待ち時間
口下手がへーとホーとで対話する
打開策ない筈ないとまた励む
五十三次今はひかりで駅三つ

高校野球すめばさびしい日曜日
花を見て今の仕合せありがたく
この風で桜散るでしよあわれなり
友来る 子 孫皆連れ賑やかに
カットする若い兄ちゃん好男子

大阪市 山本加お里

なつちゃんはね抱いて守った父の愛
おいしいと言つて喜ぶ人と添い
哀しみのトンネルぬけて春が来た
体調の良い日選んでする検査
誰やろう挨拶してるマスクごし

大阪市 吉内タカ子

孫試合バレー応援若返る
春景気明るい兆しずんずんと
夢まくら断捨離できぬ一周忌
大正の尺度が怖い干渉で
ダイサーピス二曲カラオケ気晴らしに

大阪市 吉村 一風

愚痴言いにいつていつぱい聞かされる
ストレスは溜めるな胃まで怒り出す

味のある言葉もらつて包んどく
欲ひとつ捨てると笑顔浮いてくる

枝豆で父と一杯酌みかわす

堺市 大久保 のん子

絵を描く夢叶うまで描き続け

外食に飽きてひとりのお味噌汁

眼差しの熱い情けに絆たされる

天性の素朴さを寄せつける

毎日が予定だおれの暮らしむき

堺市 大隅 克博

愛嬌を振り撒きながら行く貨物

つんとして我関せずと回送車

特急がちよつと気取つて通り過ぎ

次々と優等列車ばかり来る

普通車よ君が謝る事はない

堺市 荻野 象山

近況欄いろいろ書いた五七五

ごみ一つ拾い痛つたいギックリ腰

買い出しをして来たように葉下げ

温もりと愛を感じた貼るカイロ

九十五歳のお通夜ではしゃぐ孫ひ孫

堺市 奥 時雄

同期みなやり手に見える入社式
社長の子配属されて静かな部

新人に言い負かされた社の未来

羽振りいい奴も給料同じ筈

初月給今も金額覚えてる

堺市 柿花 和夫

反骨が掘り起こしてる負の歴史

眉上げて寒の戻りと対峙する

とんでもないことを想っている顔だ

リハビリの一步が明日を連れてくる

寝違いいじゃないのに首が回らない

堺市 加島 由一

桜咲く酒と肴は揃つてる

犬連れた美人見たくてウォーキング

宇野千代の一途薄桜咲く

ライバルの面影がすクラス会

春うらら園児の手から絵本落ち

堺市 源田 八千代

入学式へ両親祖母揃い踏み

観光地訪うてるような我が故郷

遠足の児童賑わうターミナル

もろもろの鬱春眠を妨げる

元は他人同居は無理と息子言う

堺市 齋藤 さくら

花見行こ言うてるうちに散りました

ピカピカの一年生だハイポーズ

春や春旅行案内東で来る

円安と株高ピンと来ぬくらし

節電はもうこれ以上しない肚

堺市 志田 千代

十和田湖の霧は晴れないままに去る

金比羅さん降りてるうちに日が暮れた

横書きの五七五のある手紙

花の名は覚えられない車好き

ニキビポツポツ孫の口数減ってきた

堺市 遠山 唯教

会うだけで元気をくれる友がいる

信頼の絆になつてゐる料理

構えても欲があるから騙される

清貧でいい寛容な妻という

晩酌の相手を孫がしてくれる

堺市 内藤 憲彦

眠りの国へ深夜便を聞きながら

助手席で居眠りしない僕の妻

断捨離が僕をだんだん隅にやる

何事もなかった顔の熱帯魚

誤字脱字ばくのプライドべっしゅんこ

堺市 西村 りつえ

散る花に余熱気になる小さな胸

突つ走り悩み忘れた青い恋

羽目はずし下戸も酔いたい花の下

菜の花がしつかり咲いた冷蔵庫

くどい話両耳閉じて落つ夕日

堺市 宮本 かりん

分からぬままお経あげてるあたたかさ

目の前の物が見えずにさがし物

束の間のうたた寝母の声を聞き

欲ひとつ捨ててもつれが解けてゆく

懐かしい景色で思い出した人

堺市 村上 玄也

当選後付けてた仮面取り外す

還付金医療費高く付いたせい

飲むこともゴルフも金と体力と

禁煙は何度もしたと言う自慢

聖職と思わぬ教師ばかり増え

堺市 矢倉 五月

持病には仲良くしようと言うてある

運が悪かったで済ます他人様

桜観る約束で逢う年一度

身仕度を済ませて老斑目立つこと

真夜中のトイレの鏡も寝ぼけてる

堺市 山本半錢

年寄りに人を待つ贅残つてた
花吹雪命の化粧してくれる
妹の傘寿に少し慌ててる
旅帰り猫格別の顔もせず
探し物退屈凌ぎではないが

和泉市 横山捷也

捨て石がやつと今頃効いてきた
焦らない我が人生に詩がある
無防備な男に嘘はつきにくい
肩書きは無いが真つすぐ生きている
法衣脱ぎ若い僧侶のサングラス

泉佐野市 山本蛙城

安いなと思う物など買わぬ主義
蜂の巣の小部屋に棲んで趣味に飛ぶ
朝ごとにバカねバカよと口遊む
片想いばかりが増えて卒寿超え
カタログは買った心算で積んで置く

池田市 栗田久子

明日はあるわたしに笑みがある限り
苦笑して済ませたけれど腑に落ちぬ
付き合いで笑い血圧定まらぬ
無いように見えて解決策はある
眼科歯科巡つてたどりつく我が家

茨木市 島田誠一

ボランティアなのに我も出る欲も出る
廃校でタイムスリップする暫し
アベノミクス影が背伸びをして喘ぐ
景色見てゆつくりペダル踏む余生
まだらボケふいに核心突いてくる

茨木市 藤井正雄

百歳を越して世間をなごませる
エステ帰り合せ鏡に春が立つ
あやしてるほうを撮りたいカメラアイ
梅地下の階段未知な街に出る
一番が欲しい寝袋御供する

交野市 森本弘風

口紅を落とし落ち着くああ我が家
骨つぼを振るとからから娘泣く
あの女婦警らしいとつり革を持つ
輸入品アベノミクスを蹴散らかす
お寺には極楽行きと奉仕する

河内長野市 植村喜代

孫四歳元氣一ぱいもつて来る
騒がれて咲いた桜も雨で散る
今歩けないと困るから歩く
中之島懐かしいねボート漕いだ頃
お月様皆懐かしいとしを取り

河内長野市 木見谷 孝代

お化粧で隠した歳が首に出る
断ち切れぬ未練が明日の糧となる
同窓会会って未練が吹っ切れる
介護する人にこそ要る助け舟
喜びの声で絵筆がよく走る

河内長野市 黒岩 靖博

はいはいが出来てひと科の第一歩
町角にカメラの視線ある時代
四名の介護者について通り抜け
青春の恋は純情虹の橋
貧乏でも破綻はしない暮らしする

河内長野市 坂上 淳司

未だいろは木組み符丁にする大工
口に釘類張る屋根屋居なくなり
揺れる足場ひよいひよい渡る鳶職人
窓掃除のプランコ揺れる高いビル
今は昔大工木切れに凶面引き

河内長野市 谷 久美子

捨て切れぬ未練に同居する妬心
賞味期限未練を詰めた冷蔵庫
饅頭を横目で睨む血糖値
ヘルプサイン気付いてやれぬ子のあえぎ
てにをはを付け間違えた句が沈む

河内長野市 松岡 篤

粘られて入った保険止められず
どうしても数えてしまふゼロの数
嫁入りに帰りの切符不要です
おいしいと言うて欲しそう妻の顔
ポイントを貯めたいために買い

河内長野市 水谷 正子

チケットを二枚貰って悩んでる
名門は大学までの切符あり
自由行動ホテル忘れて苦勞する
飛び乗って準急行と気がついた
車椅子ダイケアの人と桜見る

河内長野市 山室 光弘

痛さから解放されて見る寝顔
祭壇の笑顔が哀し妻遺影
春の花見ぬまま逝かせただ無念
庭の花君の面影見る思い
残された手書きのレシピ妻の味

岸和田市 岩佐 ダン吉

貧しくも心豊かに列島よ
時どきは私の素顔忘れてる
親と子の哀しいドラマ止まらない
運命とやたら言い過ぎないですか
原発の檻から明日は逃げ出そう

岸和田市 堤 檣代

新調を着る喜びは今も変らず
八十と五になつても欲捨てず
ふきわたる風にも色がついて来た
たわむれる雀も春が来たのかな
老花を咲かせてみたい川柳で

岸和田市 森 元 ふみよ

彼偲び夜桜手酌杯進み(桜花 5句)
花散らし一夜の嵐憎い奴
年重ね今年の桜ピンク濃く
ゆつくりと桜並木を肌で知る
想い出す桜吹雪と人生譜

岸和田市 雪 本 珠 子

古き良き昭和が残る無人駅
猫にまで気遣いされる老い独り
溜息に紛れ本音がポロリ出る
今日もまた猫に癒され日が暮れる
快活に笑つてた友星になり

四條畷市 吉 岡 修

つらいのは中の下以下の私たち
誠意だけ根っから策のない男
謎めいた昔が匂う渋いのだ
横文字の表札で鬼寄せつけず
世界中がやがやさせる神がいる

吹田市 太 田 昭

ニゲンであつて茶漬けを食べて居る
フライパンで焼いた独りの卵焼き
蟠り解けて余白のときと居る
人生に効かせ過ぎたか唐辛子
予定表過密で呆ける暇も無し

吹田市 大 谷 篤 子

今やつと幸福駅に着きました
喋つてるうちに血圧高くなる
常識の枠なかなか越えられず
夢のある話を孫としています
喜びを教えてくれたさくら草

吹田市 木 下 敏 子

茶柱にうかれて乗つた朝のバス
ありがとう言うだけの脳ぶらさげて
老いたとて優しい笑顔振りまける
転勤の知らせに春の夢ふくれ
大輪の重みに負けた椿落ち

吹田市 須 磨 活 恵

前向きに頑張りましょう風みどり
プルトップ開けると夏が走り出す
去年より凶太く見える生命線
試行錯誤生きのびて来た影法師
行く春をゆつくり惜しむすみれ草

吹田市 瀬戸 まさよ

高槻市 片山 かずお

あれ以来戦争は悪九十歳

あのときの左遷が運を呼びました

ご近所のさくらより遠出の桜

もしあのときにといい思いはいつももある

日焼け止め忘れることはない外出

吹田市 野下之男

地球より重たい筈のこの命

気持だけ声が大いにお年玉

ペンギンを笑わないでよ僕の足

大歓声明日の日本だ幼稚園

母ちゃんに助け呼んでる籠のひな

高石市 浅野房子

今年も無事友と花見に行きました

青春を謳歌しているうちの猫

わたくしを見捨てて犬も猫も逝く

女心杖についても服が欲し

ピアニツシモやがて私も消えて行く

高槻市 指宿 千枝子

生きとし生ける命輝く春よ春

春風に闊歩している赤い靴

姦しいピザです昼のレストラン

騒音の中で静かにレモンティー

春よ春八十の恋たのしまん

もう覚えられぬとストをする左脳

神さまの意向か鈍くなる頭

テンポいい口調を一步退いて聞く

親に意見する嘴の黄色い子

無視されてやつとダメだと知った恋

乱雑な書棚にゆとり積んである

ここまでが限界口が重くなる

身代りを使ってピンチ切り抜ける

坪庭で覚えた老後の土いじり

カルテ読む医師の視線が揺れている

神さまの采配なのか花吹雪

過去形の話が多くなる日暮れ

救急車なぜか悲しい乗心地

病室にわたしを残し春が行く

退院後普通の日々がいとおいしい

春風に花粉舞うならまだましか

プライドをかなぐり棄てて素っ裸

プレゼント相手に渡すタイムिंग

どの人も素敵な顔の通り抜け

贅沢な八重の桜の通り抜け

高槻市 初代 正彦

高槻市 島田 千鶴子

高槻市 佐甲 昭二

高槻市 杉本義昭

懸命に走る球児はまだ無名
貧乏も今は美談にかわる歳
悲しみのピリオド雨になつてくる
黙り込む事で抗うことにする
父さんに通じなかつた腕相撲

高槻市 左右田 泰雄

何かある扉の向こう夢未来
忍びよる未練の影にすくむ足
サングラスかけると目立つ泣き黒子
決めかねて言葉濁している弱気
おくれ馳せながら一花咲かせたい

高槻市 富田 美義

わが余生みどりと決めてから気楽
労わりの言葉わからず礼を欠く
神様のコース納得せぬ遺族
杉花粉スギもあのころ期待され
生きるため家内の愚痴も噛み締める

高槻市 富田 保子

雨おんな独りの時は何時も晴れ
夫連れて無理だと思ふ富士の山
里帰り時雨れる中に墓ふたつ
バラのトゲ無駄では無いと花束に
ひたむきな好意に今も耐えている

高槻市 峯村 勲弘

跳ね上る株価不安が胸よぎる
民族の飢えを土台に撃つ攻める
八重が撃つ鉄砲ならば許しても
ピンピンと咲いてコロリと散る椿
豊漁を待つて釘煮に取り掛かる

高槻市 安田 忠子

屋形船酒と笑顔と花びらと
満開のさくらを抜けるリッチ号
膝痛を忘れて習うフラダンス
フオアグラとキャビアを食べて腹痛に
点滴中ヒントをもらう五七五

豊中市 江見 見清

ばらばらの世間話を背なで聞く
逆転の知らせは風呂で待つことに
卒業と勝手に決めた趣味の道
整理してそれから置場所が不明
ぼかぼか陽気なよなよ緑見て歩く

豊中市 藤井 則彦

落ち込んだときほど透ける人間味
幸せはスローライフで噛みしめる
ワntenボずれると和む口喧嘩
こっそりと貯めたお金か喘いでる
てふてふが読めるかと訊く戦中派

豊中市 水野 黒 兔

万華鏡覗いた昭和遠去かる

突堤に竿百本の春うらら

貼り紙に「たけのこごはん」京の旅

点になるまでバス停に母は立つ

ゆつくりと旅のいろりは時を溶く

富田林市 片岡 智恵子

振り出しに戻るとそこに母がいる

欲ばった数だけ損をしています

欺されてだましてお互いの握手

救急拒否命はどこへ運ばれる

窓際へ椅子も他人の顔をする

富田林市 中井 アキ

ナーバスを包む陽気な四分音符

哀しみを巻き戻すのか折鶴よ

絡まった絆をほどく春の音

ラブレター楷書の愛はだめですか

哲学を刻むたつぶりの余命

寝屋川市 籠 島 恵 子

来し方を聞けば海鳴り 風の音

そら豆の形はわたくしの歯型

歯応えがまだあり難儀する夫婦

夕桜ちよつといい事ありました

満開の桜を月が愛でていた

寝屋川市 富山 ルイ子

花冷えにリラ冷えに春はまだ先に

柳友に甘え筍掘りに行く

筍にわらびを柳友におすそわけ

剪定の松やこの手がうれしそう

少し食べるだけあればいい元氣なら

寝屋川市 平松 かすみ

ご先祖へれんげ菜の花続く道

気の毒に桜満開でも見えず

声紋が似てるやつぱり兄弟だ

勿体ないがひとりのためにお風呂

電子辞書たよりお閑な広辞苑

寝屋川市 山本 三郎

無党派の票がさまよう参院選

毎日が余分な時間ほしい僕

砂を嘔む思いを捨てに旅に出る

さりげなく脱いだ上着を受ける妻

震災の歪み臉に焼き付ける

羽曳野市 安芸田 泰 子

春うららだまされやすい電話口

遺書を書く決心つかぬのは未練

日めくりへ一日づつの命剥ぐ

流し目をしている今朝の目玉焼

米一合 かしやかしや研いで今日の糧

羽曳野市 宇都宮 ちづる

寝入り端時差ある孫の電話くる

壁紙を春色に替え百目差す

古希からの手習い師匠気を遣い

ささくれた指の真珠が可哀相

万歩計つけた五歳と長歩き

羽曳野市 永田 章 司

あの夫婦しつかり者の嫁でもつ

アベノミクス政府日銀息が合う

世の流れ密やかにする家族葬

老いふたり防災予算組んでない

戦争を知らない世代国の舵

羽曳野市 三好 専 平

迷ったらすぐに待ったをしています

生きるとはなんと悲しいことでしょう

偏食の極み パンダの意地つぱり

なぐるのは自分の頭だけでよい

長い目でみればやっぱり愛が勝つ

羽曳野市 吉村 久仁雄

昭和史や人は愚かで愛おしい

円空に誘われ降りた無人駅

ときどきは視線を上げに海に来る

我が家には掘り出し物の妻がいる

人間が好きで一人で行く飲み屋

東大阪市 北村 賢 子

青い地球戦火で破滅するなかれ

うきうきの春へ緊張感続く

存分に深呼吸する郷の夢

胎教へ子も名曲に酔いしれる

人と人触れ合えるから生きられる

東大阪市 佐々木 満 作

咲き切つて名残惜しむか花吹雪

予期しない病に受け入れぬ心

純朴な気風に惚れて五十年

創造を絶する規模の地下マagma

貸した本催促せぬと戻らない

東大阪市 米田 水 昇

花見酒飲んだグループなつかしい

花満開見れば手足が踊り出す

人間界見下ろし桜上機嫌

古里の桜は何を話してる

花に負けず笑みを浮かべて撮影す

枚方市 海老池 洋

むしゃくしゃを桜小道へ捨てていく

お隣との壁薄からず厚からず

恥かいてかいて謙虚になつてくる

陽が落ちて魔性を帯びてくる広場

残月に重ねてみたくなる余生

枚方市 小林 わこ

満員電車で酔つてたところが懐かしい
船が好き船では酔つたことがない
ほろ酔いで見れば見るほど美しい
仲良しツアー酔い止め薬分け合つて
良いお酒自分しつかり知つてゐる

枚方市 丹後屋 肇

救援物資ボランティアの手順送り
ノクターン遺影笑つて聴いている
空いた席先取りされる照れ臭ささ
駆け抜ける幼児が杖を慰める
惜しまれて再登用の定年日

枚方市 寺川 弘一

ロボットの友達増える近未来
他人の電話しようもないこと喋つてる
雑音も偶に補聴器つけて聞く
寿命とは一枚の地図書きあげるまで
ゼロと言う数字が好きで孤独です

枚方市 二宮 山久

ライバルはさすがいつでも上に行く
微笑んで夫の愚痴聞く年の功
願い事素足に托す百度石
身勝手は承知阪神勝つように
本音知り許す気持の仲となり

枚方市 二宮 紫鳳

入学の子らの笑顔に花吹雪
マッサージ通つて梯子する花見
もどかしさ募るリハビリ花曇り
コラーゲンぬつて食して老いの坂
古い二人宝探しのよう日々

藤井寺市 伊藤 アヤ子

満開の桜は散つて花筏
肺ガンと言われてからも動じない
井戸端の話し合いにも一利ある
一宿一飯の恩忘れてる
エネルギー余分な事に使わない

藤井寺市 太田 扶美代

桃の花ふくらむ桃色着たくなる
爛漫の春と特等席にいる
錯覚がわたしの少し前に行く
大切な人へ馬鹿つと言つてやる
褒めるのは下手褒められるのは苦手

藤井寺市 鈴木 いさお

遠回りして6月の花に逢う
春眠とろとろあと15分もう5分
指導者は鉄の女と呼ばれてた
喫煙者同士が集う隔離室
傷心の旅へスマホは置いてゆく

藤井寺市 高田 美代子

春寒にまだ冬物が仕舞えない

甲子園の春は終つて虎の庭

三ツ星のホテルでよしとする旅路

骨董として僕のこと観てくれる

息抜きが上手な妻のカプチーノ

藤井寺市 津田 シルク

花卉絨毯白いドレスが着たくなる

四温の日に籠いつぱいに春を摘む

手土産はお酒の方がいいそう

花嫁衣裳これもひとつの賭けだろう

遺品整理想い出すまい思いつつ

藤井寺市 増井 ヨシ枝

貧富の差なくて嬉しい花の下

電動車いいですねとは他人ごと

亡き夫のお顔も拭い春彼岸

木の芽和え亡夫偲んで舌の上

自立します亡夫の表札下ろします

藤井寺市 俣野 登志子

どんな家建つのか不安両隣

駅名をしっかりと刻む鈍行で

食卓の隅足マッサージ付き書斎

髪染めてお誘いのTEL待ってます

ただいまとはもう言いません嫁いだ娘

藤井寺市 吉田 喜代子

夜が明ける話足りない事ばかり(旧友と)

根付いてる外国人の京ことば

元氣過ぎ亡夫もあきれているだろう

隣組わらび取りなど春の詩

一鉢を入れて今年の設計図

松原市 森松 まつお

あの人の引き出しいくつあるんだろ

散髪屋あしたのジョーで盛り上がる

教授さえ甲子園ではアホになる

町内の清掃まじめな顔で行く

世論調査会ええ言いたいことがある

守口市 井上 桂作

甲子園応援合戦また楽し

街中に並ぶ花見て安堵感

この寒さなぜに開花は早くなる

四月馬鹿朝は冬です昼は夏

春らしく木の芽もやがて色づいて

箕面市 出口 セツ子

子が自立すればお荷物だけの親

お先にと結婚譲りあう二人

長男の極楽蜻蛉気にかかる

孫の居る友の話の聞いている

年金の元を取るまで生きてやる

箕面市 広島 巴子

侯爵家感服名画守り抜く

桜湯の色香ほんのり待合せ

食いしん坊食で季節を感じ取る

国会でエイプリルフルさすがだな

平和への鳩インフルで待機中

八尾市 内海 幸生

酒断ついても朔日先ず神へ

隕石よ地球の青に恋してか

星空よ聞かせておくれ自分史を

果てるとき有難うつて言えるかな

若沖の鶏が元気をくれそうぞ

八尾市 高杉 千歩

原点は好きで始めた絵具皿

さようなら おはよう 一日勝負です

面倒なことは避けます花筏

地下鉄へ涼みに行つたよき昭和

病院の友達住所まで聞かず

八尾市 寺川 はじむ

やっぱり玉子最後に食べる戦中派

三陸の夜明けを告げる夢列車

V取りへ補強のトラが吠える春

寄り合えば話年金から身体

円安と株高コンビ跳ねる春

八尾市 村上 ミツ子

花見酒まさしく日本文化だな

やつとこさ生きてきてもう十三回忌

迷つたら気楽な道を選ぶかも

知らんでもいいこと聞いているから鬱

よろよろ生きる背もたれない椅子で

大阪府 桑田 ゆきの

手庇に百花繚乱視野の中

マスクして瞳が笑う散歩道

マイカーを拭いて黄砂の濃さを言う

介護する隠れ欠伸のナース室

ゆつくりと歩いて拾う好い話

大阪府 籾山 隆盛

四月馬鹿やっぱり君が好きという

早瀬から流れは淵へ移る恋

泣きにきた浜に吠えられふつ切れる

三回忌妻は仏になりはつた

プロ野球敢えて興味を減らしてる

大阪府 米澤 俣子

花まつり釈迦しつとりと花御堂

春霞あれは黄砂だつたんだ

ど忘れは笑いですますほかはない

裏向きの値札に心読まれてる

小さい嘘ふつくら抱いた春キャベツ

神戸市 伊勢田 毅

スーパーのチラシが派手な年金日
春の風北野の坂を駆け上がる
妻と娘が築いた城で隙がない
ガッツある補欠がベンチ盛り上げる
線量計胸に飛んでる渡り鳥

神戸市 木村 貴代子

日本一目指す子等の目の光り
はるかなる未来の孫よ幸せに
孫に見るはるか昔の吾娘のさま
立ち話抱いた小犬が重くなる
孫帰る地震一過の床の上

神戸市 白川 淑子

十センチほど浮いてます春だもの
ときめいていたい婆ちゃんになっても
巻き寿司とロールカステラ端が好き
ほっこりと日溜まり猫になれぬ野良
散財をしたあと茶漬け庶民です

神戸市 山口 光久

寄り道の無駄が今頃効いてくる
ラッシュアワーやはり美人の側がいい
妻の目がだめだ駄目だと指図する
一度でも浪費すると言われたい
ふらふらになるまで全て出し尽す

神戸市 山口 美穂

亡母さんも好きだったよね桜餅
春の宵疎遠になった友思う
生き下手も死に上手にと掌を合わす
木漏れ日の中で戯る亡犬をふと
ロボットが話相手をしてくれる

神戸市 山田 婦美子

こんなこと思っていたのか古日記
若い日の桁ちがいだった夢の数
目が肥えていれば見方もちがった
満開の桜窓から眺めよう
美しく老いたいなどと欲を言う

相生市 中塚 礎石

温室で育った赤い顔ならぶ
冗談へ孫は味方の涙する
晩酌はやつぱり妻の酌がよい
年金の枠に暮らしも慣れて来た
よいと巻けああなつかしい我が腕よ

明石市 糺谷 和郎

巢立つ娘の背を押す手が柔らかい
迷い解く本を選ぶもまた迷う
春風へチャイムが背を押す門出
息抜きで始めた趣味にはまり込む
ホームラン狙うと脇が甘くなる

芦屋市 竹山 千賀子

体裁をつけて私の色が消え

大河ドラマ歴史がぐつと近くなる

健忘症なのに何でも聞きたがる

死にたいなあ言いつつバアバサブリ飲む

じいちゃんと幸せ分かつ肩車

尼崎市 市坪 武臣

独り居に叱る人なく迷い箸

花粉症とんち効かせて乗り越える

復興に向つて歌う「花は咲く」

人間の終着駅は軽い骨

つり橋を渡つた後に来るチャンス

尼崎市 加川 靖鬼

ゆるキャラを脱いでラーメン食うバイト

同じ轍踏むまい輪廻転生で

満月が入るか覗く五円玉

詰め放題日頃の欲が目を覚ます

人間の知恵を猫にも教えとく

尼崎市 軸丸 勝巳

大寒波耐えた桜に見るパワー

楽しませ最後を飾る花筏

裸木は生きてますよと日日青葉

西の空置きたい空気清浄機

アベノミクス値上げが先にくる辛さ

尼崎市 林 昭三

お隣が無理難題を言つてはる

成人す父母に感謝は倍返す

我が友と以心伝心終電車

健かな母から朝餉今日の糧

新聞を表裏まで読む再入院

尼崎市 春城 年代

踏み切りで待つ朱の蛇の目傘傾むけて

彼岸過ぎても四月聞いてもまだ寒い

今年の桜いちどだけでも見ておこう

風光る原っぱ今は走れない

駄菓子屋の水ようかんは旨かつた

尼崎市 山田 耕治

残業でひとり夜桜見て帰る

児童画展日展にない活気

けものなら大食い遊びやりません

クラクシヨン鳴らして娘連れていく

社保庁へ生きていますと出すハガキ

加西市 金川 宣子

股覗きスカイツリーが天を突く

テンポよく食べれる内は元気です

幼子がママの居ぬ間に紅をひく

ゆつたりと忘れ上手でうまく老い

指名されピンと血圧飛び上がる

川西市 米原雪子

勘戻り一打差競う練習日

忘れつぽさ呆れた後は情けなし

お互いに年だねと言ひ許し合ひ

昼食はおしゃべり弾む花の下

大丈夫齒科外科内科行つて来た

三田市 石原歳子

行くと言う返事に心ときめかせ

春うららいいよいよ明日が退院日

ごくごく生きてる音のするビール

老いひとりお膳の山椒匂い嗅ぐ

旗行列した故郷のこと思い出す

三田市 上垣キヨミ

年毎に春の思いが深くなる

クラス会見栄張る物が何も無い

お祝のお礼制服着た写真

不意の客マスクで隠すノーマイク

凹ませてウエスト探す試着室

三田市 尾崎一子

コップ酒亡夫と語ろう春彼岸

一秒の恋にときめく春の風

肩手術両手バンザイ若くなる

皆同じ一つの命抱いて春

震災で耐える心を知る未来

三田市 北野哲男

五十年見返り坂に立つ夫婦

リハビリにひたすら豆を拾う指

福耳に穴をあけてと祖母嘆く

山の湯に七福神も二三人

四面楚歌馬耳東風の遠い耳

三田市 田中章子

今年また燕のもどる街に住む

おいしいと言われ手抜きはできません

泣かれたくらいでうろたえてはならぬ

お互いにマスクはずしてご挨拶

亡母と見た桜ははと見えています

三田市 福田好文

二番目の入学式はママ一人

道極めた人にだけ見るいい笑顔

人事課は僕を数字にして評価

急な葬喪主に言葉が出てこない

孫娘孵化したらしいじやれ付かぬ

三田市 堀正和

ゆつくりと流れてくれる花筏

今が旬明日の風など当てにせぬ

とりあえずひと眠りして策を練る

使わないままで錆びている左脳

通り抜け今年を締めくくる

西宮市 足立 茂

無愛想がボソツと言ったあたりがとう
全没の予防注射がまだ効かぬ

集金の日にはスイツチ切るチャイム
言うまいと決めた言葉を吐く呑み屋

葬儀屋もノルマがきつい決算期

西宮市 緒方 美津子

目障りなところにおく非常袋
戦後の苦節笑い話のように母

芋のブランドずんぐりとむつくりと

辛夷咲き合格メール山笑う

非常口見て階段を信じてる

西宮市 片山 忠

ジャケットを着ると恋などしたくなる
ときめかぬ二人に夜があざ笑う

ビル街でやつと見つけた喫茶店

悪友と呼びたい妻が側に居る

生活保護でベツト飼うのは駄目ですか

西宮市 牧 淵 富喜子

副作用のせいにし過ぎていませんか
「気をつけて」自分自身に言っている

身の奥も芽吹く音する春の風

水温む家事も少しは捗りぬ

草むしりするといつでも祖母思う

西脇市 七反田 順子

ツバメ来た翼に合ったランドセル
春休み肩の荷下ろし旅支度

花は咲く東北向いてハーモニ
まだ見えぬとにかく坂を登ろうか

古池におたまじゃくしがおじやるかな

姫路市 古川 奮水

甘酒に少し生姜を副えた祖母
甘辛のカレーライスが日本味

花の里一句を読んで通り抜け

酔い醒めの腹チャルメラに誘われる

黄色い風皖んで無口風見鶏

奈良市 阿部 紀子

紫陽花は服も指輪も亡母の色
花粉黄砂粉塵どれも避けられぬ

叔父叔母が皆逝き私まとめ役

笑わせるつもりで少し嘘を混ぜ

物好きで直ぐに飛びつき懲りまへん

奈良市 岩本 浩二

傘寿過ぎ趣味楽しめる身に感謝
荒波を越えて二人は喜寿傘寿

予告なくミサイル飛んでくる恐怖

効き目無いとてエステサロンに罪はない

にわか雨相合傘の生むドラマ

奈良市 大久保 眞 澄

試着したブーツ脛からはがれない

会議は踊るせめて似顔絵でも描くか

不意打ちでボケるわけでもなさそうだ

待合室つい病人の顔になる

ああ加齢空気も読めず字も読めず

奈良市 加門 萌 子

春霞さけて中沢ゲンの遺書

大戦を知る語り部が散つて行く

東京のマジック空へまた地下へ

机上論南海トラフよく弾く

モザイクが段々解かれ教育界

奈良市 辻内 げんえい

円安に眠つたドルを思い出す

妻エステ留守は優雅な至福時

ピンポーンに髪梳きながら返事する

咲く桜早い子もいる遅い子も

水上バス花も天気も文句無し

奈良市 山 本 柳 昌

今日もまた素直になれぬまま暮れる

春うららお池の亀も甲羅干し

指先へ春の風舞いつくし摘む

母さんの小言も軽くなつて春

身も軽く風と弾ける揚げヒバリ

生駒市 飛 永 ぶりこ

朗朗と詩吟粛粛と響く

年輪の気概をかもす晴れ舞台

信用がないのか語尾が跳ねている

八時間ねると心が風になる

舞扇父の恰幅ふと偲ぶ

奈良県 渡 辺 富 子

身の内の尖りを消した花吹雪

春のうつ大笑いして吹き飛ばす

逢えそうで今日も裏道通ります

真四角な男のジョーク宙に浮く

あこがれが山のかなたへ消えました

宇部市 平 田 実 男

お立ち寄り下さいなんて書いた嘘

遺影写真のことが気になる昨日今日

檜山の見学会へ招かれる

マニユアルの通りに不祥事を詫びる

わだかまり解かしてくれるワンカップ

鳥取市 有 沢 せつ子

風切つて行くびかびかのランドセル

忘れぐせ大きいバッグ一つ持つ

無人駅昭和の桜咲きほこる

書き順の違いを孫と話し合う

マドンナの友は品良く老けていた

鳥取市 池澤大鮎

半熟は生意気ざかり口がたち
生レバに加熱とかまじないをかけ

半熟の設計だったフクシマよ

日章旗黄砂につつまれ臙なり

陽は臙眼病進みサンングラス

鳥取市 奥谷彩子

三猿を通す隠居も金は出し

地産地消天下一品母の味

老いという綻びつむぎ合う仲間

喜寿傘寿登りつづける山がある

ありがともごめんも言えるボケてない

鳥取市 加藤茶人

あの浅い川が氾濫した悲劇

酸欠の鯉にも似てる趣味仕事

マニフェスト アベノミクスの次は何

絵心で口説く文句の花言葉

神様はいたずらが好き糸もつれ

鳥取市 岸本孝子

身の丈に合ったものしか追いかけぬ

弱者切捨そんな政治に馴らされた

ピンピンコロリ目指し野菜と万歩計

おぼろげな記憶をたどり針仕事

勝つ阪神ころわくわくさせてくれ

鳥取市 倉益一瑤

大事なものをこぼして歩く便利さよ
比べるから背伸びがしたいどんぐりだ

それぞれの暮らしがともる門灯よ

家中の空気動いて春になる

船出した子の吉報を待つサクラ

鳥取市 鈴木一弘

金メダルつらい体罰受けてきた

独居老そつと置かれる植木鉢

パスポートなくても世界渡り鳥

かたくなも誠があれば動かせる

いさかいは子猫を抱いて立ったまま

鳥取市 高浜勇

何もかも美しくなる雪の朝

少しづつ良くなるのなら待てるもの

希望の灯まぶしすぎます入社式

遠慮ない友の訪問うれしい日

公と私の間に深い溝を掘る

鳥取市 竹口清信

一度だけすれば仕舞になる葬儀

二度とない新人賞は一度だけ

三度目の正直なんて本当か

仕舞だと言いつつ吸っているタバコ

質種が無くて質屋へ通えない

鳥取市 土橋 はるお

朝昼晩お寺の鐘が時告げる
就職祝に孫のスーツを誂える
肝食った男がパワ―見せ付ける
半分は生で半分焼いて食う
正座しておいしい薄茶頂いた

鳥取市 永原 昌 鼓

春彼岸人も小鳥も歌い出す
八十路坂易々越えたわけじゃない
山や川越えた数だけ丸くなる
看病のストレス風呂で脱ぎ捨てる
年金が生き様決める老いの旅

鳥取市 中村 金 祥

受験生神も味方に引き入れる
満開の桜が派手な人にする
飲みこんだ言葉に真理潜んでる
第三者委員会免罪符のようにして
オスプレイが働き蜂に見えてきた

鳥取市 夏目 一 粹

カラーからモノクロになる酒の量
いいことがあると長生き考える
心にはたとと持つてるのがお金
はじまりはたった独りのリサイクル
死ぬ決意生きる決意のうらおもて

鳥取市 西川 和子

誂えた服がメタボにそぐわない
時は金なり残り時間をどう過す
適材適所まだまだ役に立てる筈
現役の米寿の背をお手本に
今日もまた昨日と同じ絵で終る

鳥取市 春木 圭一郎

目に見えぬ努力絶対裏切らぬ
ゆとり持ち自分のペースくずさない
深呼吸まずは気持ちにひと区切り
純粹に生きる喜び感謝する
そよ風のようにいつでも生きたいな

鳥取市 平尾 菜 美

反省を問うてる今日も風呂の中
鯛一匹のせる器をめざして
恐るべし一人歩きの一行詩
壊れかけラジオ死ぬ気にある祈り
被災地よ山はまともに燃えそうか

鳥取市 福永 ひかり

旗振ってピエロの役をやっている
直ぐに出ぬ言葉ケンカの種になり
先に行くipodやらスマホやら
アナログのまままで化石になりそうだ
「今でしょ」にヤル気スイッチ入れられる

鳥取市 福西茶子

落ち椿花器に浮べてティータイム
日溜りで瞑想らしい猫と蠅
うぐいすと輪唱昼の月おぼろ
さくら咲くこころの棘を抜くために
品格と不細工兼ねた座り胼胝

鳥取市 前田楓花

絵てがみに向かない丸い文字で書く
病む人に瘦せたねなんて言えませんが
人の句を何度も読んで泣いている
南風優しい顔でゴミ飛ばす
後悔は何も思わず出た言葉

鳥取市 宮協道子

我が領地だと白いタンポポ座を占める
山桜城の桜に影うすれ
司令塔再生してる我が頭
年金が魅力孫が顔を出す
日曜日時間の早さふと思う

鳥取市 吉田孔美子

花ばなのアップこたつで春の旅
春の陽に意欲も少し膨らんだ
リクルート鞆に意欲がばんばん
遠回りしたら逢えたのおぼろ月
朝がゆにホッとしている旅半ば

鳥取市 吉田弘子

風雨予報残るさくらを見取めに
後ろ姿見てくれる夫有り難い
赤着ても老いは素直な背の歪み
寝る時間惜しんだ頃の奮闘記
風化され時が解決する怖さ

鳥取市 岸本宏章

にんげんもフグもかわいひ膨れ面
学んでもできぬこころからの笑顔
日本のへそが東京寄りになる
「君が代」と「りんごの歌」は忘れない
うしろ指指されているな背が寒い

倉吉市 猪川由美子

大津波ヘシエルター作る金を貯め
三寒四温アサの気温でメニュー決め
八百長無しで今の星取り本物か
猫可愛や共に入れる墓を買う
スタバ無い鳥取県で名が知れる

倉吉市 山中康子

ちっぽけなハートを揺する春嵐
お笑いの種子まくひい孫の動き
一日中羽根のぼしてろくでなし
三食を囲むお膳が光ってる
わたくしを芯からみがく仏さま

倉吉市 山本玲子

桜吹雪玄関先に吹き溜り

敬遠をしても老化はやつてくる

昭和一ケタ頑固なネジで生きている

お手拭きは夏でも蒸しタオルが好き

ウォーキングこつてりぬつた日焼け止め

米子市 後藤宏之

もう五分早目に出たらどうですか

シートベルトしないぐらいはお許しを

この空家骨身削つて建てた家

違反してやつとここ迄生きのびた

春なのにまだ湯たんぽを抱えてる

米子市 後藤美恵子

大山を望み老木の桜咲く

花嵐汚染まみれの墓洗う

春の野に恋の燃えかす燻つてた

エコ暮らし天から貰うエネルギー

老化なのに病いと信じ医者通い

米子市 中原章子

心から嬉しく思うのは身内

帳尻の合つた幸せ噛み締める

生きるコツ懐広げ紐ゆるめ

早起きの二人一緒に動き出す

終の日を思い煩うことはせぬ

米子市 成田雨奇

盃を父に習つて放さない

女子の影踏むおっぱいはこのあたり

世の中にぼくにもできることがある

お金にルーズな貧乏人に借りに来る

百の敵意に満ちていた町散歩する

米子市 吉田陽子

イチヨウ並木を真つすぐ春がやつて来る

咲き分ける椿姉妹もこのように

非常口心やすまる花を置く

草を抜く素手より勝るものはなし

二人では淋しいファミレスは避ける

鳥取県 石谷美恵子

存分に泣けと包んでくれた霧

花どうぞいえばごっそり根まで取り

所詮夢ひとに話せば笑われる

手の平を器に受ける岩清水

問いかけた即答さけてリング剥く

鳥取県 岩崎和子

猫が来て生きとし生けるほんわかと

猫二匹家族に癒しくれている

朝二度寝猫鳴く声に目が覚める

朝夕に猫の目の色七変化

シャットアウト寝室前で猫が待つ

春霞吸つて喘息起きた妻

鳥取県 竹 信 照 彦

外孫の入園祝い気を貰う

年に克つなんてとんでもない話

年を取る時間と和解でもするか

年取ると三度のめしが速く来る

鳥取県 西 谷 悦 子

生き甲斐の花育ての季やつと来た

あるがまま受け入れてこの世を生きる

聴く耳を磨きわたしも光らせる

友情の糸の結び目堅くする

七十路のラインかたつむりで向かう

鳥取県 深 田 俱 久

新年度描いた未来へ第一歩

はや米寿俺は青春ど真ん中

四回転氷上悔いは残すまじ

落のとうお昼山菜としやれこむか

団扇に節電の文字太々と

鳥取県 細 田 裕 花

隕石は銀河泳いだ記憶持つ

洗い晒しの言葉を紡ぎ旅続く

平凡こそ極上白い普段皿

ハンサムなラジオの声とウォーキング

ラジオ体操日本国民なら出来る

幕の内こけら落しの夢試食

鳥取県 松 川 行 男

歌舞伎座かスカイツリーか日帰りか

和服着て和服の女待つところ

春の山お誘い受けて屈伸だ

赤い羽根漂流熊に支援無し

鳥取県 山 下 節 子

血の絆ごつそり集うお葬式

子育てを終えた嫁です親介護

これからはピエロになって和を保つ

砂糖味みんな優しい顔になる

聴力は耳の大きさ関係ない

鳥取県 山 本 正 光

たばこ屋が無くなるまでは買うつもり

くたばつていない証拠だ飲んでます

僕の言うジョークに笑うひとで好き

精魂を使い果たしたVサイン

セールの電話留守居の爺と切る

松江市 石 橋 芳 山

曖昧なお方が線を引いている

強かに優美にクモの巣がゆれる

イチゴパフェぼつんと赤い島になる

水飲んで性悪説を薄くする

着飾つてみたつてどことなく獣

松江市 小川 注湖

任せとけ大器晩成まだですか
前を見る踏み出す一步道創る
一次試験未来を開く門の鍵
ひらひらと桜花受けとめ杯掲げ
女房の朝は鏡の前からだ

松江市 松本 知恵子

ウォーキング雲雀鳴いてる空の下
怪しげな風に菜の花揺れている
日本の春だ清水花舞台
地下街で方向オンチ加速する
お互いの淋しさ言わず見る桜

松江市 松本文子

春雷に打たれ桜も散りました
沈丁花今日の嗅覚テストする
右と言えば左 これもまた私
今日の予定義理は守っております
ぼろぼろになつたね 今日羽繕い

松江市 三島 淙丘

スニーカー春のリズムで跳ねている
百均の傘でドラマの幕が開き
ローカル線時の流れを見る車窓
あの世まで続く菜畑ひた走る
しなやかに世間の風を受け止める

出雲市 石倉 芙佐子

少女の日に一日だけ帰りたい
じゃんけんに何時でも私負けていた
あれから六十年八十路の坂の強いこと
白髪を染めてどうすることもない
桜が散つてこれから牡丹になりますね

出雲市 伊藤 玲子

そつと名を呼んだは君か春風か
口笛を吹いて踊らすチューリップ
雛段に並んで欠伸囁みころす
ゆつくりと命眠らすそば枕
モーツァルト聴いて心に化粧する

出雲市 岸 桂子

難題を背負つて夏がやつて来る
句読点打つから迷い深くなる
軍手から覗く明日も生きる指
歳月が呉れた手の皺じつと見る
少年の心癒すは愛その他

出雲市 小白金 房子

朝まiori肌さす明けの灯におきる
ありがとう桜並木を愛でて見る
花吹雪浴びて心を酌み交す
皆勤の温み戴く手すき和紙
百均を巡りわたしの春を買う

出雲市 多久和 敬子

あつさりところつてり同じ屋根の下

点と点つなぎ大きな花咲かす

水溜り越えて心が軽くなる

一番星伝えてほしい事がある

口下手同士メールで心繋ぎ合う

美作市 大石 あすなろ

桃さくら春のメニューを食べつくす

鴨居には母が使った二尺差し

追いつぎた夢が器に盛り切れぬ

溜息の訳を詮索したくなる

手が触れただけで鼓動を取り戻す

美作市 福原 悦子

煩惱も手の平にある夜明け前

したたかに生きて古里守り抜く

花冷えに少し甘みのコーヒーに

この題もそろそろ時間切れとなる

足早く生きて残った悔いもある

広島市 岸 本 清

飽きのこぬ女房の顔にご飯つぶ

意気込みが握り拳を固くする

一円をしつこく探す間の悪さ

蟹づくし今幸せのど真ん中

うちのポチ仲をとりもつやじろべえ

竹原市 石原 淑子

風化させまい天の警告まだつづく

はなびらの恥じらうように露天風呂

手作りの孫のお守りハンドルへ

アベノミクス痛みの方が先に来た

花蓆蟻もうつとり歩を弛め

竹原市 岩 本 笑子

葉書一枚介護保険を天引きす

チューリップ悩みはたんとありますが

i P S 間に合いますかガン五年

万札で払い葉の重いこと

好きになる苦味ツクシに落のとう

松山市 古手川 光

諸行無常はらはらはらと散るさくら

最先端のテレビで時代劇を見る

怒ったらあかん血圧計が言う

すつきりしたい脱皮したいんだと地球

阿呆言われたら笑う 馬鹿言われたら怒る

松山市 高橋 宏 臣

陽炎に揺れる花びら濃く咲けり

冬の夕焼け麒麟は首を長くせり

キャベツ剥ぐ戦士の青に触れている

風船かずら揺れて一言づつ減ぶ

大寒やとうとう脱皮しそびれる

松山市 宮尾 みのり

薔薇孤高ジェラシーの目を糧として

胸の奥の人も物語りを紡ぐ

周五郎全巻資源ゴミとする

がらくたを捨てる私を捨てるよに

旧姓の頃が恋しくなるも齡

大洲市 中居 善信

七手詰めくらいは解ける大丈夫

輪のなかで張り切りすぎるタンバリン

竹の子の盛りの頃に僕は生まれた

どぶろくの甘味に思う父の酒

鉦の音の長さで春がやつてくる

高知市 小川 てるみ

良くも悪くも私がみんな蒔いた種

春の陽を浴びて心をオンにする

誇らしげ風に抱かれた鯉のぼり

スパイスがちつとも効かぬこの海馬

一周忌涙は渴れていなかった

高知市 小澤 幸泉

走っても終りが見えぬコマねずみ

地獄絵を描きつづける罪の画布

楽園に遊ぶ葉が欲しくなり

人生の各駅停車かぞえつつ

お互いが問わず語りの過去に触れ

東かがわ市 川崎 ひかり

簡単に変われるカニの横歩き

老いてなお子に必要とされる幸

消しゴムが脳をだんだん占領す

これからが光る幕開く第二章

脇役が光ると飛んでくる火の粉

東かがわ市 清川 玲子

窓越しにさくら見物雨つづき

気まぐれに開いた本を読み進み

期待する旅の予定に胸が鳴り

目覚しは正直朝寝坊させぬ

狭き門きり抜け早春の陽にとける

唐津市 坂本 蜂朗

黒い腹天に見られている恐怖

若い振りしてまた重い荷を担ぐ

足腰の衰えを知る庭の草

補聴器を外せば暫し壺中天

公民館古木に花が咲き乱れ

唐津市 山口 高明

目の保養加賀友禅を堪能す

ミサイルが飛んでくるのは東京都

絶滅種ウナギの次は日本人

足らぬとこ補い合うて一人前

遠い日の微罪を妻が論う

熊本県 高野 宵草

化粧品増えて三面鏡も古い
ハンドルに景色は道の他になし
それぞれの個性見習う趣味の友
面倒な依頼は聞こえぬ遠い耳
嗚呼しんど寿命に一歩寄りました

札幌市 小沢 淳

孫受験社会の旗門一つ抜け
春を待つ生きとし生きる物みんな
セキユリティー鍵かぎカギを持たされる
指先の爪は前方後円墳
耳遠くなつて長生きする予兆

札幌市 三浦 強 一

ヘルシーライフ早寝早起き五七五
どっこいしょから一日が始動する
奥の手も賞味期限を過ぎていた
家補修この辺でよし余命表
ケ・セラ・セラ呪文に生きている八十路

砂川市 大橋 政良

春あらし牛のよだれがちぎれとぶ
上を見て歩けば拾う物がない
忠告をされたところに灸をする
夕焼けて水平線になるドラマ
二兎を追いてぶらで帰る握りめし

黒石市 相馬 一花

煩惱も苦悩も男の磨き砂
まむし酒飲んでも子供まだ一人
土壇場でびくともしない女偏
見て触れて食べて初めて知る悟り
ベストセラー買って死ぬまで積んでおく

平川市 小寺 花峯

さあ春だ朝日に向かい靴笑う
春風の甘い香りに句読点
頬杖の向こうに沈んだ抜け殻
希望から失望に変わる年金
表札の色も変わったローン終え

弘前市 稲見 則彦

微温湯にどつぷり浸かるイワシ群れ
結婚は忍の一字と言う祝辞
孫の手を借りて高いと思う今日
主要教科以外がボクの戦力だ
故郷の風に訛を聞きに行く

弘前市 岡本 花匠

路のとうの元気いたたく夕餉膳
津軽弁の医師の間診元氣沸き
相よりて今年も花見至福な日
雑草の媚び売る花のいとしさよ
カラオケに生き方学び丸くなる

弘前市 今 愁 女

雪景色春の絵本に変える雨
花に遊んで忘れていたわ消費税
改憲で先祖返りは許さない
原発ゼロ地球無蓋も気にかかり
学ぶことにせつから電子辞書を買う

弘前市 須 郷 井 蛙

千の風PM2.5攻めてくる
赤い糸昔丈夫な糸だった
日本の青い空です宝です
エコライフ昔の知恵が生きてくる
本当に宅配なのか身を構え

弘前市 高 橋 洋 子

転勤のおかげで日本ぐるり旅
お互いに補助輪でした五十年
夫婦でも個々の財布は秘密基地
体当りしたら思わぬ突破口
気晴しの散歩で拾う街の色

弘前市 福 士 慕 情

窓全開仏間へ春の陽を誘う
優柔不断日本男子の薄い影
マンボウの貌で浮世を泳いでる
口移し親子と分かる軒すずめ
富士よりも僕は故郷の岩木山

青森県 松 山 芳 生

それは春でした花マルの想い出
この風と語ろう言葉などいらぬ
平熱になった冷静になろうよ
鳥が見上げる雲の上の蒼さ
ゲームセット汗で畳んだユニホーム

可児市 板 山 まみ子

満開のコブシ谷間のシャンデリア
花散つて待つは筈ワラビ採り
戻り寒仕舞った服に詫びを入れ
初心者と句作のいろは語り合い
ひと言がまだ尾を引いてにらみ合い

犬山市 金 子 美千代

体力の維持だけで良いジム通い
なつメロの歌手もせつない変わりよう
天秤にかけて悪女になったよう
散り急ぐなかれと祈る花筵
東京の客へ土産にする土筆

犬山市 吉 田 幸 子

ひらめいて一気に画布を塗りつぶす
聞こえるか孫の奏でる七回忌
お節介くすぐつたいけど有難う
目覚めると気合の入る青い空
観念も良いが吉報待ってます

犬山市 関本 かつ子

傘マークずれて下さい祭り笛
打ち止めの同窓会は古希祝い
無造作に戻す中国産のネギ
学童の列も道草れんげ畑
外面と内面犬も使い分け

愛知県 早川 遯行

商品が貰えるようなアンケート
獨流を忘れた水は澄んでくる
防犯へ鍵かけてある非常口
額縁に入れられたまま美少年
言葉尻とつて民主も成り下り

さいたま市 星野 育子

空見上げ宇宙は広い言い聞かせ
一通の手紙にある生きる力
酒呑みの言い訳だけは上手くなり
農作業ジーパン似合う若夫婦
日記は過去を手帳には未来書く

横浜市 小野 句多留

春病い朝食済めば眠くなる
里帰り娘親子と時差がある
霊柩車友の遺影といっちゃった
ねり歩く歌舞伎役者のレトロ調
一人居でくらせる今はまだましよ

横浜市 菊地 政勝

老いてなお遊び心を飼っている
花言葉わかり慌てるプレゼント
ライバルと競う長生きなら負けぬ
怖いもの見るように立つ試着室
難関へ記念受験と言う遊び

川崎市 三浦 きぬ

あの世では草の根分けても亡夫探そう
あの世にも国境線がありますか
この世に未練ないではないがくたびれた
長生きが幸せだとは誰の言
東北の海の幸食べ終われたら

富山市 島 ひかる

エニシダの黄色に染まり逝つた父
父逝つた産み月の児が五十歳
おしゃべりと無口に続く夫婦旅
何時までも老人力に助けられ
節立つた手の鉛筆が走り出す

(前月分) 東かがわ市 清川 玲子

一輪の寒梅に学んだ忍ぶ術
無事な顔揃い楽しい輪が出来る
漬物を囲んで座る輪がぬくい
友の輪に胸中まではのぞけない
雑魚の輪は濁った水が落ち着ける

（前月分）松江市
エンジンを止めてよ月に聞こえます

轍には辛い涙もありました

うぐいすの雨コーヒーはまろやかで

差し向い座る男の熱きかな

抱き起す病母よ暦は四月です

（前月分）黒石市

躰系つけて娘が里帰り

心理学専攻しても舌足らず

宴からとぼとぼ帰る兔小舎

ケータイで喧嘩も恋もし放題

あつさりと首を落せぬ花鉢

（前月分）大阪府

食べること第一にして老い楽し

華やいで六十代の旅日記

口角を上げよと母の声がする

被災地の漁業復活待つあした

うす味は嫁の心根優しさよ

（前月分）東京都

待ちかねた春を黄砂が連れて来た

合体は無理石原氏橋下氏

ギリギリでつい飛び出したのが本音

世は広し恋のかたちもいろいろに

草臥れに行つたのかしら箱根の湯

川本 畔

相馬 一花

野田 栄呼

岸野 あやめ

第58回 今治汐風川柳大会

日時 6月30日(日) 午前10時より
会場 今治市南宝来町1-9-8
今治市総合福祉センター(愛ランド今治)
TEL.0898-22-0426

宿題 (各題 2句) 共選

「伝 統」	{	山内 美恵子 選
		山内 郁代 選
		村山 浩吉 選
「永 久」	{	黒田 茂代 選
		吉松 澄子 選
		山本 毅 選
「行 方」	{	山之内 さち枝 選
		田辺 進水 選
		小島 蘭 幸 選

会費 1,500円 (昼食・発表誌)
欠席投句 (投句用紙自由)
欠席投句締切 6月10日必着(投句料1,000円)
投句先 〒794-0064 今治市小泉5-10-36
木原 鶴子宛(TEL.0898-24-1010)
主催 今治汐風川柳社

第16回 鳥取川柳文芸大会

日時 7月14日(日) 午前10時開場
場所 新日本海新聞社5階ホール
(JR鳥取駅から徒歩3分)
兼題 各題2句 11時30分締切

「錯 覚」	居谷真理子 選
「おまけ」	三村 舞 選
「一 手」	前川 淳 選
「爆 発」	新家 完司 選
「 脳 」	夏目 一粋 選
「うっとり」	後藤美恵子 選
「溺れる」	細田 裕花 選
「赤 い」	大前 安子 選

会費 2,000円 (軽食・大会誌呈)
欠席投句 締切7月9日(当日消印有効)

1,000円(大会誌呈)
宛先 〒680-0074 鳥取市卯垣1-110
夏目 一粋
第16回鳥取川柳文芸大会実行委員会事務局

主催 鳥取県川柳作家連盟

川柳塔の

川柳讃歌

102

木津川 計

職退いて三連休に気がつかず

山田 耕 治

年寄りの徴候、僕の場合です。①つまづきます。足が重たく、引きずって歩いているのです。②「長生きしてくださいね」と言われてこたえました。若者に誰が言いましようか。③「あなたがもう二十年お若かったら」と麗人に嘆かれたときも絶望的になりました。④79歳で逝った藤本義一を五木寛之は「人には逝き頃がある」と感嘆しました。その逝き頃が僕もここ数年です。⑤朝起きたら手帳を広げます。耕治さん、見倣うて下さい。

神さまの情で少しづつ惚ける

石 谷 美恵子

ローマも老婆も一日にして成らず、であります。人間は日々に老いていきます。しだいにベースが早くなり、六十代は二年ごとに体力が落ち、七十代は年ごとに衰え、八十代は一ヵ月ごとに弱り、九十代は日一日御迎えに

近づきます。

何事も神様の思召しのまま、美恵子さんのように思えば、緩慢たる老化も御恩寵、有難や有難やで惚けにも馴れ親しめます。逆わなない生き方の勧めです。

皺のぼすためにももつと太らねば

金子 美千代

小松左京は巨体でしたから、あの人らしかつたのです。晩年、糖尿のせいもあって激瘦せしたとき、目を疑いました。萎びて皺だらけになりました。

まして女性も豊満であつてこそその豊麗です。今号、関本かつ子さんも「老いたねと言われてやめたタイエツト」と。美千代さんもおかつ子さんも女らしい選択です。それでなくても「婆」とは波と女の組み合わせで、押し寄せ無数の波の如き皺です。その婆の返上です。

鉢巻きの赤は白より強そつた

升 成 好

じゃんけんは色彩的に赤である(樋口由紀子)赤は闘いの色です。じゃんけんで勝ち負けを決めるとあれば色彩的に赤でなければなりません。かつて「労働者」が元氣だった頃、「民衆の旗赤旗は/戦士の屍を包む/高く立て赤旗を」と高唱しました。

一方、白は白旗の色であり、色彩的に敗北

です。好さんの見る通りです。対等に争うなら「赤と黒」の対比でしょう。スタンダードは黒を聖職になぞらえ、赤を軍人としました。

座布団が敷かれていないのが身内

伊 達 郁 夫

寅さんに世話になったと、ある男性がお礼にメロンを持ってきたのです。ある日、おいちゃん一家がそのメロンを食べているところへ寅さんが戻ってきたから大変。数の内に入られていかなかった寅さんの怒るまいことか。寅さんは身内ですから一切れを残しておくべきでした。しかし寅さんも忘れられて怒るほどでもなかったのです。放浪から戻って座布団を敷かれることはないのですから。

スピーチは自信あるのに口説けない

吉 岡 修

「幸福の黄色いハンカチ」の高倉健にはしびれました。「これから夕張に向かう。もし、もし、まだ一人暮らして、お前、俺を待っていてくれるなら、家の竿に、黄色いハンカチをぶら下げておいてくれ」と。

「無法松の一生」で阪妻は想い続ける未亡人に別れを告げに行つたのです。「奥さん、俺の心は汚ない、奥さんにすまん」
修さん、映画から口説きを学ぶのです。

(「上方芸能」誌発行人)

自選集

小島 蘭 幸

淋しきよ震度三にも目が覚めぬ
墓一つ建てた弟と私の名
とんちんかんが続く忙しさが続く
食べて下さい飲んで下さい唄います
島守る一老人の眉である

三宅 保 州

メールアドレスはもちろん五七五
またの名を紀州太郎と申します
エンディングノートはやはり句帳です
夢消えぬようにラップをしておこう
無駄骨の一つひとつも骨になる

宮 西 弥 生

一つ捨て三つ拾うた自立心
日本語がときどきひとり歩きする
水百選明日のいのちを保証する
花散らし雨もそれなりすべきこと
思い出の一点にある生みの親

どこにも仏

八木 千 代

おいくつですか 筍を買おうたくしに
顎の骨 美味しいものがおいしくて
誤嚥せぬように咽には咽仏
錆びさせてなるものですか 蝶番
肩甲骨がさわぐ翼の萌かも

八十田 洞 庵

銀行で社長の決意揺れている
ハンサムな新人レディの目のやりば
スタンドを湧かしプロ入り決めて
新人の意外に伸びた棒グラフ
社の未来俺にまかせと酔っている

両川 洋 々

火のページめくるとパンクするハート
なぜかしらポックリ寺の番が来ぬ
発車ベル聞いてポツポ屋黄泉へ発つ
子が産めるロボットなんてマジかいな
賞罰は無いが浮気は二つ三つ

板尾岳人

オーイオイお茶お茶お茶を淹れてくれ
なんやかや言うても惚けて来た八十
逝く途中通行止めと書いてある
竹の子の刺身とホタルイカあれば
壇蜜と愚息共演したらしい

奥田みつ子

きれいな言葉急に美人に見えてくる
生き方を問えばそれぞれ自分流
二人並ぶ小さい方がお姉ちゃん
手捻りの亡兄の湯呑みのあたたかみ
父の大きさまんな許して笑ってる

河井庸佑

決断の鈍さつくづく自己嫌悪
上りよりこんなに辛い下り坂
風向きが読めず苦心の会議室
二の足を踏んで遅れたのを悔やむ
一步退き二歩前進の策を練る

川上大輪

ヒット一本今日も仕事が出来ました
神様に見つかったから遊べない
掴んだら消えるあなたは狡い人
わたくしの財布を覗く春の風
充電中だから話は後にして

小西雄々

真人間らしく光った靴を履く
汗をかく蛙の気持よく分かる
騙された振りして丸く見る世間
薄味に馴れて久しいわが命
ハミングをすればコスモス揺れだした

斉藤 焔

みちのくに生きるりんごの道生きる
クレヨンがお花を生んでくれました
種蒔いた順に咲くとはかぎらない
むらさきの花に逢いたく来た野道
りんごの芽一つひとつが抱く未来

塩満 敏

孫のため憲法九条守ります
傘寿でも恋をしたいと思えます
柳友が増えてにんまりしています
人生は川の流れのように進みます
福祉国家介護介護の音がする

新家完司

余生っていいねのびのび朝寝坊
昨日より賢くなっているカラス
段差が分かる格差が分かる車椅子
神さまの名前はどれも嘘くさい
としよりの行く手に霧が立ち込める

恒松町紅

許し合うこんな嬉しい事はない
曾孫の手おやつの皿が待っている
老木も今を盛りと花の色
喉はまだ元氣昔の数え唄
左手の辞書は離さぬ老いのペン

津守柳伸

満開を雨天中止の同窓会
人生にあまたの試練ある余生
マイセンで飲むコーヒートの丁寧語
八つ当り桜前線北上中
日替りで温度調節する湯舟

遠山可住

玄米をじっくり嚙んで老いている
芸術家の顔出来上る無精髭
お化粧という楽しみがある顔で
後期高齢これが最後の宝くじ
沈黙の父の本音を読む日誌

都倉求芽

また一つマクドが消した純喫茶
花粉黄砂それでも布団は外で干す
ゆっくりの日ざしにのって家事も春
禪寺も世俗にまじる紅しだけ
なにももの邪心は持たぬ春の闇

土橋螢

長生きのくすり玉露をのんでいる
住職に佛になれる話聴く
合掌のむこうに菊が咲いている
威張っても孫とおんなじ背の高さ
歳月を笑い話で語り継ぐ

西出楓楽

春は逝く甘い返事の来ぬままに
大吟醸心の襲へ染みわたる
春愁に尖ってしまふ言葉尻
バイオリズムの調子が狂う春の坂
まだ死ぬ気ないから弾む死ぬ話

仁部四郎

年を追う梅雨の疲れが気にかかる
晩酌でとれる程度に疲れたい
疲れたとも言わず早寝の二人きり
国会の質疑疲れるべきである
原爆へ背伸びで民は疲れぬか

林瑞枝

水飴は月のしずくか樹の香り
ドイツ語の達者な医師で娘もドイツ
喜色满面活気の素がおいでやす
ユートピア蜜泣く娘の背まで舞う
白寿まで錆びない笑う父母の恩

旅人もひと時愛でる花の下
 太陽も太郎も酔うて五千本
 検査晴れ今日の桜は日本一
 幾十人の奉仕で集うぶどうの会
 神さまの変らぬ愛に花見でき

前 たもつ

政岡 未延子

始発駅希望の手紙おくり出す
 手紙から向こうが透けてみえる文字
 振りむけばどのロマンスも不発弾
 ロマンズグレイまだ恋敵やっている
 ロマンズも手紙も古い絵になつて

第六回「ごんぎつねの郷」 全国誌上川柳大会

課題 「郷」(里) (二句詠)

選者 (十五名共選)

高瀬 霜石・渡辺 松風・丸山 健三
 加藤 鏗・中山 恵子・赤松ますみ
 樋口由紀子・石橋 芳山・梅崎 流青
 浅利猪一郎 他

投句料 1000円(切手不可・小為替使用のこと)

締切 7月31日(消印有効)

用紙 所定用紙または便箋に作品・住所
 氏名・電話番号明記

賞 20位まで呈賞

投句先 〒475-0805 愛知県半田市浜田町2-1-4
 川柳きぬうらクラブ

「ごんぎつねの郷」全国誌上大会 宛
 大会実行委員長 浅利猪一郎
 問合せ 電話・FAX 0569-26-0721

温故知新

『谷垣史好句集』より

愛されている証拠が女欲しいなり
 形見分け早や団結がこわれかけ
 急ぎ足も友情もこれまでか
 煙草銭だけでまんまと飼育され
 人前だから握手で我慢する
 発奮するたびに積んどく本が増え
 春風に乗って納税督促状
 束の間の人気もう脱ぐものがなし
 姑の皮肉茶漬へ流しこみ
 雨つづきコンピューターも狂いそう
 男一匹たかが私用に気をつかい
 村捨てる旅へ見送る母があり
 もう他人ではない朝日眩しすぎ
 夕陽には祈り朝日は拝むもの
 屋上のこれは助からない高さ
 病名も言わず注射をしましよ
 思いきり喧嘩 夫婦のミゾがとれ
 意地張った後ろ姿が淋しそう

水煙抄

西出楓楽選

和歌山市 磯部 義雄

雑踏の街をうろろう立ち泳ぎ

妻と子の狭間で今日も浮き沈み

両立は無理だサイコロ振ってみる

沈黙し小首傾げている主治医

終盤を見据え中位で折り返す

名案が浮んだ頃に桜散る

東京都 井上 つよし

声美人揃えたラジオ深夜便

雨にも風にも郵便ポスト凜と立ち

襖濟んだと独り合点のインタビュ

栄光と挫折の昭和裏表

八十坂部品あちこちガタが来る

妻の料理に飼い馴らされて元氣です

高槻市 原 洋志

約款を抜けると広い麦畑

ありふれたドラマ水が水になる

地球からちよつと拝借現住所

花便り通りすがりの風に聴く

ブレイキの効かなくなつた白髪染め

外反母趾少し生き方変えてみる

大阪市 高木 道子

身から出た錆が染み込む心電図

ならぬことはならぬ隣国浅ましい

一人居の今は昔の笑い皺

月命日の読経木魚のハーモニ

朝ドラの半年毎の始発駅

五欲抱きあと幾歳のくり返し

岡山県 田中 恵

山桜居場所を強くアツピール

水溜りにわかにも出来た花筏

初恋は花いちもんめ程の味

甘えたい母の匂いがする苺

捨てられた大根けなげに花咲かす

探し物ついに日課と成り果てる

竹原市 若年 幸子

年金も春闘の輪に入りたい
完治三か月あつけらかんと言う外科医
私にも耐震補強要りそうだ

二三病まとめ面倒みえています

年重ね今日も通院お洒落して

満開まんかい日本に産まれ良かったなあ

加東市 安達 厚

夫婦して移る欠伸に笑いこけ

生きるとは悩むことだと卒寿言う

失敗はよいが自慢は聞きづらい

一人居はこんなものかと妻の留守

ご無沙汰が新米とりにやつてくる

したくても自慢の出来る種がない

横浜市 巖田 かず枝

六十五なるほどなあと鏡見る

六十五ぼちぼち行こか下り坂

六十五笑つてばかりいられない

六十五一週間の早いこと

共稼ぎタッパー持つてやつて来る

リクエスト孫はいつでもハンバーグ

米子市 湯浅 俊久

休みなし妻の料理は日本一

助け船待つて作った笑い皺

禁句などなかったように話す酒

また明日輪ゴムで締める菓子袋
いい天気冬に嬉しいプレゼント
角砂糖カップにひとつ丸く溶け

大阪市 太田 としお

ベンツでも無断駐車は許さない
豚饅か御座候で悩んでる

獄中記したたかですねホリエモン

花より美人なかなか男やめられず

晴れが良し曇りまた良し桜咲く

新聞に騙されぬよう気を付ける

札幌市 佐藤 登美子

目覚めれば小鳥がうたう山笑う

幼児から甘えるしぐさ女です

紅を引き羽化の気配の少女A

迷ったらナビより人に聞く勇氣

復興も亀の歩みで焦がれてる

旅帰りご飯みそ汁胃を癒す

倉吉市 岡崎 美知江

泣きません車椅子でも歩きます

私の歩幅に合せ歩く孫

同じ風つかんでみたく土手歩く

一寸だけ想いが違い砂をかむ

咲いて散る花の命をもらつとく

夢いくつシャボンの玉となつた空

山口市 中前 幸子

薫風へちよつと気取つたベレー帽
ポケットに微罪を一つしのばせる
寝台列車で過去へ旅発つ切符買う
恩を返して鳩尾が軽くなる
ひと呼吸休んでリズム取り戻す

松山市 神野 きつこ

ストレスも一緒にむしる草むしり
崖つぶち立つて初めて力湧く
はらはらとフロントガラス花吹雪
アベノミクスに備え車を売り払う
ニギビ面真つ只中の反抗期

今治市 渡邊 伊津志

墓参り巡る記憶を追いながら
親不孝悔いる心で磨く墓
鷹に聞く空の一番青い場所
居ない筈ないがと窓を呼んで見る
断れば済むことながら腹を立て

香南市 桑名 孝雄

DNA 役目果たせたかは疑問
竹光が重たくなつた居合抜き
終章はさらり本音で書き上げる
花見酒やまどごころが蘇る
生前葬すませ出撃した大和

宿毛市 増田 純子

球根に揺り起こされた春の土
野に転ぶ草のおしやべり聞きながら
移ろいは昨日の花と今日の花
北は花南は若葉日差し伸ぶ
むらさきに暮れて恋人達の刻

北九州市 岡田 幸生

終点を起点に替える定年日
断捨離に取組み軽くする余生
車椅子にシートベルトを付け哀し
深入りが過ぎたと思う縄れ糸
トンネルの出口塞いでいる病魔

唐津市 北村 松風

詰襟の息子凜凜しく入学す
ポケットに詰まつた不眠酒に捨て
ランナーはバトン渡してくずれ落ち
金毘羅に帰日も籠の世話になり
一日の疲れをいやす妻の酌

唐津市 吉富 節子

温暖化熊の生態までも変え
師のおかげ人生開花五七五
二十年伏した友逝く春時雨
夫逝きて愛の重みを知りました
入れたつもり置いたつものつもり節

佐賀県 真島 久美子

振り出しに母の言葉が置いてある
負けそうになるとやる気を出す命
コンパクトあとは尻尾を隠すだけ
こんな日の虹は一色おまけする
誰に逢う為の紅ではないけれど

山鹿市 三谷 たん吉

人間は年をとるほど罪深い
北だつて無心に遊ぶ子供たち
何もかも気に入らぬままハラは減る
春らんまん桜ばつかりエバつてる
一年中満開なのは姥桜

シドニー 坂上 のり子

鼻歌も心地良く出る鍋磨き
領有権主張し庭に住んだ蟻
アメリカの正義さらなるテロ生むや
認知症を看て百歳を諦めた
おごられる酒より旨いものはなし

青森市 菊池 京

寝押ししたはずの昨日に皺がある
諍いを炊飯にする悪い癖
不確かな思案を笑う洗濯機
家族つて藤の買い物かごの頃
桜桃忌また来年もこの場所

弘前市 肥後 和香子

おもちゃのように笑つて笑つて壊れた
配色は菜の花ソテーに目玉焼き
ぷるんぷるん五月の心掬うさじ
マイナスが山盛りです原動力
恋をする心に恋をしています

塩竈市 木田 比呂朗

水無月はいつも読書と決めてるが
今朝も雨ほつとしてるスニーカー
予報士もレーダー口に逃げを打つ
天気図を先読みしてる怠けぐせ
家計簿へアベノミクスがとどかない

横浜市 長島 亜希子

春一番もやもや気分吹きとばす
開花時期早まり花のないツアー
春が来た花山 友に会いに行く
春ですものパステルカラー着て行こう
日がのびて帰宅するのが惜しくなる

佐渡市 高野 不二

年金を財産にして暮してる
一桁の利子へ一行とつてある
貫い手がないかサンプル今日も言う
ニュース番組外は再放送で埋め
国債を俺も出した程赤字

岐阜市 平野 あずま

霜降る夜通せんぼする赤提灯

黙っててこころ通じるレモンテイ

Gパンが似合う春風伴に連れ

転勤族で故郷を三つ持つている

ドクターと話が弾む回復期

熱海市 三谷 圭角

長ささげどこへ植えてもよく育ち

欠き氷頬張りすぎて息止り

安倍効果湯の街ちよつと賑やかに

呑み代は不義理平気で捻り出す

嘘つくな青信号は緑だよ

豊橋市 藤田 千休

下馬評がひとり歩きをする人事

レンタルの若さが欲しい戎橋

贈るもの受取ることもない賄賂

遺伝子を相続してる頑固者

放浪の旅へ論吉を送りだす

愛知県 樺 嶺 志

留守にしたわすかの隙に不在票

待ちわびる配達の音今日はなく

友逝きて改めて知る人となり

小鉢割れこれが寿命と言ひ聞かす

祇園街昼と夜分で違う顔

八幡市 今井 万紗子

桜舞う恋が始まるピンヒール

たわいない話つまみに酔わされる

能書きを並べて酔わすワイン好き

笑い合う心の門を開けておく

この門を潜ってからの運不運

大阪市 阿野 寿美子

写真見てこんな時もと懐かしむ

鈍感で恋のアタック気付かない

無理かなと思つた服で若返り

呆然と石段仰ぐ寺参り

エスカレーター横の階段寂しそう

大阪市 内田 志津子

ほどほどの遠さ近さで和を保つ

少子化に子供三人銀メダル

山里の新芽競つて喋り出す

老廃物全部出したら軽かろう

桜散り水面に春が咲きました

大阪市 岡田 元

生かされて感謝感謝で今日も暮れ

今日明日と流れのままに老いを生き

ぼけたかな掛けてるメガネ探してる

金槌も夢の中では金メダル

八十路すぎ戦中戦後耐えてきた

大阪市 柴 本 ばつは

関係なしよそのお話遺産分け
顔よりも背中へしらのびよる老魔
お気を付けてわたしに助言する手摺り
背筋しゃんと昨日のことは忘れよう
粹ぶつて薄着で花見風邪をひく

大阪市 高 杉 力

会議終え本音がポツリ煙草部屋
スランプがずっと続いているゴルフ
年齢の欄は無視するアンケート
想い出が通り過ぎてくパイン鉛
戦争を知らない世代増える幸

大阪市 栃 尾 奏 子

叱られた記憶はなぜか温かい
正念場鬼一匹と向かい合う
定年の日も真つ白なシャツの襟
白い雲チヨット寄り道したくなる
無骨さをとろり煮溶かすのは女

大阪市 松 田 聰

新年度値上げラッシュが待つている
新卒も花見の席でうちとける
信号を親が無視して子が叱る
悲しさをハードロックでまぎらわす
年月の過ぎる早さが恐ろしい

大阪市 吉 田 知 之

大師道辿つて旨い水を酌む
老人はデジタルの世に住みにくい
何事も早や合点で損ばかり
好きな酒老いて梅酒に替えました
卒業式振袖袴和ませる

池田市 上 山 堅 坊

喜寿過ぎてやつと卒業二日酔い
負けないぞますます目立つ物忘れ
がつがつとするほど負ける勝負事
喧嘩してようやく解けたわだかまり
解決の糸口探す縄のれん

泉大津市 助 川 和 美

カード増え厚い財布に金はなし
同窓会コーデイネットは妻まかせ
うなずけば父の説教終るはず
ポイントよりその分安くして欲しい
卵焼きご馳走だったお弁当

貝塚市 石 田 ひろ子

満開の桜に心吸い取られ
絨毯のさくらをそつと踏んで行く
赤土を着て竹の子が友と来る
仏壇に春をどうぞとさくら餅
パート代祝いに化ける新学期

貝塚市 吉道 あかね

岸和田市 中岡 香代

此の位と自分許してから老ける

六十路には六十路の芽吹くものがある

たんぼぼとふわりと降りた現在地

たそがれて忘れ上手にしてくれる

葉桜の頃に私を取り戻す

河内長野市 藤塚 克三

ラッシュ時に諭吉で切符ブーイング

神棚に御神酒を供えて願禁酒

節食を心懸けたら便秘気味

間違つても株はするなと釘刺され

あの時はその気でしたと今言われ

河内長野市 穂口 正子

初年金やつと手にしたケーキ買う

初出社花びら肩に子が戻る

鷗外も漱石もみな若くなり

男つていつも容姿で値踏みする

クラス会老いも持病も小休止

河内長野市 渡邊 修

朝ドラに三陸の旅思い立ち

春嵐青菜の下で花見酒

球界の二刀流に気をもます

銀盤のミス無き美技に手汗して

カレンダー先に書き込む医者予約

ありすぎて何が要るのかわからない

石段の数へ遍路を庇う風

ユニークな考え浮かぶ会議中

落書きの数式解けぬ駅トイレ

正論にユニーク混せて生き残り

堺市 近藤 治子

生きがいの一つになったリサイクル

老後預金チビチビ出して遣つてる

アルパムが引き出す過去にどんぶらこ

一匹になった金魚が跳ねている

お手軽にテレビでもらう旅気分

堺市 羽田野 洋介

一病の話題尽きない同期会

幸せの尺度を少し変えてみる

早過ぎた拍手非難の眼がきつい

親しい仲も金が絡むと隙間風

食べる口しやべる口とを使い分け

堺市 大和 峯二

主義主張貫き生きる誇らしさ

赤飯で長寿念じる誕生日

我が命ありがとうねで終りたい

太陽光あふれていても再稼働

東北を脳裏に刻み辛苦耐え

高槻市 田中 由美子

連れ舞いの蝶ひらひらと真珠婚
知りたくて一人ピエロを演じ切る
後ろから目隠しをする手が温い
度の合わぬ眼鏡で世間狭く見る
何かひとつ足りない顔のままに古希

高槻市 鳥居 宏

老いた町幼児の声に春の風
夜遊びの傷が勲章猫帰る
キッチンに挑戦の度皿が割れ
息抜きのもりの趣味に攻められる
龍宮も計測をする放射能

高槻市 三谷 白黒

お二階に何しに来たか忘れてる
多過ぎる高齢ランチ頼みたい
金要らず幸せ一杯自然流
こつそりとうつ憤晴らす五七五
アンテナを六旬目指して高くする

豊中市 荒巻 夢

硬い話だけで別れたクラス会
欲という虫一匹がままならず
何にでも逆らいたい日あるのです
スキップをしたいが足がままならぬ
小豆焚く匂いほっこり母徳ぶ

豊中市 池田 純子

母が居て実家に甘い風が吹く
お水取り火の粉ほたるになつて飛ぶ
星占い今月恋をするらしい
祝い膳鯛も踊つて焼かれてる
サロンパス貼つてバアバの修行中

富田林市 関 よしみ

どん底でかすかに耳にした音符
リハビリにゴミ当番を買つて出る
飾らないところが生きているあなた
手品のように告白を聞いている
ねぎらいの一言引き金を止めた

富田林市 古田 千華

決算期コンピュータに助けられ
春だ春だ四角ばらずにさあ行こう
はつなつの繚乱の薔薇わたし呼ぶ
足るを知れば決して怒ることはない
新刊書高くて文庫出るを待つ

富田林市 山野 寿之

蓮の葉の情念水を寄せつけず
指立ててその後の風を探してる
詮索を止めたら美しい夕陽
これからの話をしよう野のすみれ
泰然と次の青まで待つゆとり

羽曳野市 磯 本 洋 一

雪の宿舌に染み込む蕪漬け
満腹と言ったが肉に箸が飛ぶ
お金より大切な物孫が聞く
競わずにぼちぼち行けば楽なのに
わかつたか叱る言葉の接統詞

羽曳野市 藤 原 大 子

さりげなく愚痴を拾って言葉かけ
好奇心道連れにして旅をする
通りすぎた郵便バイク音空し
道草をミニ探検としゃれてみる
嗜み合っていないが会話進んでる

箕面市 酒 井 紀 華
(紀子改め)

雨風にたえた門柱苔がつく
門出の園児初々しくも頼もしい
寝返りを打てど秒針冴え渡り
春の音探して歩くスニーカー
負けて勝つこれが私の特技です

八尾市 田 邊 浩 三

復興に見せる日本の底力
孫たちの目付きが変わる贈与税
調味料全部手元に鍋奉行
風化だけは許してならぬ災害地
盗み酒花粉様様マスクする

八尾市 西 川 義 明

花粉症にこと寄せて聞く子の暮し
奇数月財布乾燥注意報
帰る日を信じ仮設で住む絆
八十歳のテンポで挑むエベレスト
子が巣立ちうれしくたたむ父の傘

八尾市 前 田 紀 雄

裾野から染めて欲しいアベノミクス
花散らし各地に災害出すゲリラ
糊代が少なくなつて己知る
シーサーは主権回復騙されぬ
アナログ派携帯ラジオ離せない

八尾市 山 根 妙 子

球春のルーキーを追う人の波
花東がおつかれ様の退官日
華やいでやがてさびしき桜花
目をつむり臚まさぐる春の宵
明日もまた覚めますように床に就く

大阪府 小 栢 こずえ

人の世も花の命もひと夜さに
行くあては無いが気合いの化粧する
木々の芽に昨日の日ざし今日の雨
春愁や明日は我身と話聞く
おとなしく時の流れに生きる知恵

大阪府 神野 千恵子

待ちぼうけして好かつたな今の幸
手ぶらです失うものは何も無い
心地よい言葉で嘘がばらまかれ
イノチガケパソコンの字がしらじらし
もういいと思つた時に見える虹

大阪府 畑 中 節 子

春うらら孫の絵手紙ふきの藁
ど忘れを平気で通す年の功
豊作を念じて初種の種を蒔く
初蝶の空の碧さに華やげり
寄せ鍋の具にお喋りも入れて食べ

神戸市 木村 忠 義

世渡りに心の鍵は手放せぬ
お人柄確かに顔に書いてある
診察で褒められた日は上ランチ
おかねでは買えぬ心の美しさ
マイペース乱され変な一日に

神戸市 玄 番 美恵子

深刻な話しはちよつと酔つてから
味付けに迷えば母のさしすせそ
散歩道ちよつとちよつとと長話
内緒よと言われてわたし具になる
散る花に別れを惜しむ年となり

神戸市 能勢 利子

叱つた娘に叱られぬ様生きている
なにげない言葉刃になることも
コイン投げ決めても迷う意気地無し
単身赴任夫は家事に強くなる
若い時こんなに辞書を引いてたら

神戸市 松井 文 香

春爛漫発心します遍路旅
雨の中これも修業と参る寺
澄んだ空一緒に写す竜馬像
もう一人の自分に出会う遍路旅
満願の法話夫の涙みる

加東市 岩 本 美緒子

うぐいすの声今日は良きことありそうな
販売機温もり欲しく押すコーヒー
大正期と告げ川柳の輪に交じり
努力買われ棚の並んだ盾トロファイ
桜花爛漫足と根気の不甲斐なき

川西市 大坪 一 徳

痛かつた父の拳骨懐かしい
定年後何でおまえが偉くなる
皿洗いゴミ出し慣れて古希迎え
バスツアー煙草友達すぐに出来
満開の桜はどこか他人事

川西市 日野岡 和之

年金のどこからひねる贈与金
受け継いだ愛の絆は子へ孫へ
後出しの政策ばかり何故もてる
ひなあられ母の話に立ち停まる
神様は何故許したの原子の火

篠山市 酒井 健二

リタイヤし話す人なく声枯れる
帽子取り黙禱で聞く波の音
ライバルと呼ばれた頃が華だった
職選ぶ余裕ないまま就活へ
未来知る神のつもりで株を買う

篠山市 佐々木 勇

七十億抱えて地球歪まない
何たって名脇役の豆腐でした
飛び出した口は戻らぬブーメラン
新聞の今日は侘しい休刊日
太陽のご恩忘れていませんか

篠山市 藤井 美智子

気がかりの大役済んださわやかさ
初出勤孫人生へ光る朝
うっかりをカレンダールメモ助け船
悩み事今は無い胸すいている
胸中の意地悪鬼に豆をまく

三田市 多田 雅尚

憧れのあの子の指に先客が
父親の背中はいつも僕の敵
辞書を引き閉じた途端にまた忘れ
栄誉賞政治の意図が見え隠れ
仮釈放謝罪の意志が伝わらず

宝塚市 丸山 孔一

モチーフに陰と陽あり写生する
境目はどこか体罰愛の鞭
事故が起きその時時の専門家
飛び起きる犬も見るのか春の夢
終活のノート熟考夜が明ける

兵庫県 上田 ひとみ

旬のものの頂き心浄化する
小さな喜びたと頼みます
花のこと教えてくれる道の駅
桜咲く窓全開の気持です
何度でも繰り返し読む花手紙

奈良市 尾畑 なを江

無人駅たんぼぼ群れて咲き誇り
定期券診察券と入れ変わる
過去は過去今を大事に生きるべし
だとしても想い出すすべて宝もの
嘘を言うお人障が曇ってる

奈良市 前田弘恵

孫未婚曾孫を早く見たいのに
片付けを怠る部屋に不意の客
生かされて不意のお迎え願うのみ
縮まった身体が春を待ち侘びる
姑との確執今はよき糧に

和歌山市 北原昭枝

につこりと笑う相手に油断する
右ならい出来ずにひとり浮いている
鬱な日は放し飼いするガマン虫
辛抱と根くらべする釣りの糸
ガラス窓しつかり拭いてつなぐ明日

和歌山市 福呂秀子

苛立ちをぶつける様に春嵐
老病死身近において日々感謝
お花見でなごやかさ増す寺の鐘
御仏に甘えて今日も手を合わす
感情をぶつけた後は苦い水

岩出市 村中悦男

追伸に本音見えたりかくれたり
連れ添うて六十年は影ひとつ
わが余生本音は丸くやわらかく
誘われる身の喜びに背を伸ばす
余生なら曲った道もいと楽し

紀の川市 楠原富子

天国も地獄もあつた夫婦旅
潜んでたいじめにやつと光さす
閉じ込めた過去を気づかう鍋の蓋
ついた嘘隠し通せず途中下車
ダイエツトもつたないが仇となる

田辺市 小川イセ

ありがとう生きてる日日にありがとう
傷心をそつと撫ぜとく里の風
母が居て心底温い掘り炬燵
菜の花が咲いてうれいし事ばかり
靴下を繕う母を恋う灯下

鳥取市 大前安子

散る花へひよいと手を上げさようなら
新人生ひよいと声掛けおめでとう
すれ違いひよいと振り向く母の影
ワツ元気走り寄る足名が来ない
いただいた春菜でひよいとレシピ浮く

倉吉市 中村毅

ここだけの話そこには止まらず
満開の桜寒さに黙り込む
恙なく一日終えて油差す
お若いねお世辞を言つてうふふのふ
返さない出世払いをいいことに

倉吉市 堀 かずこ

鳥取県 大塚 美代子

あちこちと桜前線真つ盛り
この胸に破れた夢を抱いてる
外出は空に相談決めている
晴れた日は空気がうまい一人じめ
旅日記永久保存宝です

境港市 中井 虎尾

鳥取県 岡村 孝明

朝が来た未開のドラマ始まりぬ
おれだつて世に出たいよと二千元
止つたか休ませてやれ古時計
鯛焼きと鯛の焼いたのと違うらし
栄誉賞次はオレかとタマゴ焼き

米子市 生田 和之

(寒之改め)

松江市 武島 ちよえ

戒名に雅号入れるか思案する
ソース掛け子供カレーを食わされる
ポリデント知らぬ奥歯で豆を噛む
まだ若い人で持つてる老人会
酒のない会議本音を封じ込め

米子市 見山 温子

雲南市 菅田 かつ子

全開の窓に吹き込む春の風
できぬ事年のせいだと言うておく
目には目と障子を少し荒くしめ
移り気な気候装い決まらない
転た寝の夫の姿が小さくなる

湯けむりの中に聞こえる国なまり
忍び会う恋を隠した霧の雨
朝霧の中を並んでランドセル
霧の中やつと抜け出た受験生
しおれてる花壇霧吹きかけてやる

漢方の膏薬張つて元氣出す
文化祭地域の絆盛り上げる
よいじじになるう孫には猫の声
春の日へ野菜に負けじ草伸びる
春うらら電気代にも表れる

真つ直ぐな道で人間磨かれぬ
御健勝勝手に決めて来る便り
身の回り片付けられぬ春日和
大らかに包む施設の灯が温い
効能書いっぱい詰めてサブリ来る

さりげなく夫の繋ぐ手の温み
ふり向けばあれやこれやの恥ずかしさ
とりあえず棚の埃は放つとかれ
屈託の無い赤ちゃんの笑い顔
夫婦とや小さな嘘の二つ三つ

岡山市 工藤 千代子

あなたとの間に浅い川がある
母と娘の旅を終わりにする夕日
幸せを自問している鳩の首
ミルクティーゆつくり誤解ほどかれる
愚かだと言えないこともない椿

岡山市 丹下 凱夫

奥山もこらえ切れずに笑いだす
ホームラン落ちたあたりが草萌える
右肩のよく凝る人は貧乏性
花吹雪のように散骨してほしい
寝てしまう癖ついている散髪屋

岡山市 永見 心咲

投げ出した脚が待つてる擦り癖
トンネルを出るたび強くなる絆
ええ格好したい大事な人の前
アンニュイな服脱ぎなさい明日は晴れ
ビードロを吹いて自由を羽織る五指

岡山市 藤成 操江

戻れない歳月今を手で囲う
真心を渡す返ってくる笑顔
行き違う言葉さらりと流しおく
冗談で躲し火種を遠ざける
飽き性で材料ばかり溜めた箱

岡山市 前田 恵美子

家計簿にまだソロバンをはじく指
庭の花見て見て見てと声上げる
くたびれた顔でも私生きてます
ピンチにはチャンスの新芽のぞいてる
沈みゆく夕陽いつそう燃えさかり

瀬戸内市 東嶺 ますみ

冬キャベツ無口な芯にある炎
ライバルと握手した手が冷えてくる
月曜日ムズムズしだす妻の羽根
カーナビをつけた余白でまだ迷う
ダンゴ虫もつといばつていいんだよ

玉野市 片岡 富子

ユキヤナギ桜引き立て助演賞
砂利道に重心フワリ靴悲鳴
花に酔い方向音痴出られない
わがままに生きた証しだこの脂肪
息子らの一喜一憂共有す

竹原市 國實 力

惜しまれて終るその日も既に過ぎ
八十五それがどうした言う他人
折りたたみ難儀してます右の膝
オイ若いの日本語ちゃんと守らんか
失礼千万スマホしながらする返事

思いやり精一杯の嘘をつき

宇部市 高山清子

記念日になった時からもう風化

今日も絵にならぬドラマを繰り返す

訂正の消された文字が気にかかる

大洲市 花岡順子

子の巣立ち心に風が吹いている

ここまでの線がポットにだつてある

ポイントを決めて釣竿動かない

沸点を過ぎると怖いものがない

四国中央市 篠原久

大福を出されてじやまな血糖値

街のニュース集め発信理髪店

お好み屋で同級会とは格が落ち

絵手紙のタンポポ綿毛とぶ構え

高知市 三谷待太郎

殺生に行く道すがら遍路に会い

わが持病第三楽章に入つたか

誕生日何かありそで何もなし

負け惜しみそれが酒肴のいごつそう

北九州市 小松紀子

お蔭さま今日も感謝を忘れない

不器用に生きて時どき損をする

葛藤と折り合いつけて年を取る

親も子も少しゆずって生きている

TPP玉虫色に染められて

バイキング体よろこぶ土地仕立

言い訳のあとのコーヒーほろ苦く

白内障術後世界がバラ色に

福岡県 本田さくら
唐津市 岩崎 實

ふるさとを最後みんなで合唱し

電気料値上げで会社押しつぶし

よしあしねデフレ対策物価高

行く末はわからぬままよそれでいい

熊本市 杉野羅天

一斉開花アベノミクスをうらなう世

人生の明日をうらない桜散り

街中がビルの林になつている

大作家と心通じたあれやこれ

札幌市 富永恵子

好きな本好きな時間の二十五時

真夜中に突然笑うペンの先

サンガラス映る姿に笑みを足し

舗装出る雪解け後のこの至福

弘前市 高森一吞

アベノミクス青森へ届かない

ネオン街払つた額で顔がきく

燃え尽きて忘れた頃の栄誉賞

老木を雪は無残に折って捨て

つくば市 嶋本 喬

東風吹かば目臉のかゆい花粉症

鳩雀従え烏ごみの上

孫達の帰った後の呆け顔

老母の居間ルンバの進む道険し

東京都 大竹 一良

そわそわと妻の初産酒で待つ

数々の罪ほろぼしの遍路旅

バス旅行帰る車中は舟をこぎ

悪い癖やつかい事はすぐ逃げる

東京都 高岡 弥生

忘れないコンロの横にタイマーを

体罰も辿り着いたはマニユアル化

思う様行かぬ子育て親修行

後始末全ては私家族分

川崎市 成田 せいじ

政府にも見る目があつた栄誉賞

ゲン担ぎ南東向いて丸かぶり

転勤の度に方言増えていく

今度こそだまされないぞ衣替え

富山市 有澤 嘉晃

贈呈の花の数だけ胸を張る

三角の楯円にまとも議長案

裏の裏を読んで仕掛けた罠に落ち

はみ出した分だけ酒のせいにする

静岡市 渡辺 芳子

この地球丸裸なりテレビジョン

このテレビ見せたかつたな亡弟に

妻母の務めの終えし人生よ

なんと言つてもやつぱり若く見られたい

江南市 脇田 雅美

ジム通い脂肪を脱ぐと決意する

檄やせにああだこうだと喫茶店

歯ごたえに小気味よい音生野菜

生き上手くよくよせずに前向きに

大阪市 浅井 公平

済んだこと焼きもちやかれ気が沈む

エステ通い妻へそくりを持つてるな

あの時の勝ちを焦つた悔いがまだ

焦るなあ締切り近くヒントなし

大阪市 寺本 実

寝つかれず心の音を聞いている

ジंकスを決めて自分が縛られる

ポックリで遺産はないが子に奉仕

迷信と言いつつ参る厄落とし

大阪市 梅里 南天

年の差婚生まれくるのは子か孫か

懐かしき友は自分の名を忘れ

亡き人と時々出会う安酒場

フランスの子は軽々とフランス語

大阪市 平井露芳

避難場所身近にあつた歩道橋
電子書籍まくる楽しみ奪われる
飼主より先にペットが死ぬさだめ
紅白で甦つたかヨイトマケ

大阪市 藤田武人

ろう石で夢を描いたケンケンパ
またひとつこだわりの店消えていく
縄跳びの中になかなか入れない
モノクロの愛が輝く老夫婦

大阪市 前川善之

宝くじ夢を買つても夢は夢
日中韓波を沈める知恵がいる
電氣を使う使わぬ値が上がり
人生の坂を上がるもマイペース

泉佐野市 稲葉洋

胸の激浜で叫んで吹っ切つた
綿埃ばかり溜まつて寡夫の閨
見てくれはごついが母の蕨餅
若葉の精もらつて明日の活とする

河内長野市 大島友子

定年後地域に生きる挿し芽する
甘え下手泣いて拗ねては困らせる
声明に歴女ハミングコラボする
振り向かぬ妻の背中が吠えている

河内長野市 辻村ヒロ

五欲まだ追っかけしたい八十路坂
クラス会裕福そうな顔で行く
頑張るのレットル剥がし気楽です
陰口の輪の中降りる後ろ髪

堺市 梅木澄空

瘦せたいと家事そつちのけジム通い
無人売り買うのやめとこ値切れない
起き抜けのタバコ一服我が至福
意気投合ワイン蒞蓄深夜まで

堺市 増田和幸

核合戦一つ違えば地球ゼロ
金帝国核の脅迫やめようよ
車捨てこれが本当の無事故です
円安も中小零細置き去りし

豊中市 貝塚正子

甘い父キビシイ母で子を育て
物忘れひどくなつたら気楽だわ
年寄りと言ふなキャリアが永いだけ
この人に負けて何故だか心地よい

寝屋川市 荒川鈍甲

雨に降られて花海棠はしおらしい
ヨイトマケ切ない昭和母の歌
ざわざわとざわめいていたのは昭和
万葉集が時空を超えて行き来する

寝屋川市 岡本 勲

便利すぎ不便知らない子が育ち

片手間でやるから家事が雑になる

湯どうふが別れ話をきいている

歩幅合わぬが不思議ともった五十年

羽曳野市 安本 美喜

朝採りのアスパラ生で齧り付く

野球観戦ボインを写すニューヨーク

夏蝶よアイスの蜜も欲しかろう

犬も猫も我が家はみんな花粉症

東大阪市 西田 いくひろ

恥と汗かいてへこまず立ち向かう

藤棚の下でくつろぐ昼下がりが

全没で沈むと飯がまずくなる

枕元メモと鉛筆置いて寝る

枚方市 河田 洋子

ブライドを傷つけ合って仲間割れ

頭下げブライド捨てて頼み事

病人のブライド思い介護する

ごめんねと負けるが勝ちと言いきかす

枚方市 松原 保

頼みます三人並ぶ元総理

大臣になって無能が知れ渡る

野村さん次のボヤキは栄誉賞

老い二人孫の願いは断われず

藤井寺市 田付 絹枝

暴力と嫉の狭間で呻く愛

中流の積もりで生きる自画自賛

出席の返事に自信待てぬまま

指紋迄ページ繰る手をいらつかせ

藤井寺市 肥山 一文

知恵の輪で自分の脳を思い知る

見舞客去ったあとから疲れでる

聞き耳をたてて噂を集めてる

正直に書けずにとばす日記帳

松原市 市川 雄太

暑くなればジュースがうまくなってくる

ステーキをたいらげ心充実し

ミサイルが国との亀れつ生みだすか

日本の経済は良くなったのか

箕面市 寺井 柳童

そばよりもうどんが似合う浪速っ子

八卦見に自信の手相そつと見せ

おれおれにうっかり返事あんた誰

二の舞はしないつもりが同じミス

箕面市 村田 恵子

心臓の毛悔しなみだでよく育つ

母が娘に見立てた着物ひまご着る

年重ね亡母の本音が聴こえます

少しずれて母娘の時間動きます

八尾市 赤木 妙子

曾孫生まれ待つてたように花便り

赤白黄雑草の花輝いて

春風を感じそろりととのぞく虫

ハガキ一枚友から春が届けられ

大阪府 坂口 公子

朝晩の元氣メールを待つ娘

幾尋もある青い海春の海

うつしえのあの顔この顔逝つた顔

星空へご挨拶してベッドイン

大阪府 西川 冷子

春の息吹き苦しい程に堪能す

八十の峠跨いで思案中

痛かった足裏いつか癒えている

思い出に進まぬ作業端切れ箱

大阪府 藤原 千恵子

終い湯にアロエ浮かべて四肢のぼす

子も離れ楽になったと隙間風

一人言大きな声で春のうつつ

それぞれに襖へだてて見るテレビ

神戸市 井上 忠貞

一手ボカ負けた悔しさ反芻す

先輩のあの一言で今がある

ところどころに煮込んだカレー子の笑顔

利口だが賢くはない人がいる

神戸市 奥澤 洋次郎

ためらいを金の切れ目が片付ける

感受性豊かな人のつややかさ

気の弱い人狙われる人べらし

契約の社会に迷う義理人情

神戸市 興水 弘

悩みなど無いよと脇に猫を抱く

啖呵切る妻の威勢に後ずさり

目頭を流しスツキリ明日の風

夫には肩の凝らない人がいい

神戸市 新保 登美子

チャイムより先に飛び出す犬の勘

孫叱るつもりがママを責めている

小さな灯ともし続けるポランティア

冷やかしの客へ店主の鼻メガネ

神戸市 山根 弘子

入院で夫婦の絆深くなる

迷ったら青空みあげ深呼吸

立つ座る何をするにもドッコイショ

ちよつとだけ老いのハートを焦がす人

尼崎市 小池 幸子

やせがまん止めて転ばぬ先の杖

桜吹雪新入学の子等に降る

冷蔵庫あるものよせて今宵鍋

雪景色眺め最高住む過酷

加東市 黒崎 美紗子

満開を眺め幸せ灰汁抜ける
借景をバックに桜咲きほこる
エンドウのつる春来たよ杖つかむ
咲く花のたのしみ夢に種をまく

川西市 山口 不動

出る杭は出る打たれても打たれても
遺影撮る良いタイミング計つてる
シャッキリが止まったところにクシャミ出る
マスクから目だけ出てる美人かも

篠山市 石田 久子

共白髪誓ったはずが先に旅
探し物母を笑った齢となり
昔です赤紙と言う人さらい
そうですねママアですとぼかしく

篠山市 北澤 稠民

テレビよりなつメロ聴いて涙ぐむ
毎日を不安材料背負いつつ
受かったよ笑顔が浮かぶ孫の顔
不足など無いのに何か憂さがある

篠山市 谷田 多美子

思い出はみななつかしく桜吹雪
リハピリの老人車押し桜道
儉約し買い溜めもして米寿生き
米寿祝いの携帯電話もて余す

篠山市 永井 かほる

それぞれの歴史を守る文化財
十葉を干して元気に傘寿坂
彼岸すぎ何もかも皆伸びてくる
生きてきて今幸せという元氣

三田市 足立 つな子

春なのに葬祭ばかり知らせくる
黄泉の国待たないでねと話しかけ
まだ逝かぬ花を咲かせる娘や孫と
うぐいすが迎えてくれる春彼岸

三田市 雑賀 一泉

へそくりにアベノミクスが呼びかける
税の無いモナコの空気が吸いに行く
私のお宝今も妻一人
親友も出合い頭に名前出す

三田市 辻 開子

介護する胸に天使と魔女がすむ
たびたびの誘いがなぜか重くなる
割引がしていただけの歳悲し
初孫を待つて早くハグしたい

三田市 野口 晶子

怒溝の愛やがてどこかへ消えていく
文字消えて行けぬ私の道標
子を守り生き抜く私湧く闘志
ぬいぐるみ並べて絵本読み聞かす

西宮市 株元 玲子

自分なりに頂点めざしよじ登る
リーダーに注目されてしゃんとする
物価高シルバー族は動けない
親の懐覗いてみたが期待薄

三木市 山口 久子

川柳をわが身一つのたのしみに
これ大事未練ばかりのゴミの部屋
慎重に考えすぎて失敗し
無理せずに時代の流れ見て過す

奈良県 谷川 憲

ふらふらと出かけたくなる春の宵
アベノミクス小遣いあがるのは最後
鼻がムズムズマスク外してハックシヨン
雛育ち巢立つた後は親忘れ

田辺市 大峠 可動

一瞬も一生も我が命なり
晩学のノート病を溜めている
桜散る花の悲願は果せたか
明日は明日仏の慈悲と眠るかな

和歌山市 さかた きく

連れて来たはずの雨傘また迷子
腰痛もうどんの腰に気迫まけ
母の耳マナーモードになつて来た
チャイム鳴り声を着替えてハイと出る

和歌山市 平田 元三

情とキレある上役に仕えた
あの雨が繋いでくれた紅の糸
慣れてます後は黙った草筆る
ワキがシテ努める街の溝掃除

和歌山市 森下 よりこ

大学の卒業旅行グルメ旅
にわとりも年を取ったか減る卵
クラス会の友も少うし耳遠し
自慢癖抜けない友が二三人

鳥取市 近藤 秋星

地上に目を桜ばかりが花じゃない
久松山今日は黄砂で霞んでる
蝶々になつて桜は散つていく
春うらら隣は布団干している

鳥取市 坂本 とも湖

子守り唄で今は私が老母寝かす
国脅す北よミサイルどこへ撃つ
リモコンの孫にわたしが操られ
被災地の天使で弱音吐けませぬ

鳥取市 谷口 回春子

ペコペコとお辞儀する度嘘つき
孫の笑み百面相もお手上げだ
価値観のハードル下げて意欲湧き
孫笑顔家族へ愛の運び役

おとなりもトイレに灯る深夜二時
鳥取市 津村 律子

温かい便座に感謝いい時代
虫潰すごめんねキャベツ売物よ
手間ひまかけて二束三文青野菜

鳥取市 西根 弘康

汗かけと言つてた親はもういない

親元を巣立つた頃が懐かしい

キャリアにはどうあがいても勝てないよ

その内と思つていても時は行く

鳥取市 山下 凱柳

匙加減間違え味方敵にする

格好良く聞こえる余暇を持て余す

ねえねえと囁く妻の腹探る

答弁に責任逃れ見え隠れ

倉吉市 田中 紀美恵

寒椿ポトリと落ちて命たえ

風呂浸りあくびバクバク今日終る

スカスカの私の心風邪を引く

眠れぬ夜やたらとあくびパークバク

米子市 池岡 たけし

湯気の立つ朝食元気溢れ出る

家族みな手づくり囲み大笑い

肩寄せて春の息吹きを待つ一家

大空を刷毛絵が流れ春の雲

幕切れのせりふ今でも耳に鳴る
米子市 小野 鶴子

おかげかなア絵馬に願いて桜咲く
秘めごとをモナリザの笑み見抜くごと
思いやり痒い所がつぼにくる

米子市 加藤 正二

おれおれにまだ出合わずに達者です

陰口は耳が遠くて聞えない

友達にわがポケ具合聞いてみる

甘い蜜無くなれば蜂寄りつかず

米子市 田村 周子

ダンボール引つ張りだこの利用価値

通る人マスクマスクでわからない

ばあさんも昔は花の少女です

少女さらちゃん雪空に大ジャンプ

米子市 野川 宣子

ダンボールから昭和の遺物ころげ出る

小さな嘘をうふふで驟す少女A

噛んで噉つて作法忘れる蟹料理

大欠伸金魚の前で油断する

鳥取県 飯野 菖子

針の道そんな昔を忍びます

気がつけば鬼は身近に住んでいた

うばいあう領土静かに海へ浮く

データではまだまだ生きている案じるな

鳥取県 下田 茂登子

やつとこさ出来た句作り没ばかり

暇はある心のゆとり見つからぬ

親離婚子供の帰る場所がない

リサイクル出来ない頭老夫婦

鳥取県 田口 清帆

悔しさを笑いにかえる五七五

春の風女が軽くなつていく

送り出す夢いつばいのランドセル

聞き捨ててに出来ぬ寝言に起される

鳥取県 橋谷 静江

幸せの真ん中において愚痴を言う

あれこれと多忙で頭回らない

曾孫達あそんで帰る花の庭

一輪の花へ笑顔の朝迎え

鳥取県 吉野 いさお

慢心の素顔が映る三面鏡

親しいとぞんざいとなり礼を欠く

癌病棟命を刻む大時計

持病増え医者と蕪蓄かざし合う

松江市 相見 柳歩

笑つたら心にぼつと灯がともる

知恵がつき猫かぶること覚えたな

告げるのは全て手書きのラブレター

散る前に来世の妻と手をつなぐ

松江市 藤井 寿代

水平線夢の途中を追いかける

完熟のメロンの吐息星月夜

鬼やんまひとりよがりの青い空

新緑に五月の足を攫われる

松江市 山根 邦代

春の野に遊んでくれた路のとう

花便り賑やかになり団子買う

友からの笑いの種が弾けてる

身についた勿体無いが離れない

出雲市 黒目 英男

のど手術大きな声を仕舞い込む

山あつて谷もあつての人生だ

いばら道生きる勇氣と使命あり

毎日が連休なのに家に居る

安来市 原 煩悩児

雲流る戦争続く世界地図

ヘルパーに頼り老爺の日が暮れる

生真面目が本気で怒る四月馬鹿

笑い出した山が鞭打つ御老体

倉敷市 安東 モモ

孫帰りに心の中の桜散る

ぱつと咲きあつという間に桜散る

春になり隣の空き家が咲く

外国で産まれた孫はブルーアイ

新川柳鑑賞 (16)

麻生 路郎

英語の質問ないかないかと父はひま

(春巢)

インテリの父が、子供たちの勉強室へ声をかけているさまが、ホーフツとして眼に迫って来る。

さて、質問が出ると、それは一寸待てよと辞書を引いてくれる父でもある。

兄遭難父を笑わぬ人にする

(参無子)

山か。海か。それは判らないが、兄が遭難した。それからというものの、父が笑わぬ人になったというのである。兄の遭難が父にとつていかに深刻なショックであったかが判る。一篇の哀詩だと言えよう。

蛇足の多さ母も老いたり

(山茶花)

女というものの、殊に母というものは口かずの多いものであるが、それが、だんだん言わないでもいいことまでくどくどと言ふようになったので、母も年をとつたなァと思つたのである。七・七の短句で簡潔に言

切つたので、その味を深めている。

角帽と歩いて母も楽しそう

(春巢)

まるで母が入学するように騒いだり、なやんだりした入試を辛うじてパスしたにしても、母のよろこびは愛児以上に大きかったのである。あこがれの角帽姿の我が子と、ただ一しょに歩くだけでも、楽しそうに見えたのである。ごく平易に詠まれているが、母の心境を巧みにつかんでいる。

アプレの娘カランラカランラと笑いそう

(恒雄)

終戦後日本の娘は明るくなり朗らかになつた。大たい、カランカランという笑いは昔の豪傑の笑い方とされたものであるが、この句を読むと、なるほど「カランカラン」と笑いそうに思える。作者の想像力が生んだ面白い句だと思ふ。

背丈だけ伸びてるように母思い

(茶仏)

着物を着換えさせずたんびに、足がニュツと出る。「この子は、まあ」である。母と並んで買物に行く。

母の背よりもズツとズツと高い。

「この子は、まあ」である。

母にして見れば、背丈だけが伸びているように思っているであらう。斯ういう母親には、うちの子はいつまでも子どもなの

である。軽い穿ちの句。

仲居して育てた母を嫌いぬぎ

(清生)

仲居族とか女給族とかいう人達は特に母性愛の強いものである。別れた男の薄情をなげく前に、すべての愛情が、そのこともへ集中するのであらう。石にかじりついて、こどもは立派に育てて見せると言うのが、斯うした階級の女の強い愛情でもあり、意地でもあるのだ。

それに反して、そのこどもは、大きくなればなるほど、教育を身につければつけるほど、こうした職業婦人とソリが合わなくなり、その母を嫌うと言う悲しい現実を巧みにつかんでいる。

母なればこそ役得を危なかり

(万古)

社会に出て間のないうちは一寸した役得もつれしいものである。それが歳月が経つにつれて一寸した役得ぐらいでは感激しなくなる。相手方もそれに応えて、少しどぎつた贈物をするようになる。しかも、欲しいものをこちらから要求するようになる。

それはもう役得の範囲を脱して、誰の目にも心算としかうけとれぬが、役得にしびれた心には、それと気付かない。

「こんなものをいただいていいの」と真つ先に危ながるのは母である。

中島生々庵句抄

〔句集「生々楽天」から 昭和五十一年癸卯刊〕

昭和四十七年・四十八年

深みゆく秋の知らせの青みかん

秋晴れだお墓詣りを思い立ち

金婚と喜寿がダブった銀いぶし

昭和四十九年・五十年

摩天郎氏句碑建立

往き交う人にこのふるさとは語りかけ

旅なれてこんな枕でも眠り

肅然と朝の陽に添え菊薫る

てっぺんが見える鏡で気にいらず

冬白く息をひそめる医者の方

夕飯はよばれるつもり昼を抜き

安らぎと不安を積んだ救急車

寝ころんでみたい花壇は水溜り

追いついてみればまぼろしふりむかず

自縄自縛遠慮がすぎた檻となり

狸寝のつもりへ寝酒効いてくる

鈍感同士打てば響くの仲という

国立劇場だからと気負う客の顔

飛び乗った動悸のまま名古屋過ぎ

それ見なはれ癌でなかった祝い酒

手本どおり書いて師匠の気に入らず

私の喜寿

切り張りで生きぬいて来た喜寿と古希

四天王寺亡母が居そうな秋彼岸

十四字詩について

佐藤美文

はじめに

俳句と川柳の違いを一口で言えば、俳諧の発句と平句の違いである。発句が俳句となり、平句が川柳になったという、簡単な図式である。その発句と平句の違いがそのまま川柳と俳句の違いである。

とは言え、平句には長句と短句がある。長句は川柳として現在も独立したジャンルで呼吸しているが、短句についてはきちんとしたかたちで一家をなしていない。短句とか、十四音詩だとか、十四字詩などと呼びながら、一部の愛好者に作り続けられている程度である。したがって「十四字詩」という呼称も、ジャンルとして確立されたものではない。もちろんこのまま固定してもらったほうがありがたいけれど、十四字詩では一つの文芸名としては、何となく安定感がない。短句、短律もすでに独立したものとして、認められたものがあるようである。ジャンルとしてこれからも生き延びていくには、呼称の固定がまず求められるのではなからうか。

かつて、今川乱魚さんは日川協で十四字詩小委員会を立ち上げる際に「俳句に七七を取られそうなので、今のうちに川柳界に取りこんでおきたい」という趣旨の発言をした。これに違和感を覚えた、というひとがいた。同じ俳諧から独立したのだから、いいではないかというのである。

しかしながら、俳句は発句が母体である。発句は五・七・五という形が決っている。その俳句が七・七のリズムにちよっかいを出すのは、いささか領空侵犯の疑いを掛けられても仕方がないのではないだろうか。七・七は平句の中のリズムだからである。だからと言って、批判するほどのことではないだろうけれども、俳句が五・七・五という定型に行き詰まり感を覚えた中で、七・七のリズムに関心を覚えたのは当然かもしれない。川柳界でも当然反応があつてもいいのである。

七・七という短いながら、端正なリズム感に魅力を感じている人も少なくない。五・七・五のリズムにマンネリを感じている人には、新鮮に聞こえたとしても不思議ではない。俳諧の短句としても、独立して鑑賞に耐えられる作品も少なくない。先人たちもそのことを知っていて、多くの人が手がけている。仄聞にして俳句の人たちが関心を持ち始めたことは、知らなかった。

十四字詩という呼称についても、定まった呼び方ではない。便宜的なもので、十四字詩では、一つの文芸とし

ての呼称としても中途半端な印象である。独立した文芸となるには、呼び方が固定されなければならない。これは議論の結果として生まれるとは思えない。自然と固定するのを待つしかない。歴史的時空間の中で、醸成されていくものではなからうか。また、一つのジャンルとして独立するのではなく、現在のかたちのまま川柳の中に紛れ込んでいるのも悪くはない。そのほうが鮮度を失わないでいられるかもしれない。

十四字詩までの道程

現在の十四字詩の置かれている現状を説明してみた。まず、十四字詩がこれまで辿ってきた道のりを紹介してみたい。別の角度からの十四字詩を知ること、新たなものが見えてくるかも知れない。

俳諧の連歌、略して俳諧である。現代では同じものを連句と称し、多くの愛好者のもとで続けられている。これは発句（五・七・五）から始まり、次ぎが脇（七・七）、第三（五・七・五）、平句（五・七・五）七・七）、そして挙句（七・七）と続く。昔は百韻、五十韻といった長いものだったが、最近は歌仙（三十六韻）が普通のようにある。

この発句が独立して俳句になったことは先にも触れた。そして平句の長句が川柳として独立した。短句の七・七のリズムが一部の人によって続けられているが、一つのジャンルとして、陽の目を見るにいたっていない。

戦国時代を経て徳川家康が天下を統一する。江戸時代という平和な時代が続き、人心は安定し、経済的に豊かになってくると、多くの人が絵画や文芸に興味を持つようになる。芸術が大衆化されていく。俳諧も市民層にもはやされてくる。芭蕉や蕪村などという傑出した俳諧師が出てくる。それを支持し、育てたのも、知識や財力を得た町人という市民層である。俳諧は前句を受けてそれに合わせた句を付けていくのもので、二句の付け合いを楽しむのだが、同時に一句として面白いのが持てはやされるようになってくる。そうした作品を集めて出来たのが「俳諧武玉川」（以下「武玉川」）である。

『武玉川』初篇は寛永三年（1750）に出る。これは俳諧の高点付句集であるが、前句は省かれて、一句独立したかたちで載せられている。編者は慶紀逸（一六九五〜一七六二）である。紀逸は元禄八年江戸の御用鋳物師の家に生まれ、早くから俳諧に親しみ、其角座側から立机した。

『武玉川』は付句集なので長句（五・七・五）と短句（七・七）との混交である。何句か紹介してみたい。

取付安い顔へ相談

初篇

松風の裾わけをする萩の上

二篇

鳶を見て居る桶伏の穴

三篇

ふる雪を口に入れんと反り返り

四篇

はつ午の日を狸うらやむ

五篇

自然を詠んだ句もあるが、人事・人情の作品に鋭いものが多い。ここで大切なのは付句でありながら、一句として独立しているということである。

『武玉川』は「誹風柳多留」（以下「柳多留」）の先駆的存在として評価されているが、文芸の見地からも評価の高い作品が多い。その後前句付けが興行化されていく過程で、短句は「にぎやかなこと にぎやかなこと」、「いそぎこそすれ いそぎこそすれ」など、繰り返し言葉に単純化されてしまつて、長句だけが川柳という文芸として独立した。『武玉川』に見られるように、短句にもいいものが見られながら、文芸として独立出来ないまままできている。

明治の剣花坊、久良伎等の改革時に見直されながら、ジャンルとして独立できなかった。川柳家の一部の愛好者の中で支持されてきた。六大家といわれる人たちの作品もある。戦後になつて昭和四四年十一月、新潟の下村梵らによつて創刊された川柳誌「武玉川」に十四字作品を作る人たちが集まつてきた。作品と顔触れを紹介してみたい。

鏡へ着せてみせる満足

月を見あげて帰るほろ酔い

納戸の隅で交わすざれ言

三日坊主の稽古三味線

下村 梵（二集）

清水 美江（三集）

北 夢乃助（四集）

柿沼 考人（五集）

鞠をついたら天と地の音

丸山弓削平（六集）

いずれも当時一流の川柳家たちである。この雑誌は昭和四九年に一八号を出して、それ以後のものを出さないうで下村梵は亡くなつてしまつた。清水美江は自分が主幹であつた川柳誌「さいたま」に十四字作品を発表し続け、それに倣うようにして十四字詩ファンが集まつてくる。美江はこの雑誌で「十四音字詩」を提案しているが、これも定着しなかつた。しかし美江は「さいたま」で十四字詩を発表し続けた。その作品群に触発されて、「さいたま」には十四字詩作品を発表する人が多くなつた。その中で江川和美の作品が目を集めた。彼女の作品は昭和四八年から四九年にかけて、わずか一年余りの期間であるが、実のある作品は注目を集めた。

他人ばかりのふるさとを恋う

かくれみの着て深みゆく沼

細いうなじに恐ろしい嘘

など、身辺雑記から心の深淵まで表現しようとして、いずれも成功している。残念ながら彼女はこうした作品を遺して、昭和四九年に亡くなつてしまつた。十四字詩に大きな足跡を残した。

その後佐藤美文が川柳雑誌「風」を創刊する際に話題作りとして十四字詩を公募した。それがそのままこの雑

誌の特徴として残った。日川協でも十四字詩小委員会が立ち上げられ、川柳総合誌『川柳マガジン』でも投稿欄が設けられるようになった。また一般の川柳誌にも十四字詩作品を見かけるようになってきた。『武玉川』から美江へ、そしていまその裾野を広げつつある。

今後の問題を探る

一見順風満帆のように見えるが、解決しなければならぬ問題がいくつもある。

まずは呼称の安定が必要である。先に紹介した川柳誌『武玉川』でも幾つかの提案があったが、固定するまでにはいたらなかった。その折のものを紹介してみたい。十四音詩、十四字句、十四字詩、短句、十四字などである。ちなみに、『川柳総合事典』には「十四字（じゅうよじ）」しか紹介されていない。つまり、詩や句として独立しえなかつたことを示唆するものと受けとめている。また先の『風』誌が呼称について公募したことがある。その折の候補名を挙げてみたい。十四字詩37、七七句19、短句8、武玉川、十四音川柳、新武玉川、川柳、短詩、川柳短句などである。下の数字はそのときの得票数である。十四字詩が圧倒的だったので、そのままそれに決めた。何となく取って付けたという観は拭いきれない。こうしたものは、自然の成り行きに任せるのが一番いいのだろうが、波間を漂う板っぺらのように安定しない。

もうひとつはジャンルの問題である。川柳の一部なのか、独立したジャンルとして旗色を鮮明にするのがいいのかというところである。独立したジャンルとなれば、川柳から離れてしまうという不安をぬぐえない。川柳のもうひとつのかたちとして残しておきたい。自由律とか、無定形とか言われるものがあるように、十四字詩があつたていいではないかと思つたりしている。

作品の優劣ということでは問題ないと思つている。三音少ないだけで、内容的には遜色を認められない。むしろ端正なリズムに支えられて、きちんとした伝達を果たしている。それがまた十四字詩の生命でもあるのだ。

いまだ多くの人が十四字詩に関心を向けている。そのことは大きな追い風のように力強いものであるが、十七字に慣れ親しんできた人には、違和感を持つ人もいるのではなからうか。大きな曲がり角である。うまく曲がりきつてくれることを望んでいるのだが…。

筆者プロフィール

昭和一二年新潟県生まれ。現在埼玉県さいたま市在住。昭和四八年清水美江に師事して川柳を始める。埼玉川柳社同人を経て、現在 川柳雑誌『風』主宰。柳都川柳社同人。（一社）全日本川柳協会理事。川柳協会理事。

著書『川柳を考察する』、『風 佐藤美文句集』ほか。

誹風柳多留一篇研究 94

清同。

732 びりつ子も有ルにおるす居たハむれる

伊吹 この場合のびりつ子は、娘あるいは女児。娘が居る年ごろなのに、留守居と踊子が戯れている。娘が居るのは踊子か留守居か、両方に居るとも考えられる。しかし、留守居の年で娘が居るのは一般的である。どちらかと言えば、娘が居る年で踊子をしているという方が、非難の対象となるのではないか。

子か式人りあるのに留守居気かつかず

明六智2

おとり子をおむすくと留守居呼と

明七義6

山田 贊。

三十ふり袖が留守居をばかす也

玉3

清 贊。

733 はやり風ぐらい花嬢つくりたて

伊吹 現代でも、病気のときは化粧しないのが普通である。今でいう流行性感冒の流行り風邪ていどの病気なら物ともせず、嫁入してきたばかりの若嫁は懸命に化粧にいらそんでいる。

730 四ツ過の四ツ手ぬげ荷を待て居る

伊吹 四つは、現在の時刻では午前と午後十時。吉原の遊女が張見世を仕舞って引揚げるのが、引け四つの午後十二時。抜け荷は、江戸時代の密貿易のことをいうが、ここでは勤め先のお店を抜け出て遊里へ行く番頭や手代など。まだ引け四つまで少し時間がある四つ過ぎに、商家の近くで出て来るお客を待っている四つ手の駕籠昇なのである。

くさり戸が明くとつけ込ム夜かこかき

一三二

伴頭ハ四ツ手へしいと言つて乗り 箋三14

山口 贊。「抜け荷」で商家であることをはっきりさせる。

清 贊。

731 松洞寺むこいへどつもく

伊吹 浅草竜泉寺町にある紅葉の名所正灯寺へ行き、それにかこつけて吉原へ繰り込むのが、古川柳の約束ごと。仲間たちから誘われるのだが、なにしろ入り智という弱い立場だから、「いえどうもどうも」と断らざるを得ない。

入智ハお慈悲くと正灯寺

箋三36

入智のつらさ花なら花つきり

一三二〇

増田 贊。字数からは「いえどうも、いえどうも」となりますか。

山口 贊。右説のほうが表示として面白い。
小栗 贊。いえどうも、いえどうも。

花よめの内ハかんさし差てねる 宝13義1
せ中カへも手のおよぶたけ嫁はぬり

二〇24

清 賛。

734 女郎衆はさそと大汗かいてぬひ

伊吹 吉原の年中行事の一つの八朔に、遊女たちが着る白無垢を縫っているお針の様子。旧暦八月一日は秋なのだが、まだ残暑厳しい季節である。だからその白無垢を着る遊女たちもさぞ暑かろうと、大汗をかきながらお針は仕事に懸命である。
雪女良たちあつかろと御はりい、

安四仁4

清 賛。

735 のみこんで居て水かねの能ウをき、

伊吹 鬼灯、黒鯛、芥子、灯心のほかに、水銀も堕胎に効用があると信じられていた。そのため、水銀の機能をよく知っているのに、初めてであるかのように尋ねている。恐らく堕胎の常習犯か。尋ねられているのは、水銀で鏡の曇りを磨ぐのを仕事とする鏡磨ぎ。

水かねてむねのくもりをといで置 初5

めつたにハうらぬはつさとか、ミとき

明六桜3

小栗 賛。「あらまア、そんな効能もあるのですか、知らなかったワ」。

清 賛。

736 て、おやが抱いて玄関にもごい事

伊吹 乳貰いの句。授乳をお願いしている家の玄関で、母乳を飲ませてくれる人が出て来るのを父親がわが子を抱いて待つてい。誠に気の毒な光景である。
子をだいて朝ねの門トにむこひ事

安四礼2

山田 賛。

乳もらいに大の男のむごい事

九25

増田 賛。ただ「玄関」に意味なきか。

山口 同右。母親が屋敷の乳母で、実の子に父親が乳貰いのように乳を飲ませに来た、というようなストーリーも考えられるが、「酷いこと」という表現がきつすぎる。

小栗 増田兄ご指摘鋭し。玄関のある家へ「てて親」ふせいが乳貰いに来るのは考えにくい。母なき子の急病（或は栄養失調）で医者へ抱いて来たか。
清 同右。玄関といえは医者である。乳の足りない栄養失調か。

737 雪隠に有ル名のむすめすごいもの

伊吹 雪隠の壁などに名前が落書きさされてる娘は、その付近一帯の若者の憧れの的である。

山田 賛。相合傘の絵などに書いてある。

山口 賛なれど、この「すごい」は賛美ではなく、名うての尻軽娘でしょう。

小栗 賛。

雪隠に書れる顔の美しさ 宝13天1

清 賛。

738 せんべい屋安いくつわの音をさせ

伊吹 煎餅を焼くとき、それを鉄製の焼型にいれ、両面が均等に焼けるように、裏表を交互に炭火の上へかざす。その焼型の鉄が擦れ合つてガチャガチャという音が、手綱をつけて御するため馬の口に含ませる轡の音に似ているというのである。それも焼型は簡単な金具であるから、安っぽい轡の音に。

田舎馬でも来たよふなせんべい屋

一八18

清 賛。

せんべいや蛤程の声をさせ

明三梅1

英語 de Senryu ⑱

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE
(岐阜保健短期大学)

一生は腐った梨に さも似たり

my entire life

rotten to the core

through and through

ひとりみれば 一人は 限りなくさびし

when I'm alone

I feel lonely

beyond description

～リバーウィローのため息～ (阿部佐保蘭の交流⑥：前田雀郎 1)

昭和初期、三太郎、周魚と並んで川柳三巨頭と呼ばれ、俳諧古句研究で名をなした前田雀郎(1897～1960)も、阿部佐保蘭の活動を応援しました。雀郎の川柳観は、「俳諧の平句の心持に立って川柳する」であり、俳諧の“こころ”の追求でした。雀郎は川柳を俳諧につないで考えました。そして彼は川柳をどのような方法で海外に普及させようか論じました。第二次大戦前、俳諧を最も受容した国はフランスでした。当時海外では一般的に俳句はハイカイと呼ばれていました。フランスの俳諧受容には、日本で俳諧に接したフランス人ポール・ルイ・クーシュー(1879～1959)の俳諧紹介によって、フランス語圏やさらにヨーロッパ諸国、メキシコ等ラテン諸国に広まってきました。

雀郎はハイカイが川柳の海外普及の突破口になると思いました。フランスに広がったハイカイは季語がなくむしろ川柳的であったので、川柳は受容されやすいと考えました。例えばフランスで最も早い時期に作られたジュリアン・ヴォカンスの大戦の塹壕生活を詠んだハイカイ(地平線をかなめに・探照灯の扇が・つばんだり、ひらいたり)「戦場百景」は川柳的です。

雀郎は「川柳の翻訳について」で「フランス人はすでにハイカイのことは知っている。しかし、川柳は初耳であろうと思う。馴染みのないものより知っているハイカイを使い、川柳は其の俳諧とは別に1科をなすものであると解説をし、川柳と俳諧の違いや、フランスのハイカイがむしろ川柳に近いのだと説明すれば、川柳をフランスに直接持ち込むより早く理解してもらえる」(『せんりう』1937)と川柳普及の方法論を論じました。この考え方は雀郎が川柳を俳諧につないで考えていたからこそ生れたと言えるでしょう。参考文献：阿部佐保蘭『川柳と翻訳』(中央公論事業出版1966)尾藤三柳編『川柳総合事典』(雄山閣1984)佐藤和夫『海を越えた俳句』(丸善ライブラリー1991)

乳母頑張る

小栗清吾

乳飲み子を残して母親が亡くなった場合、裕福な家庭では、乳母を雇って乳を飲ませる事がありました。よく乳を出す乳母を雇うことができれば、乳貰いに回る必要も無く、もちろん捨て子の悲劇にも無縁です。

在郷乳母嘆きの中へかしまり 宝13義2

赤ん坊の授乳は一日も欠かせませんから、ことは急を要します。母親が亡くなって家中が嘆き悲しんでいる中へ、乳母になる人が在郷(田舎)からやって来て、かしまって座っている様子を詠んだ句です。

乳母が荷の簾を入れる気の毒さ 五21

江戸時代、葬式の時は、忌中札を付けた簾を下げる習慣になっていました。葬式の準備をしているところへ、緊急にやってくる乳母の荷物が届いたという光景です。

目見得乳母大肌脱いで両手つき 九17

「目見得」は、正式に雇われる前に雇い主

に会うことで、面接試験のようなものです。乳母の採用条件は、何よりもまず乳がたくさん出ることですから、肌脱ぎになって乳房を見せているのです。乳房を見ただけで、乳の出を判断できるものかどうか知りませんが。

乳を見て値段をするは猫と乳母 安五仁4

乳房の様子を見て、よく出そうだったら高い賃金で雇うというのです。引き合いに出された「猫」は、猫の皮を貼った三味線のことです。乳の跡が八つあるのは「八つ乳」と言って、高級三味線として高値で売買されました。

目見得にも乳母はしたたか食つて見せ

明元義3

乳母稼業は体力勝負ですから、目見得の時にしつかりと食欲のあるところを見せたのです。もちろん、正式に雇われてからも贅沢な食事をあてがわれます。

舌平目御乳母はふてて食わぬなり 四21

現在では、舌平目は上等な料理にも使われますが、当時はまずい下魚(下等な魚)とさされてしまったから、口の奢った乳母はふてくされて食わないのです。

もつとも下魚はすべて食わないわけでもなさそうで、

いつそ身に付くと鯖を乳母は食い 明四宮3

と、当時は下魚とされていたマグロは「いつそ身に付く」(たいそう栄養になる)と言って食うというのですから、贅沢というより、自身の舌平目は駄目だが赤身のマグロは乳の出がよさそうだという職業意識のあらわれかも知れませんね。

いずれにしろ、栄養価の高い食事をしないと乳の出が悪くなりますから、雇い主も気を使います。

乳母ばかり二七日目に許すなり 明四松3

普通は、葬式後四十九日までは精進をしなければいけないのですが、乳母だけは特別に二七日(十四日)で、生臭物を食べるのを許すというのです。この葬式は、もちろん乳飲み子の母親の葬式です。

さて、乳飲み子もやがて乳離れの時を迎え、乳母もお役御免となります。

出代わりの乳母は寝顔に暇乞い 四四13

「出代わり」は、奉公人が雇備期間を終えて交代することです。母親代わりに乳を飲ませてくれた乳母がいなくなるとなれば、なつていて子供が悲しむに違いありません。そこで、子供の寝ている内に寝顔に暇乞いして、そっと帰って行くのです。佳句ですね。

愛染帖

新家 完司 選

和泉市 横山 捷也

四人掛けベンチに五人カッブ酒

(評)花の下であらうか。立っている男へ「まあ、座れや」と、肩寄せ合つてカッブ酒。最高のひととき。仲間とはいいいものである。

八尾市 宮崎シマ子

一人で食べてもつまみ物は旨い

(評)一人の食事は寂しいこともあるが「うまいもの旨い」。それは元気だから。一人暮らしの寂しさに負けていないからだろう。

明石市 糺谷 和郎

贅沢な悩み今日することがない

(評)病魔に苦しめられている人、貧乏暇なしで時間に追われている人など、欠伸をする余裕もない人に比べると贅沢この上なし。

奈良県 渡辺 富子

あこがれたお方も矢張り前かがみ

(評)自分も年寄りじみたスタイルになってきたが、憧れの君もすっかり老人になった。残念ではあるが老化は万人平等、仕方なし。

和歌山市 福井 菜摘

買うと決め少し多目に試食する

(評)買うつもりのないときは少しだけ。だが、買うと決めるときには遠慮など不要。堂々と多い目に頂戴してもいいではないか。

大阪市 谷口 義

出来るなら食事制限ない病氣

(評)歳を重ねるとあれこれ故障が出てくるのはやむを得ないが食事制限はツライ。飲兵衛なら、「…飲酒制限ない病氣」だろう。

弘前市 福士 慕情

戒名で誰も呼ばない三回忌

(評)高い金を払って付けてもらった戒名。葬儀のときは「どれどれ」と関心を示すがすぐに忘れて、法事の席で呼ぶ人など皆無。

長岡京市 山田 葉子

エステ代借しくて行つたことがない

(評)その効果が半年ぐらいい続くのであれば一万円でも二万円でも弾むが、一晩で元の木阿弥になるのは明らか。もったいない。

大阪市 古今堂蕉子

ケセラセラええ言葉やなア大好きや

(評)ヒッチコックの「知りすぎていた男」の主題歌。スペイン語で「なるようになる」。すべてそのように考えればラクチーン!

弘前市 高瀬 霜石

生きのびて夕暮れ喉が鳴るばかり

(評)危ないことも多々あったが、生きのび

てはるばる此処まで来た。これから為すべきことは酒を飲むぐらい。開き直つた自嘲。

札幌市 三浦 強一

大河ドラマ俎上に歴史女かましい

就活の孫へ神さま仏さま

大阪市 柴本ばつは

長生きもいろいろあつて疲れるな

金粉酒の金はどうなるもつたいな

堺市 澤井 敏治

水割りか湯割りで悩む哲学者

わるいとこ捨てたら骨と皮だけに

松山市 神野きつこ

めんつゆがあれば料理の三つ四つ

ブラジャーがないと自信のない身体

堺市 奥 時雄

デュエットの息びつたりで妬まれる

書く人に振り回される歴史観

鳥取県 斉尾くにこ

便利良いはずのスマホのもどかしさ

ひたすらの壁は一瞬ドアになる

大阪市 井丸 昌紀

半ドアのままひたすら走る国

ざわざわと頭の虫が騒ぐ春

奈良市 大久保真澄

くだおれ太郎就活しています

オレオレに同業者だと返事する

鳥取県 竹信 照彦

大阪府 高杉 力
時針は要らぬ 時計さえ要らぬ

三田市 田中 章子
煙草さえ止めればベストパートナー

豊橋市 藤田 千休
極楽に行ける保証もないお布施

高槻市 安田 忠子
二度寝して今何時かとうろたえる

吹田市 野下 之男
正視できぬ知覧の兵の若い顔

河内長野市 穂口 正子
連れ添って希薄になった夫の顔

大阪市 太田としお
何もかも自己責任の自然界

寝屋川市 籠島 恵子
齢かな 大根の花愛でている

三田市 堀 正和
酒の出ぬ反省会はすぐ終わる

弘前市 今 愁女
どこまでが君かウィックつげまつ毛

ガンバレは政治家に言うこれからは被災者はじっと堪えているのです

松江市 石橋 芳山
せつなさの加速か雨に濡れている

身を守るすべも知らない傘もない
榎原市 居谷真理子

咲きたかったらうねキャベツも大根も
麦の芽にまっすぐ見上げられている

芦屋市 黒田 能子
体罰とは違う母には愛がある

神戸市 山崎 武彦
凸凹が無くても蹴躓く齡

三田市 上田ひとみ
三食はちよつとしんどい定年後

堺市 荻野 象山
古希過ぎてガタ傘寿来てガタガタや

貝塚市 吉道あかね
税金の通知きちんと届きます

三田市 上垣キヨミ
オイコラは私の名ではありません

ばあさんを侮っている庭の草
京都府 都倉 求芽

まだ散るな散るなど花に声をかけ
開店へ飼いならされた胡蝶蘭

羽曳野市 徳山みつこ
みなのかよなのか沈んでいく私

チーン出かけますネとマスクして
豊中市 水野 黒兎

大都会五軒向こうは知らぬ人
値上げせす量を減らしている欺瞞

佐賀県 真島久美子
平均値あたりで爪を研いでいる

性格が顔に出ているのが自慢
大阪府 初山 隆盛

わんこそば味も素つ気もないゲーム
再婚にパーズンロード用意され

堺市 加島 由一
飲め歌えシャルウィダンス花吹雪

岡山市 工藤千代子
他人だと思う日もありまだ夫婦

堺市 村上 玄也
ロールスロイス持つ夢とうに捨てました

大阪市 栃尾 奏子
二度寝には向かない東向き窓

高槻市 初代 正彦
鮒跳ねて静かな池も春の顔

神戸市 山根 弘子
句作りで心の痛み追いはらう

西宮市 片山 忠
未遂でも公務員なら記事になる

鳥取市 前田 楓花
留守電に「たまには来い」と父の声

和歌山市 磯部 義雄
万病に効きそう拾ってきた小石

奈良市 加門 萌子
知らないことがいっぱい有るねコンクラーベ

枚方市 寺川 弘一
高齢化高齢化だとせかされる

鳥取市 吉田 弘子
新婚の宿金婚で訪ね行く

三田市 雑賀 一泉
気をつけてね老母かばって足くじく

香芝市 大内 朝子
ラジオから讚美歌きく間清められ

咲き出して初めて知った 京都市 榎本 宏子
あら桜 鳥取県 平木 公子

山桜あんなどこにも居たんだね 八尾市 高杉 千歩

万葉の桜そぞろ歩ける有難さ 河内長野市 村上 直樹

濃い紅が似合う戊申の八重桜 倉吉市 中村 毅

見納めと言つて十年花の下 川西市 山口 不動

花吹雪駆け過ぎてゆく七十五 西宮市 牧淵富喜子

今がいちばん今年も咲いた花水木 枚方市 伊達 郁夫

葉桜となれどサクラとして生きる 和歌山市 古久保和子

春眠へほこり被つた本の山 岡山市 丹下 凱夫

一癖も二癖もある春の海 米子市 後藤美恵子

盃からありがたくない風邪貰う 大阪市 江島谷勝弘

搾取せず生きてきたから平止まり 高槻市 島田千鶴子

看護士の手の甲メモが書いてある 枚方市 松原 保

WBC大リーガーのアルバイト 松原 保

夕刊ぼとんさて夕食の仕度する 喜屋川市 森 茜

堅物をお酒がほたえさせている 高槻市 片山かずお

どっこいしょよいとこらせと言う命 岡山市 田中 恵

淋しさがわかるから友達になる 米子市 成田 雨奇

玉子だけならお先へとレジ讓る 堺市 矢倉 五月

被災地の瓦礫は高く積んだまま 富田林市 山野 寿之

ファックスが届き飛び入りした祭り 藤井寺市 鴨谷瑠美子

彼岸には相続分の墓掃除 鳥取県 吉野いさお

よしよしと頭なでたら漢字出た 大阪市 笠嶋 恵美

こぶしほどあつたばあちゃんのぼた餅 京都市 高島 啓子

勉強はしなないがスマホだけはする 神戸市 山口 光久

握力が強いまだまだ大丈夫 米子市 中原 章子

同じ趣味に集う老兵平和主義 唐津市 仁部 四郎

毎日の体力へニンニクレシピ 海南市 小谷 小雪

消火器の交換期限過ぎたまま 弘前市 稲見 則彦

ネエーでなくいつかアナタと呼ぶつもり 堺市 志田 千代

歳取らぬ父の遺影に喜寿告げる 八尾市 田邊 浩三

すき間風全開になり離婚劇 唐津市 吉富 節子

乗りのいい失敗談も尾鰭つき 倉吉市 山本 玲子

札束はゴミの中からたまに出る 大阪市 岩崎 公誠

かわいくてコップにさした葱坊主 三田市 石原 歳子

晩酌のあとにスイーツも少し 藤井寺市 鈴木いさお

おしゃべりも電車通過で一休み 大阪市 阿野寿美子

小遣いも増やせと言つて安倍総理 鳥取市 倉益 一瑠

目的が出来てへそくりしたくなり 池田市 上山 堅坊

瘡蓋を剥がす地雷をみるように 奈良市 尾畑なを江

面白い人の周りには人ばかり 大阪市 吉村 一風

貧乏の味知る母に育てられ

塩竈市 木田比呂朗

裁判で票の格差を知る過疎地

岡山市 藤成 操江

いらぬとは言えず貰ってくる薬

羽曳野市 吉村久仁雄

孫に読む絵本はやはりグリとクラ

和歌山市 松尾 和香

戦後史に鐘の鳴る丘忘れない

亀岡市 井上 森生

この世では夫婦あの世は仲良くエイリアン

鳥取市 西川 和子

助手席で居眠りをして叱られる

堺市 増田 和幸

アメリカの孫の手紙を抱いて寝る

河内長野市 大島 友子

瀬戸際で浮きつ沈みつ生きてきた

和歌山市 平田 元三

泥の手が箸使ってる畑の昼

貝塚市 石田ひろ子

カレー煮込み嫁がスマホで遊んでる

大阪市 奥村 五月

諭吉留守小銭集めて縄のれん

和歌山市 上田 紀子

同情はするが力になれません

米子市 生田 和之

山陰に暮らし明日も無事と決め

大阪市 大川 桃花

遅刻したお蔭またずに乗れたバス

加西市 中川 修

護摩を焚き御利益だけを手で招く

高知市 小川てるみ

どきどきの場数を踏んできた強み

三田市 多田 雅高

手術前同意書も取る手際良さ

箕面市 酒井 紀華

さくら餅食べて下さいい仏様

豊中市 藤井 則彦

新聞を逆めくりするたるんだ日

三田市 辻 開子

個性だすファッション今日も四苦八苦

鳥取市 竹口 清信

口下手が無理に喋るとボコを出す

大阪市 榎本日の出

親子でも心の底は見せられぬ

大阪市 桑田ゆきの

世相には疎いが花粉降り掛かる

大阪市 岸本 清

花粉症期間限定引き籠り

西中市 黒田 茂代

一番の旅のご馳走上天気

藤山市 佐々木 勇

脇役の豆腐本日定休日

大洲市 中居 善信

お湯割りも水割りもいい麦でいい

藤井寺市 若松 雅枝

足踏みしとこ今日はジョギング怠けてた

大阪府 小栢こずえ

人に出会うこと楽しみにスパーへ

堺市 内藤 憲彦

戸棚からマスクの雨が降って来た

大阪府 畑中 節子

庭の木は伸びて私は低くなる

唐津市 山口 高明

出向の国の治安を訊き回る

鳥取県 石谷美恵子

土壇場でベコベコしないほんまもん

高槻市 左右田泰雄

春眠の枕にとどく窓明かり

三田市 野口 晶子

犯人はどこにいるのか空ポトル

羽曳野市 永田 章司

杉松孫子の為に植えたのに

羽曳野市 宇都宮ちづる

ケールに乗れよと膝が笑いだし

羽曳野市 嶋本 喬

腐るにも腐れぬ眼鏡たまるだけ

つくば市 楠見 章子

蹴躓くもう始まっていた老後

和歌山市 福田 好文

今年又酒税高額納税者

三田市 細田 裕花

TPP誰かが苦い水を飲む

鳥取県 伏見 雅明

美人客降りて睡魔が舞い戻る

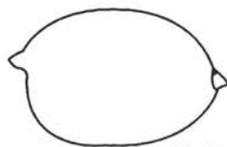
大阪市 伏見 雅明

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 754句)



「リサイクル」奥田みつ子選

地球の宝無駄には出来ぬリサイクル
 リサイクルショップに過去の僕がいる 羽曳野市 枚方市 海老池 洋
 年寄りは何んでもすぐに捨てません 京都市 都倉 求芽
 青春をリサイクルするクラス会 川西市 大坪 一徳
 リサイクルしてもあの日に戻れない 藤井寺市 鈴木いさお
 ガラクタを復活させる母の知恵 大阪市 柴本ばつは
 地区の子のゆりかごになる古雑誌 八尾市 新海 信二
 定年延長磨いた腕を再生す 弘前市 今 愁女
 勿体ない日本の美徳リサイクル 鳥取市 吉野いさお
 雑巾に見覚えのあるシャツの柄 堺市 遠山 唯教
 着物のドレスが風にハイタツチ 河内長野市 大島 友子
 入学の叶うた絵馬をリサイクル 西宮市 亀岡 哲子
 リサイクルもつたいないの通せんぼ 高槻市 原 洋志
 もつたいない心が生んだリサイクル 西宮市 秋元 てる
 リサイクル銀輪初夏の風を切り 岩出市 村中 悦男

「リサイクル」森山盛桜選

思い出は心の襷のリサイクル
 リサイクル出来る私に来る役目 川西市 大坪 一徳
 地区の子のゆりかごになる古雑誌 雲南市 菅田かつ子
 リサイクルをして継続雇用する 八尾市 新海 信二
 志をリサイクルしてまた夫婦 松山市 神野きつこ
 再婚をリサイクルとは言わせない 豊中市 藤井 則彦
 原点に古新聞の収集車 大阪市 太田としお
 再生紙のハガキで抽選に当たる 紀の川市 辻内 次根
 リサイクル貧乏性の得意顔 藤井寺市 鴨谷瑞美子
 手拭いもおしめにされた良き時代 神戸市 山口 美穂
 リサイクルショップと言わぬ古本屋 奈良市 岩本 浩二
 再生紙で包むと心まで温い 堺市 澤井 敏治
 繕うて世紀を跨ぐ訪問着 神戸市 山崎 武彦
 アイデアが浮かび捨てられない着物 青森県 松山 芳生
 雑巾に見覚えのあるシャツの柄 八尾市 高杉 千歩
 堺市 遠山 唯教

過去を捨て再生して面白い顔だ	松山市	小川	注湖
リサイクル出来ぬ頭がよく笑う	岡山東	田中	恵
人間の知恵があふれるリサイクル	田辺市	大時	可動
リサイクル一番したいのは自分	枚方市	小林	わか
原点在古新聞の収集車	紀の川市	辻内	次根
リサイクル生かす女の裁ちばさみ	出雲市	小白金房子	
うちの犬僕のセーター着て散歩	堺市	内藤	憲彦
わたくしの古着かかしが着て田んぼ	三田市	久保田千代	
亡母の帯テール掛けに返り咲き	堺市	荻野	象山
形見の袖仕立て直して亡母を着る	島根県	伊藤	寿美
まだ何か使えそうだねおいておく	加東市	黒崎美紗子	
我が家出て着回し済んでまた我が家	河内長野市	松岡	篤
リサイクルあのがらくたがこれですか	池田市	栗田	久子
役目終えて火鉢が庭で池に化け	貝塚市	石田ひろ子	
リサイクル貧乏性が役に立ち	大阪市	升成	好
子育て補助におばちゃんのリサイクル	大阪府	米澤	俣子
リサイクル曾孫いちばん衣装もち	大阪市	川端	一步
ばあちゃんの帯がはちに若返り	篠山市	遠山	可住
リサイクルショップに過去と明日がある	松江市	三島	浜丘
リサイクルされて資源に血が通う	堺市	近藤	治子
人情のリサイクルなど如何でしょう	富田林市	中井	アキ
リサイクル生きる力に拍車かけ	鳥取市	谷口回春子	
志をリサイクルしてまた夫婦	豊中市	藤井	則彦

リサイクルショップに過去と明日がある	松江市	三島	浜丘
リサイクルすれば手強い古狸	紀の川市	宇野	幹子
何となく味があります中古品	三田市	上田ひとみ	
リサイクルされる案山子の二度動め	茨木市	藤井	正雄
リサイクル出来ぬ部品の医者通い	香南市	桑名	孝雄
引出しの奥に昔のリサイクル	美作市	福原	悦子
リサイクルショップに並び無視される	唐津市	坂本	蜂朗
なぞなぞも解けずリサイクルも出来ず	松江市	藤井	寿代
年寄りなんでもすぐに捨てません	京都市	都倉	求芽
リサイクルさぞやティッシュもご満悦	河内長野市	村上	直樹
余生とはいうが楽しく生き返る	池田市	上山	堅坊
人情のリサイクルなど如何でしょう	富田林市	中井	アキ
脛の傷リサイクルして立ち直る	田辺市	岡本	昇
百均とリサイクル店まず覗く	三田市	堀	正和
リサイクルショップに逸れた散歩道	河内長野市	梶原	弘光
斬られ役衣装をかえてまた斬られ	三田市	北野	哲男
リサイクル昭和の穴も魅力的	松江市	石橋	芳山
嬰鏢の身をリサイクルとは無礼	泉佐野市	稲葉	洋
一概な昔流儀をリサイクル	鳥取市	西川	和子
リサイクルショップに置いてある野心	和歌山市	武本	碧
リサイクル出自が消えて見える価値	神戸市	大島まさる	
ぐっすり眠りそれからリサイクル	和歌山市	福本	英子
使い古したジョークひとつを持ち歩く	奈良県	渡辺	富子

地球にも財布にもエコリサイクル
 雑巾になつて持ち味出す木綿
 和服からモダンな服でとんでいる
 リサイクル私好みの色に染め
 心臓を宥めすかしてリサイクル
 i P S 脳の再生叶うかも
 臓器移植受けて命のリサイクル
 移植した臓器に命つないでる
 臓器の移植尊敬なりリサイクル
 恩返し献体というリサイクル
 何となく味があります中古品
 再生紙出自を問わぬ無垢な白
 皮肉にも離婚届けが再生紙
 再生紙で包むと心まで温い
 エコの風やさしく吹かす再生紙
 リサイクルの名人母の古ミシン
 飾らない笑顔どこでもリサイクル
 古民家をステキに異国人が住む
 リサイクル人智は限り無く深い

秀句

倉吉市	中村	毅
鳥取市	岸本	宏章
大阪府	野田	栄呼
紀の川市	北山	絹子
長岡京市	山田	葉子
奈良市	米田	恭昌
奈良市	加門	萌子
富山市	有澤	嘉晃
鳥取県	西谷	悦子
河内長野市	村上	直樹
三田市	上田ひとみ	
豊中市	水野	黒兎
横浜市	菊地	政勝
神戸市	山崎	武彦
紀の川市	宇野	幹子
豊中市	松尾美智代	
鳥取市	大前	安子
堺市	矢倉	五月
鳥取県	深田	俱久
米子市	吉田	陽子
大阪市	吉村	一風
岐阜市	平野あずま	

リサイクル主人の頭からかかる
 誤作動をどうする脳のリサイクル
 まだ何か使えそうだね おいておく
 酒を断つ臓器提供できるよう
 リサイクルしても逢いたい遠いひと
 名乗りでて目立ちたがりの再生紙
 役に立つ時を待ってる古いネジ
 リサイクル前は知らない方がいい
 再生紙出自を問わぬ無垢な白
 古新聞あなたよ次は何になる
 天下りリサイクルではないのかな
 分別の熱を冷ましている役所
 リサイクルすればあるあるレアアース
 古本にくすつと笑うルビがある
 時の声聞こえて来そう再生紙
 想い出を壊さぬようにリサイクル
 リサイクル置き場に僕の影法師
 夢だけで終わった夢をリサイクル
 リサイクルあのがらくたがこれですか

秀句

米子市	政岡未延子
大阪市	笠嶋 惠美
加東市	黒崎美紗子
倉吉市	牧野 芳光
川西市	西内 朋月
大阪市	伏見 雅明
和歌山市	平田 元三
鳥取市	倉益 一瑞
豊中市	水野 黒兎
和歌山市	田中 みね
唐津市	仁部 四郎
奈良市	辻内げんえい
西宮市	片山 忠
和歌山市	さかたさく
芦屋市	竹山千賀子
藤井寺市	太田扶美代
堺市	加島 由一
鳥取市	夏目 一粋
池田市	栗田 久子
奈良市	阿部 紀子
芦屋市	黒田 能子
大阪市	井丸 昌紀



追悼

井上勝視さん さようなら

川柳塔唐津 仁部 四郎

「黄泉にたつ友を送る日雨しとど」

この句は、今日、この会場に来て、貴方の竹馬の友であり、川柳のお仲間でもある井上茂吉さんからいただいた句です。

思えば、平成二十年二月に、膀胱ガンで入院してから三回の手術に耐えてきたのに、とうとう今日の目を迎えることになってしまいました。今日はお彼岸の中日で、雨が降っています。貴方を送るために集まった川柳塔唐津や長松公民館のこだま川柳会の仲間の涙のような雨が降っています。

井上さんは、大正十年の生まれで七月の誕生日が来れば九十二歳になるところで、その日が一つの目標になっていたのに、とうとう及ばず残念なことでした。

昭和十八年に、青年学校の教諭から陸軍に入り少尉で終戦を迎え、戦後は民間の会社勤めに昭和五十三年に定年で退職されました。

私と井上さんとの出会いは、平成六年四月に、さが社会保険センター・唐津で川柳

講座が始まった時でした。川柳の経験は私の方が長かったが、人間の幅としては、井上さんの方が広いと感じた出会いでした。

太平洋戦争を敗戦というかたちで、ビルマやジャワで体験し、復員後は、バス会社の営業所長として、運転士、ガイド、車掌、整備士といった人々を統率してきた人というところが次第にわかってくるにつれて、なるほど、さすがにと思わせてメンバーの中心になり、平成九年から、川柳会の場合は、唐津市長松公民館でのこだま会に移ったが、一貫して会の大黒柱で、後から入会してきた人々のよき先達でした。

一方、故田口虹汀さんらが中心となって活動していた川柳塔唐津にも参加して、平成十一年には川柳塔同人になりました。

そもそも川柳に手を染めたのは、平成元年で、新聞の読者文芸、佐賀県文学賞、川柳雑誌「オール川柳」で活動の場を広げ、平成十八年には、B6判二〇〇ページの「み虫」を出され、平成十九年に雑句集「紅

生姜」、平成二十一年に雑句文集「水溜り」と続いて、平成二十二年には懐古句集「茹で蛙」を出されたのです。

二冊めの「紅生姜」の巻頭句は、「出雲には感謝しきれぬ紅生姜」なのだが、「たとえ駄句でも感謝の意を込め、ヨイシヨを並べ紅生姜を巻頭にした」と言っています。

「茹で蛙」では、「何も出来なくなって唯々昔を懐かしんで、自分自身を慰めているに過ぎない懐古である」と述べています。

井上さんの、四冊の句集は、或る人生の里程碑であり到達点だと私は思います。

十代、三十代、五十代、そうして九十代にさしかかる今、仕事と家庭における責務を果してきた人が、おのずと体得した人生への目配りが、技巧をこらすこともなくて、川柳という表現の力をかりて四冊の句集をうみだしたのだと私は思います。

平成十八年八月に、唐津新聞で紹介した「み虫」のうちの三句と「茹で蛙」から四句を紹介します。

いためすきた地球に詫びる植樹祭
二階級とんで白木の箱還る

ノーギャラで妻は総理を五十年

しあわせだ明日の予定もチャンとある
子と老いの荷を振り分ける嫁の肩

最後に甲句として拙吟を申しあげます。

川柳も杖の一つに幾山河

四郎

「真ん中」

長 浜 美 籠 選



世は正に春の真ん中桜咲く
川柳がでんと真ん中わが余生
寄せ書きのまん真ん中に書く絆
全科目3の息子を叱れない
エレベーターみんな真ん中向いている
温厚な友真ん中に座らされ
入社式紅一点がど真ん中
姉妹の狭で育ち苦勞性
何やつても真ん中へんというランク
人並という真ん中で暮してる
結局は真ん中の子が家業継ぐ
遺言状真ん中にしてみな寡黙
坂道の真ん中謎がやつと解け
真ん中の邪気を新緑にて晒す
真ん中のぶれぬ男に惚れました
まん中の梅干ししっかり自己主張
中心をわざと外して恙無く
にこにこただ真ん中にいた恩師
趣味多忙好期好齢ど真ん中
ドーナツの穴は哲学的である

尼崎市 小池 幸子
池田市 上山 堅坊
米子市 生田 和之
鳥取市 岸本 宏章
京都市 坪井 孝一
熊本県 高野 宵草
横浜市 菊地 政勝
三田市 上垣キヨミ
四条畷市 吉岡 修
八尾市 宮崎シマ子
弘前市 今 愁女
茨木市 藤井 正雄
神戸市 伊勢田 毅
生駒市 飛永ふりこ
香芝市 大内 朝子
和歌山県 森下よりこ
大阪府 坂 裕之
藤井寺市 鴨谷瑠美子
三田市 北野 哲男
弘前市 高瀬 霜石

真ん中を故意に外した親心
中立という常識に縛られる
魂の真ん中辺にあるマグマ
ドーナツの穴が大きくなる不況
真ん中に立つから強い風当り
真ん中に一升瓶と父が居た
やすらぎは自己中心を捨ててから
少年の主張飾らぬど真ん中
幸せの真つ只中に気がつかぬ
真ん中の柱が痩せて来た同居
敵陣の真ん中にある正論派
中樞において末端へ届かぬ目
佳
僕を無視して両側で盛り上がる
真ん中を外れて見えた世の動き
跳び立とう今人生のど真ん中
どの花も真ん真ん中はきつと愛
真ん中ででんと要の妻がいる
人
中流と思えば気持風いでくる
地
バランスをとる一点が揺るぎ無い
天
折り返すまでは先頭はしつてた
軸
真ん中を引き立てているプチトマト

出雲市 竹治ちかし
藤井寺市 太田扶美代
枚方市 寺川 弘一
弘前市 福士 慕情
岡山市 永見 心咲
三田市 堀 正和
高槻市 富田 保子
鳥取市 夏目 一粋
豊橋市 藤田 千休
紀の川市 楠原 富子
唐津市 仁部 四郎
堺市 村上 玄也
堺市 奥 時雄
鳥取市 前田 楓花
奈良市 岸本 浩二
橿原市 居谷真理子
堺市 澤井 敏治
神戸市 山口 光久
青森県 松山 芳生
唐津市 山口 高明

「耐える」

細田裕花選



私だけ耐えていました損したな
耐え抜いた花はしっかりと実を結び
耐えきれず心のギアを切り替える
耐えた歳月老人力になっている
鉄握る亡母の指先歪んでた
ボクよりも猫が大事な人と住み
戦中戦後耐えた自信の骨密度
古日記耐えた言葉が埋めてある
練習に耐えるとかい花が咲く
拉致の母今年も耐えた誕生日
ボケットの我慢の石が重くなる
貧乏に耐えた昔を自慢する
耐えて来た過去は倍増して語る
盆栽も耐えておりますこじんまり
お互いに耐えた気味でいる老夫婦
耐えた苦が味付けしてるいい笑顔
耐えてます平和な家庭築くため
耐えて来た母を息子は解ってる
共働き耐えた子どもに手を合わす
耐えること知らぬ子供挫折癖

河内長野市 穂口 正子
吹田市 木下 敏子
堺市 羽田野洋介
和歌山県 森下よりこ
鳥取市 福西 茶子
堺市 矢倉 五月
紀の川市 辻内 次根
大山市 関本かつ子
鳥取市 春木圭一郎
神戸市 伊勢田 毅
貝塚市 石田ひろ子
鳥取市 岸本 宏章
枚方市 寺川 弘一
大阪市 柴本ばつは
大阪市 伏見 雅明
鳥取県 平木 公子
鳥取市 谷口回春子
奈良市 加門 萌子
西脇市 七反田順子
鳥取市 吉田 弘子

ばら百本飾って淋しさに耐える
枕木は文句も言わず貨車に耐え
飯のタネだからと耐えたピエロ役
栄光を得た忍耐が美化される
風当たり木の根のように耐えてゆく
じつと耐え風うかがっている野心
今耐えておけば夕日は輝くよ
芯棒は四十五度で耐えている
妻という漬物石に耐えている
耐えすぎてひっくり返るのは自分
逆境に耐えて痛みの分かる傘
耐えに耐えあかんあかでビルを建て
母さんが素知らぬ顔で耐えている
逆風に耐えて重心低くする
耐えてきた証爆弾持っている
青い星愚かなヒトに耐えている
文鎮は耐えた形のままでいる
人
耐えて耐えてとうとう石になりました
地
耐えた分だけまろやかになる笑顔
天
砂嚙んで暮らしていますほくは貝
軸
忍耐の貯金に利子がついている
西予市 黒田 茂代
和歌山市 上田 紀子
高槻市 片山かずお
出雲市 竹治ちかし
鳥取県 西谷 悦子
和歌山市 福井 菜摘
松江市 相見 柳歩
鳥取県 斉尾くにこ
松江市 石橋 芳山
生駒市 飛永ふりこ
今治市 渡邊伊津志
大阪市 吉村 一風
和歌山市 武本 碧
和歌山市 喜田 准一
大洲市 花岡 順子
池田市 上山 堅坊
松山市 神野きつこ
藤井寺市 鈴木いさお
海南市 堂上 泰女
弘前市 高瀬 霜石

「しつこい」

江島谷 勝 弘 選



しつこさがセールスマンの掟です
二週間鼻水と咳まだ続く
捨て猫がしつこくついて負けました

和歌山市 磯部 義雄
藤井寺市 鈴木いさお

晩酌が二時間を越すことがある
病院食しつこい味が夢に出る
孫笑う何度も同じことをする

三田市 北野 哲男
香南市 桑名 孝雄
大阪市 原田すみ子

ゲーム機をねだる幼児の粘り勝ち
遠い日の微罪忘れぬ妻である
納豆をしつこく混ぜる握り箸

松江市 三島 滋丘
唐津市 山口 高明
鳥取市 大前 安子

しつこくおもしろい話する電話
しつこさが唯一取り柄のテニスです
後期高齢少ししつこく生きている

鳥取県 竹信 照彦
大阪市 高杉 力
枚方市 寺川 弘一

もう一軒行こうと袖を引く上司
中韓にしつこさだけは学びたい
しつこさに負けてはならぬ巡視船

弘前市 福士 慕情
西宮市 片山 忠
鳥取市 岸本 宏章

核の玉まわして遊ぶ北の国
とは言っても九条だけは譲らない
どのチャンネルもお笑いばかり鼻につく

明石市 糀谷 和郎
堺市 内藤 憲彦
大阪府 米澤 俣子

恥じらいを忘れしつこく守る椅子
駅員にしつこく聞いた地下出口

奈良市 米田 恭昌
藤井寺市 鴨谷瑠美子

カーテンコール四回目には出て来ない

八尾市 新海 信二

一度買ったDMのエンドレス
ピーカーの中でしつこく追う命
100回言っても事態は良くならぬ

羽曳野市 徳山みつこ
出雲市 竹治ちかし

清姫もお七も元祖ストーカー
長時間ひとり占めする試着室
その先をしつこく聞いて外された

生駒市 飛永ふりこ
奈良市 大久保眞澄
横濱市 菊地 政勝

残り時間をしつこく迷う曲り角
粘り勝ちおまけを一個つけさせた
段落を外したあとの長い雨

倉吉市 岡崎美知江
藤井寺市 太田扶美代
堺市 矢倉 五月

結局はしつこいほうに手折られる
やさしさがしつこさになり愛おわる

富田林市 中井 アキ
香芝市 大内 朝子
和歌山市 福井 菜摘

何してもしつこい奴は嫌われる
我が家から貧乏神が出てゆかぬ
しつこいと気付いていないから困る

鳥取市 竹口 清信
三田市 上垣キヨミ
河内長野市 山岡富美子

夢を追うあきらめ方を知らなくて
金持ちのエゴ大国のエゴ 不変

橿原市 居谷真理子
弘前市 高瀬 霜石

頼りないらしい何度も念押しされ
散散に注文つけてノーと言う

和歌山市 柏原 夕胡

地 天

三田市 堀 正和

しつこいがしつこくされるのはきらい
何時までも忘れはしない君のこと

四条畷市 吉岡 修

民族の詩歌 (13)

―俳句と川柳 ②

三好 専平

唐崎の松は花より臙にて

芭蕉

には、いわゆる「かな」のような切れ字が使われていない。「は」で軽くポーズを置き、「て」で中止するが、すぐに「そして」の意味で下に続く。外山滋比古は母音EとAの違いに着目し、Aが開放的であるのに対して、Eは抑制的であるとし、軽々に切れ字を論じることができないという。

切れ字は、もともと秘伝とされていて、諸説があり、22とも、13ともいわれるが、現在の文法に従えば、終助詞（かな・もがな・ぞ・や・か・よ・）活用する語の終止形・命令形、係り結びの連体形及び已然形を呼ぶ。係り結びの、結びは省略さ

れることが多い。これは、座の雰囲気がかつている人には言わずもがなであるからである。「われこそ」でわかるのである。

連句の三要素は「におい・うつり・ひびき」といわれる。発句は、その点全く違った次元で作られる。それは、非連続の持つ、非論理・崩壊・脱落などの情感である。言外に広がる、混沌とした禅的な境地とも通じる。禅では「不立文字」といって、文字を否定する。そこから生まれるのは何か。無限である。そこから生まれるのは何か。思考中ゼロに近くなるという。画に例えれば、点描画ということになる。

【唐崎】の句の下には、すばらしいとかうつくしいとかの情感を表す言葉があると考えていい。川柳はこのような切れ字を好む。前句付けからくるものであろう。

昨年の川柳塔10月号より

挽歌まだ八月を満たして

命日の鉦は素直な音がする

緑良

朋月

は、終止形で終わっているように見えるが、そうではなくて「ことよ」などと、次に続くニュアンスをもつ。

めぐり違いこんなに酔をとつてから
言ひ聞かす猫の両手を握りしめ
核の世で生きることが喜劇かも
鑑定に出したばかりにもめにもめ
大根も西瓜もカツトして並び

理恵
道夫
正光
輝夫
一花

など、切れずに句が終わる。特に、助詞、連用形が多い。つまり、川柳は俳句のよう後ろ向きではなく、大変前向きな文学なのである。一花さんの句など、下に77を置きたい気がする。「丸ごと食べたいのよ。」という作者のつぶやきが聞こえてくる。このように、川柳は、肯定的・現実的・論理的・共感・共鳴的である。俳句も読者を尊敬する文学であるが、川柳も主客合一の文学である。読者があつてこそその文学である。それは、川柳が、演劇的であるということであろう。したがって、川柳は日本古典芸能の影響を、今も強く受けている。

『麻生路郎読本』 余滴 (15)

「再び半文銭君に與ふ」を読む ②

葉原道夫

□君は「好漢路郎、今少しく宣傳の力をして自己の内部生命に對して進出せしむべきではないか」と苦言を呈せられてゐるが、その見當違ひに驚ろく、路郎君の宣傳は、自己宣傳ではなく、川柳を社會に宣傳してゐるのである、之は川柳雜誌社の主義方針なのであるから主幹たる路郎君が社の主義方針に忠實なのは當り前ではないか、いらぬお世話だと言ひたいこんな見當違ひな苦言を呈せられるよりは「ふふん」と傍觀してゐて貰ひたいのである。

□「故人六厘坊などは先生ぶつたり、師匠ぶつたりする事を甚だ悦ばなかつた」と君は書いてゐるが、*六厘坊、七厘坊、八厘坊、ひささなどの諸氏は、皆な市岡中學の同窓生なんだから、言はゞ友人仲間で川柳を作り出したに過ぎなかつたのだそれに急にその中の一人を先生と呼ぶといふのは言

ふ方が無理だし又本人も先生ぶらないのは當然ではないか。路郎君を僕が先生といふのは、川柳の上で指導を受け教へを乞ふてゐるから師匠としての禮儀上路郎先生といふのは當り前ではないか。又路郎君も師匠であり、先生であるのだから我々に先生と呼ばせても一向差支へないと思ふ。如何に句が上手になつても、如何に柳壇に於ける地位が向上しても、最初に教へを受けた師匠に對しては先生として尊敬するのは當然であると思ふ、大學の教授でも小學校時代の先生には「先生」と頭を下げるではないか、僕は心にもない先生を師匠扱ひはしてゐないから御安心を願ひたい。

* 六厘坊は小島六厘坊。七厘坊は川上日車。八厘坊は森田八厘坊。ひささは五代目竹本弥太夫の息子で、兄が「文楽今昔譚」の著者木谷蓬吟。市岡中學

校は大阪市港区にある現・大阪府立市岡高等学校。川上日車が「底」創刊号（昭和2年11月1日発行）の「川柳去來史」で、次のように記している。改行は／で示す。以下同じ。へ天・才・小島六厘坊、之は私と机を並べた仲であつた。／服部ふくべ。大阪農人橋の油屋の息子で、金持ちであつた。服部といふ姓を直譯して、六厘坊が「ふくべ」と命けた。年は私より一つ上、六厘坊よりは、二つ上であつた。)

□二足の草鞋に辯明がないと言はれたが、馬鹿らしくてお相手が出来ないから書かなかつただけのことで、釋明しろと言はれ、ば何時でも釋明して差し上げる。*(1)第一君が引用して罵倒されてゐる路郎君の句は旅に出た時の即興詩である。丁度君が*(2)萬よしあたりで一杯ひつかけた元氣で例の*(3)「出席簿」へ一句書きなぐつた句と大差がないのである。そんな句をわざ／＼問題にしないで、寡作ではあるが路郎君の句は可成りあるから、それを問題にするのが當然だと思ふ。丁度畫家が旅の宿屋で女中に先生どうか何でも結構ですからと言は

れて筆をとつた繪を問題にして罵倒してゐるやうなもので、畫家が帝展などに出品するために書いた繪があるのに、それを問題にせず旅先の宿屋に残した繪を批評した美術批評家があるとしたならば、そんな批評を載せる美術雑誌は一もあるまい。然し影像といふ堂々たる(?)雑誌は斯ふした批評を麗々しく掲載されてゐる(古屋夢村君は君の原稿に可成り迷惑を感じてゐられるらしい)のである。又餘儀なく掲載されたのかも知れないが、兎に角掲載されてゐる。君は「し、も打たずによしのやの畫」

「湯もにこり話しにもごる山中や」「口説かれて千代女は一句詠んで逃げ」の三句が「愚雑な*(4)既成川柳を現代意識でゴマ化してゐる」そして「既成川柳と齊しい時代に捉はれてゐる」と批評されてゐるが、それは*(5)君が革新川柳は斯くあるべしといふ一定の尺度を作り、それにあて嵌まらないものは、皆んな下らないと云ふ狭い見識の下に生れた議論だと思ふ。自然主義勃興時代に一人超然として低徊趣味の作品を発表した漱石さんの態度を、自然主義の達人が決して罵倒はしなかつた、藝術はそんな窮屈なものでなく、藝術的價値さへあれば、その作風がローマンチックであらうが

リアリズムであらうが、又表現派、未來派、構成派であらうが何であらうが一向に差支へないものである。然るに君のやうに自分の主義以外の作風に對しては之を下らないとして罵倒し去ることは、文藝批評の態度としては甚だ遺憾ながら根本からなつてゐない態度だと言はなければならぬ。殊にその作品が即興詩であつて路郎君が全生命を打ち込んで作つた句でない今回の如き場合は、甚だ滑稽千萬な批判と言はなければならぬ。だから敬意を表して問題にしなかつた次第なのである。

* (1)「川柳雑誌」昭和3年5月号に掲載された「北陸に來て」と題した次の句の、一・四・五句目のこと。

聖興寺の碑 松任

口説かれて千代女は一句詠んで逃げ

兼六公園の櫻(金澤)

腕前を疑ふ寫眞櫻咲く

寐ころばはわれを飛白にしたりけり

家族温泉(山中)

湯もにこり話にもごる山中や

よしのや旅館

し、もうたずによしのやの畫

山にくや女にくやの畫深し

4月15日金沢川柳大会に出席したと

きのことを詠んだ句。14日に夜行で大阪駅を發ち、15日の朝、松任着。路郎、二柳子、萬よし等一行は、聖興寺の千代女の墓に詣で、兼六公園で遊んだ。大会後の懇親宴が終わると、山中温泉のよしのや旅館に泊まつた。

三好は、旅先での「即興詩」である句をわざわざ取りあげて問題にしなくともいいではないかと言つてゐるが、「川柳雑誌」に路郎が發表したものであるから萬よしで書きなぐつた句と同様だとは言えず、問題にしてもおかしくはないと思う。なお、これらの句は、句集「旅人」には収録されなかつた。

* (2)・(3)「萬よし」は、大阪市南区新戎橋南詰にあつた上欄屋。主人は庄健一。

商号をとつて庄萬よしと号した。「萬よし」は、川柳家の溜まり場でもあつた。「出席簿」とあるのは、「漫筆帳」の誤り。「川柳雑誌」大正15年12月号「漫筆帳より」(万よし報)より。

九月一日にビール味のよし 溪花坊
万よしをひよろ／＼出ると轢かれさう

水府

ビールビール秋が來たとて秋が來たと
路郎

松郎の紹介文に、〈萬よし店には、漫筆帖といふのがあつて、お客の顔を見れば「何か御一筆を」と書かせられます。〉(中略) 漫筆帖(仙花紙二十枚綴)は最近二年程の間に、百數十冊に達してゐるさうですとある。路郎の「ピール」の句は、「旅人」に収録。

* (4)「川柳総合大事典 用語編」に、〈あるべき」ものにとつて現在「ある」ものは、常に既成である。既成の狂句(旧派)から脱した新川柳(新派)も、数年を経て新傾向川柳が興るや、その時点で既成となつた。以後、新興川柳、詩川柳など新しい主張や運動が興るたびに對語として用いられてきた川柳の基幹部分。(中略) 本来固定した概念ではなく相対的呼称であり、また時代により個々の構成要素の異同はあつても、常に川柳界の大きな裾野を占める伝習維持の保守的立場を既成川柳と呼ぶようになったとある。

* (5) 当時の半文銭はどのような川柳を指していたか。「底」創刊号「底の使命」で、半文銭は次のように述べている。〈川柳の藝術至上主義は究極に於て高踏的に墮する。／川柳の社會化

は根本に於て低下を免れぬ。／川柳の大衆の迎合は既成精神の延長に過ぎぬ。／至上に墮せず、質を低下せず、大衆を棄てず——そこに藝術と民衆との現代的握手をなすことは、川柳の民衆的藝術としての一大使命であらねばならぬ。本誌は、この使命の下に生れたものだ。現代の社會へ働きかける川柳の使命——これを完全に果したい。

「底」創刊号(23句)、2号(34句)に發表した半文銭の句を数句挙げておく。分ち書きの句も、「半文銭句集」(昭和8年7月10日発行)では一行書きで収録されている。※の句は句集未収録のもの。

不斷なる牽引力をもつ／机！
※風死して／岐阜提灯に蔭がある
※雑音の底に——／椿の落つる音

(創刊号より)

大阪の築港とかけて／死んでやる
へちま二つ／ぶらりさがつた家と
思へ
海月を踏んで何が眞理だ
生活の眞正面の落葉

(2号より)

□君の問題にしてゐる路郎君の右の三句は路郎君の作品として決して優れたものだとは言はないが、「し、も打たずに」の句の如きは山中温泉へ行く人が皆*し、を打つことに興味を持つてゐる中に、一人し、も打たずに温泉宿の書をほかんと寝そべつてゐる主人公の淋しい、こうした世間の人が興味を持てる情事問題に感興を湧かす事さへ出来ぬほど疲れ切つてゐる境地がよく出てゐてそこに人生の惱み感ぜられ、かうした人も出て来たといふ時代相も表はれてゐると思ふ。

*「し、を打つ」とは、しし(湯女)と遊ぶこと。

□君は「路郎君を君等の所謂革新川柳の畑から見棄てられたくない」と書いてゐるが、* (1)北海道の志貴南君他の人々の同一の句が、路郎君の選をしてゐる本誌の近作柳樺に抜けてゐると同時に、「川柳人」「水原」にも君達の選に抜けて掲載されてゐる事實は路郎君が決して君達の畑から見棄てられるやうな人物でないことを證明して餘りがあると思ふ。だから決して御心配下さる様なことは無いと思ふのである。それより君が二足の草鞋を穿かないで一足の草鞋でも

よいから完全に穿いて貰ひたいものである。君がかつて本誌に*⁽²⁾古川柳の研究を發表され、藝術的價値の殆んど皆無^{ナシ}な和蘭の句を列べて得意になつて居られたが、僕は不幸にして君が和蘭語に長じて居られることを少しも知らずに居た、川柳の研究の爲めにわざ／＼本の少ない和蘭語の研究までされるといふその努力には全く感心する然しさうした和蘭語の研究までされるといふことは、革新川柳の上にとどのくらしいの効果を及ぼすものか僕には一寸分りかねる。君の極力排斥されてゐる既成川柳の中でも餘り藝術的價値のないと思はれるもの、研究に辭書一つ買ふにも本一冊を手に入れるにも可成り困難を感じる和蘭語まで研究されるといふその態度と、革新川柳を高唱し、人生問題、社會問題を取扱つた藝術味の豊かな句を作れと言はれる態度との間に何等の矛盾が無いと言へるであらうか、君のこの態度こそは二足の草鞋と云はざるを得ないと思ふ。

*⁽¹⁾ 坪倉志貴^{しきき}南。本名延金。明治28年8月25日生まれ。旭川市在住。「近作柳樽」欄へは、大正14年3月号に14句入選の巻頭で初登場し、大正15年7月号まで投句している。以後は投句して

いないので、三好の記述は正確ではない。「川柳雜誌」大正15年10月号「近作柳樽の作家」で、路郎は次のように述べている。(旭川の志貴南君の如きはかつては非常な秀句を吐いて近作柳樽中異彩を放つてゐた時代もあった。)(金澤の椋花君(筆者註)椋果の誤り)は龍二と號して「水原」や「影像」に去つて一層の佳句を見せている。椋果は本名宮島龍二。明治32年に生まれ、昭和2年5月7日28歳で死去。

*⁽²⁾ 「川柳雜誌」昭和2年9月11月号に掲載されたエッセイ「ビイドロとギヤマン」のこと。ビイドロとギヤマンの違いを古川柳を引用しながら考察したエッセイ。このようなエッセイを書くことと、芸術味の豊かな句を作ろうとすることは別次元のことなので、「二足の草鞋」とは言えないと思ふ。

□次に路郎君が*⁽¹⁾籍すに三年をせよ、この愚雑な中からきつと吾々の畑の者をつくり出す」と君や日車君に口約したといふことを君は書いてゐるが、路郎君はそんな手品師見たいなことをするとは決して言ふ筈がない、愚雑な連中がいくら努力しても

瓦を壁にする^{タタキ}ことは出来ない、本質的に良い素質を持つたものでなければ良い作家となり得ない事は路郎君は知つてゐる、又假りに路郎君がそんなことを言ふ筈はないが、言つたと假定してもそれを信じる君の頭の良さ加減には全く敬意を表する。君は路郎君を*⁽²⁾松旭齋天一以上の手品師で人間までも變へることが出来る^トと信じて路郎君の苦痛と立場に理解を持ち、その苦しみを分つべく君は川柳雜誌社の賛助員となつて居られるらしいが、川柳雜誌は君を客員として御待遇申上げては居るが、決して賛助員となつて御後援下さる様には御願ひしたことは無い、も一度ゆつくり川柳雜誌を御覽願ひたい、こんな分り切つた問題まで輕卒に間違ひを書かれるのを見ると君の頭の加減がどうかかつてゐるのではないかと御心配申上げる次第である。

*⁽¹⁾ これは、「川柳雜誌」を發刊するときに、半文錢や日車に言つたとされる言葉だと思われる。

*⁽²⁾ 明治時代の奇術師(一八五三—一九二二)。弟子に水芸の天勝等多数。
(次回に続く)

初しぎ教室

題一東

太田 昭

【同想句を避けよう】

全体に拝見すると、如何に同想句が多いかに気付かされます。課題から最初に浮かんだ句は、概ね誰でもが詠みそくな作品です。

最初に浮かんだ句は捨てて、新鮮みのある生き生きとした作品こそが、読む他人をもひきつける良い作品になります。

【少しの修正で良くなる句】

原ライオンも東には勝てぬ腹見せる 孝明
 添ライオンも東には勝てず腹を見せ 信二
 原採め事に札束という仲介者
 添採め事に札束と言う収め役
 原花束に添えた二文母泣かせ (徳)正子
 添花束に添えた二言母泣かせ 律子
 原花嫁の花束受けて睦まじく
 添花嫁の花束受けて父は泣き
 原東になる一円を握りたい 洋一
 添東になった一円を握る夢

原札束が席を譲ったカード群 絹枝
 添札束が席を譲ったのはカード
 原黒髪を束ねいそいそ老い介護 こずえ
 添黒髪を束ねいそいそ介護する
 原東になりかかって来いと後退り 友子
 添東になりかかって来いと身構える
 原店先の山菜の東郷恋し 史郎
 添店先の山菜の東郷を恋う
 原桜梅色々束ね暮参り (山)久子
 添紅白の梅を束ねて暮参り
 原東ねてた父が亡くなり皆離散 一文
 添東ね柱の父逝ってから離散する
 原新学期ポニーテールの束が跳ね (山)妙子
 添ポニーテールの束が跳ねてる新学期
 原おしゃべりが束の間にする待ち時間 元三
 添おしゃべりも束の間だった待ち時間
 原札束を湯水の如く使つてる 英男
 添札束を湯水の如く使う夢
 原花束を贈る心が見透され 回春子
 添花束の贈る心を見透かされ
 原札束がそつばを向いて逃げて行く 紀美恵
 添札束にそつばを向いて逃げられる
 原書きすぎて束で持つる遺言書 晴雄
 添書き過ぎて束になつる遺言書
 原採めごとを上手に束ねる母の技 温子

中の句を「上手に束ねる」と詠むから8音になります。

添採め事を上手く束ねる母の技
 原東にして持つてみたいね諭吉殿 孔一
 添東になりかかって来いよ諭吉君

【添削】
 原そばを打つ髪を束ねて汗にじむ つな子

添髪を束ね汗にじませて蕎麦を打つ

原薄くても新聞紙より札の束 心咲

添新聞紙より薄くてもいい札の束

原良く似合うポニーテール後ろ向き (中) 修

添若さつていいポニーテールが良く似合う

原偏人と意地を張つても束ねられ 定廣

添偏人と束ねられてる意地っ張り

原夢見るかアベノミクスで札束の 喬

添札束のアベノミクスの夢を見る

原過疎の村地域東ねて村興し 正二

添地域東ね村起こしする過疎の村

原句過ぎて二束東ねて店先へ 治子

添句を過ぎた野菜束ねて売りに出し

原路地野菜束ねて朝の市に出す 忠貞

添朝市で束ねられてる路地野菜

原花束に戦士も涙退職日 亜希子

添花束に涙戦士も職を去る

原たばねてよ綿菓子のようにやんわりと 和香子

添綿菓子のようにやんわり束ねてよ

原迷いごと束ねてみれば同じこと 安子

添ゴミの日に束ねて捨てる迷いごと

原乱れ髪きれいに束ね彼を待つ 文香

添きれいに束ね誰を待つやら乱れ髪

原大東で届いた花の売れ残り (高)恵子

添売れ残りの花大束にして贈る

原勞わりも老いを楽しむ終近し 恭子

添勞りを束ね楽しむ老い近し

原札束は花束よりも魅力的 和之

当然の句から抜け出して、川柳的な面白

みを出して見ましよう。

添花束は札束よりも魅力的

原強風が積んだ野菜の束飛ばす 冷子

添野菜の束を一気に飛ばす春嵐

原会計は専務札束握ってる 美沙子

添札束を握る専務は見放せず

原核兵器束ねて廃棄世界平和 和幸

添核兵器を束ね廃棄にする平和

原日銀はデフレ退治を札束で 勝治

添札束でデフレ退治をする政治

原髪束ね必死で学んだ過去思う 開子

添髪束ね必死で学ぶ娘の愛し

原髪束ね気合いを入れて入社試験 (中)恵子

添就活に髪を束ねて気合い入れ

原妻と子が連合軍になる我が家

添妻と子が連合軍の束になる きつこ

原札束に少し心が揺れました

添札束に心の揺れるまだ少し (楠)富子

原誕生日花束よりも現金を

添花束より現金がいい誕生日 (高)弥生

原方言と束の間交わす旅の味

添方言で束の間交わす旅の味 大子

〔一選句〕

ポニーテール十七歳の春眩し (大)和子

たいまつのお火の粉をあびて加護願う 眞砂子

電子化でお目にかかれぬ札の束 一泉

刈取りの稲を束ねる月明かり 登美子

春野菜束ねて出荷道の駅 (畑)節子

束の間の休暇懐かし定年後 憲

世間並みという常識で束ねられ (高)道子

老人会束ねるだけで骨が折れ 克三

札束を持つと血圧高くなる 利子

決心へもう振りむかぬ束ね髪 昭枝

PPPお家事情で束ねか (濱)修

言えぬ事束ねるほど秘めています 志津子

やる気ある人を束ねたボランティア 義雄

日の丸という名の束になる絆 武人

束縛も懐かしくなる今ひとり 満知子

原発の事故収束は孫頼み せいじ

〔佳句〕

誕生日歳を束ねてしまひ込む

札束に何時の時代も牛耳られ (モ)モ

十把一絡げにする「以下同文」 紀雄

気を抜いた束の間鬼が攻めて来る

約束は当選までの空手形 晶子

妻の愚痴束ねてゴミの日に捨てる

札束で揺れる心を見透かされ (前)洋子

束の間と知ってか花に無駄はない 凱柳

〔今月の推せん句〕

年寄り束ねられてはたまらない 株元玲子

年寄りだからと言って、何もかにも一緒

くたに束ねられてはたまらない。それだけ

の作者の若さが感じられる。

出発の花束受けて子は巣立つ 斎藤宏子

若者は、送別の花束を受けて新地へと巣

立つて行く。若者の出発の日の朝の爽やか

さが伝わって来る。若者は与えられた白地

図をどう塗り替えて行くのだろうか。

花束にならぬ花にも水やる 岡崎美江

花束にもならないであろう小さな草花に

も、作者は水をやることを欠かさない。

作者の優しい心が手に取る手に取るよ

うに窺われ爽やかな気持ちになれる。

川柳塔鑑賞

同人吟 古今堂 蕉子

— 5月号から

街中の猫がウインクして通る

白川 淑子

窓拭いて猫に添い寝の日向ぼこ

穂谷 和郎

どちらも猫好きな方でしようね。私など人にもウインクされた事がないのに、猫にそれも街中の猫にウインクされるなんて、猫の方も猫好きの方をよく知っているのですね。窓拭いてがいいです。折角の猫との日向ぼこ、庭の景色を見ながら暖かくしてごゆっくり。

年寄りの約束手形にある期日

内海 幸生

終焉まじか神に白紙の委任状

奥谷 彩子

若い時には死は遠い遠いものでしたが、人生のたそがれになるとみんなが持つ気持を約束手形、委任状など一寸固い言葉を使って、あっさり、すっきり句にされました。

見つめれば今日は憤怒の目の埴輪

吉村 久仁雄

机上の句でない思いと景色が感じられる。

風紋をラクダの舟でわたる月

鈴木 一弘

この句も鳥取の方ならではという、砂丘に込めた愛の伝わるご当地句。こんな優雅な景色を味わいたいと思います。砂丘には何度か行きましたが、暑い太陽と砂浜を懸命に歩いた記憶が残っています。

句読点打って呼吸を楽にする

川崎 ひかり

土佐の雨どこか陽気でおしゃべりで

小澤 幸泉

長いながい冬を沈めて土燃える

松山 芳生

春早い高知。雨までがお国柄を表し、

それに反し、春がやっと来た様子を土燃えたと表し、各々の土地柄を句にされ、

一日の、一週間の、ひと月の早いこと。

もう毎日句読点を打って、大きな深呼吸

して大事にゆっくり過ごしたいもの。

大笑いしてはならない活断層

細田 裕花

うっかり大きな声出したら活断層がずれますね。静かにしていきましょうね。

飲み過ぎたのでしょうか？それとも
チエーンスモーキングでしょうか？

奥様の静かな非難の目が黙って注が
れています。愛されていますね。

うるさい私より利いている様子が見え
ます。

シヤガールに目を覚まされた夫婦仲

藤井 則彦

幻想的なシヤガールの絵には、結婚式
や仲の良い男女が飛んでいるように描か
れている。そこに居るのが当り前になつ
た現実的な夫婦にも「あーこんな時が」
とはっとさせられるそんな様子が手に取
るように見える句です。時々初心に帰り
ましょう。

厄介な自分を見てる自分いる

大谷 篤子

私の了解も得ず背骨が潰れました。自
分の身体でありながらどうにもこうにも
なりません。全く厄介です。でもそれが
貴方なのと別の私が言っています。

飲み過ぎないでおこう。煙草は辞めよ

う。しゃべり過ぎは嫌われるわ、などな
ど厄介な自分を持って余している人は一杯。

もう一人の自分はしつかり気がついて
いるのに、ままなりません。

風に色つける富良野の花畑

藤井 正雄

幾何学模様植えられた花真盛りの富
良野。ハンモックで花畑を渡ってくる七
色の風と話をしたいなアと思わせる温い
句です。

凡凡の親で命を伝えます

山本 半銭

凡凡が良いですね。何も言う事があり
ません。重みを感じます。

まごころはガラスケースの中にある

武本 碧

壊れ易い心でしょうか？それとも誰に
恥じる事のない美しい心でしょうか？ど
うぞ私のまごころです。ガラスを割らず
に御覧下さい。

地球上の何人と出会えただろう

志田 千代

七十億の地球の民を思えば、私が出会っ
た人はほんの空中の塵にも似て、なれば
こそ出会った人との縁を大切にという思
いが句の中に込められた重厚な句でした。

天下泰平一升瓶の底で寝る

高瀬 霜石

愛する川柳に全身全霊を傾け、知恵と
努力とお金を注ぎ込まれる生き様に敬意、
脱帽。東に霜石 西に完司（敬称略）

時には一升瓶の林の中でお眠り下さい
（しよっちゅうはいけません）しかしそれ
も天下泰平ならこそ。どうぞお隣りの三
男坊核のボタンは押さないで。

二十年本社出席知らぬ間に

富山 ルイ子

最後に句会部としてはこの句を取らざ
るを得ません。本社句会御出席長い間本
当に御苦勞様です。ありがとうございま
す。知る限り何人もおられましようが、
シマ子、正雄、一風、飯子様他 etc etc

川柳塔の宝です。人生の目標です。師
です。いつ迄もお元気で御出席下さい。

水煙抄鑑賞

—5月号から

夏目一粹

数字にはならない勸という成果

稲葉 洋

勸というものは閃きとかカリスマ（超能力）などによるもので意外と当たることとがあります。でも数字で評価することは極めて難しいことです。

満点の答え付け入る隙もない

野川 宣子

満点の答えに合ったことではないのですが、あれば怖さを感じますよネ宣子さん素晴らしい発想に恐れ入りました。

雪よりも白いところを差しあげます

肥後 和香子

世知辛い世に、こんな純粹無垢な人がいらつしやるとは美しさに心惹かれます。

終活のマニユアル妻が読みはじめ

木田 比呂朗

就活・婚活など大流行りですが人間最

期の仕事はお葬式の段取りになるでしょう。終活に一抹の寂しさは感じますが。

責めるより許す心がすばらしい

堀 かずこ

同感です。責めると許すのせめぎ合いです。「許す」度量に美しさを感じます。

失敗を錨に変えてまた進む

相見 柳歩

錨に変えると言う比喻の巧さと失敗の反省を錨の重さに慎重さが伺えます。

零点でも明日があるさと子の陽気

小野 鶴子

0点には謙遜の意が伺えますが朗らかなのが一番。よいお子さんをお持ちですね。

そらされる話と知りつ風を向け

高山 清子

そらされると思っても遠回しに切り出すのが人の性（さが）だと思えます。

針の穴こんなに小さかったとは

村田 恵子

針の穴が小さいことは知っていますが老化によって再認識する恵子さんでした。

吼えるのは弱みを隠す時らしい

藤原 大子

負け犬がよく吼える心理かも知れませ

ん。「弱みを隠す」人間みな同じです。

友の字の乱れに心ざわめける

荒巻 夢

「字の乱れ」にも気づく友への心遣いがジーンと胸に迫り来るのです。

合格の類に寒風暖かい

石田 ひろ子

合格のよるこびは一人で寒さなど吹き飛ばします。よかったですね…

負けて勝つ夫無口を武器にする

田中 恵

「無口を武器」が気になりますですが私も同じ戦法を使います。いいご主人ですね。

煙たいなそれも存在感のうち

神野 千恵子

煙たさも、ほどほどにしないと嫌われます。確かにこんな人もいますよね。

宝くじ当たると怖いから買わぬ

谷口 回春子

一枚のクジでも可能性はありますが「買わぬ」となれば負け惜しみかも。

父からの小言八十円でくる

岡田 幸生

靴下の指のあたりに通気孔

岸本 清



観察と考察 (1)

川柳の作り方を大雑把に分けますと「観察」と「考察」になります。それ以外に「閃き」もあります。が、「作句方法」とはしささか趣が異なりますのでここでは言及しません。

川柳の基本は「今の自分の姿、今の自分の想いを表明することです。また、いちばん身近な素材は自分自身ですから、まず自分を観察してみます。課題吟の場合は、その課題を自分に絡め、自分のことを述べるようにします。

自分の身体を観察する

年齢は避けて通れぬ首の皺
小ぶとりでいよう長生きするらしい
折り紙の難所に指が太すぎ
ペンタゴはバブル時代の名残りです
足の爪切るのに邪魔な肉がある
それぞれ自分の体形や指、そして首の皺などを見て正直な一句にまとめています。他人の身体を対象にすると悪口になります。自分のことですから、どこからも苦情は来ません。読者も「私も一緒!」と共感させられます。

自分の日常を観察する

朝ごはん食べると眠くなってくる
本日は雨天と聞いて二度寝する
生きてるよ朝の雨戸を開けてます
何処へでも僕もワシもとついで行く
昔からお金持ちとは距離を置く

谷口 義
靴谷 和郎
安藤寿美子
鈴木いさお
岸本 宏章

私たちは同じ国に暮らしていて、経済状態なども極端には離れていませんから、それぞれの日常生活も似たようなものでしょう。しかし、自分の暮らしぶりを克明に観察しますと、上の句のように思いがけないものを発見できるはず。自分の持ち物を観察する

自分の持ち物を観察する

消しゴムと反りの合わない手漉き和紙
花鋏案外他に使えない
錠剤は転がるようにできていて
わたくしを助けてくれていた眼鏡
スポンジが渴いたままの化粧台
前4句は持ち物に対する自分の見解を、「スポンジが…」は、事実をそのまま述べています。このように、日頃から何気なく使用している小物なども「何か見つけてやろう」という姿勢で観察しますと立派な川柳の素材になります。身の回りの物はすべてネタであり、それは無限に転がっています。

自分のところを観察する

自惚れの耳にお世辞が心地良い
下からの目線で楽に生きている
やっかいなモノです良心の欠片
我が器大と見えたり小と見えたり
マンネリに気付かぬふりをし続ける

右の句はそれぞれ、「自分のところ」を詠んでいます。自分のところの中は誰も知りませんので、正直に述べるだけで独自性のある句になります。ただ、ここは目には見えませんが、物体を観察するほど簡単ではありません。客観的に自分を見詰め、ダメなところを晒す勇氣が必要です。

奥 時雄
岩崎 公誠
太田扶美代
福西 茶子

本社 五月句会

五月七日(火) 午後一時
アウイーナ大 阪

寒暖が日替わりのような五月、北海道では数年ぶりの雪、本州は夏日という異常気象が続く中、少し肌寒いが爽やかな天候に恵まれた七日、五月句会は百三十名(投句七名含む)の参加者で開催。初出席は、酒井紀華さん(箕面市)。句会に先立ち、先頃亡くなられた中原諷人氏、福岡末吉氏のお二人に黙祷を捧げた。

今月のお話は、三宅保州氏、題は「句会の在り方」まず西尾菜氏の語録から「川柳が上手になるに越したことはないが、上手に拘り過ぎてはいけない」を引用され、欠席投句の扱い方、句をランク付けすることの問題点、入選句数等々、出席して良かったと思う句会にどうすれば出来るか、などの問題点を投げかけられた。

(まつお記)

月間賞は、山本希久子さん(吹田市)

(司会)蕉子・善純(脇取り)千代・真理子
(受付)唯教・富子(清記)まつお

席題「喉」 川上 大輪 選

デートから喉を鳴らしてミケ帰る
イントロで喉が覚えていた演歌
鐘一つも笑いは取ったのど自慢
仲直り喉の小骨がとれました
大ジョッキ喉をきたえているのです
条件をすんなりのんだ喉仏
大ジョッキのどをならして夏を飲む
嘘をつくたびにびくびく動く喉
フルコーラス音痴の自覚ないようだ
ここまでと我慢している喉仏
悔しさで喉を通した苦い酒
民謡にちよつとうるさい喉仏
飲み込んだ鮎を巧みに出す鶏匠
喉の奥言いたいことがたんとある
鶏の喉いまわしい過去がある
そのうちに女性にだって喉仏
本当に嬉しいときは喉が鳴る
一合で円やかになる喉仏
いい声だ同じ喉とは思えない
私の喉住処にしてるえへん虫
どうしてもお世辞が言えぬ喉仏
顔よりもあのいい喉にほれました
いい喉をしてはるけれどラジオ向き
さりげない言葉の棘が喉を突く

月 子
あかね
隆彦
富美子
蘭 幸
唯 義
朱 夏
久 翔
光 久
隆彦
ダン吉
朱 夏
蘭 幸
堅 坊
能 子
美智子
扶美代
シマ子
正 和
一 風

当落すれすれ喉暖れるまで連呼する
厚化粧しても隠せぬ喉仏
いい喉と褒めてマイクを取りあげる
喉ごしはいいがじわつと効く法話
男でも女でもない喉仏
退屈が喉から砂を吐いている
いらん事言うたとたんに喉いたむ
いつまでも平和が続け喉自慢
堪忍の袋が喉でうろたえる
ノドどころか腹まで見せた鯉のぼり
カラオケは三曲までと喉が言う
男です神に戴く喉仏
喉ごしの良い女です惚れてます
佳
いいムードになってまさかの喉仏
喉元をすぎて後悔ばかりする
はつたりが消えてさびしい喉仏
不発弾が溜まる無口な喉ほとけ
喉元は過ぎたゆつくり昼寝する
人
美しい嘘喉ごしは上々だ
地
水ごくりひとりぼちの音がする
天
こんなにも小さい亡父の喉仏
軸
喉元を唇中見舞が通過する

克己
善純
まつお
武彦
保州
あきこ
シマ子
紀華
久美子
六 点
菜 月
たもつ
完 次
修
なぎさ
すみえ
扶美代
義
アキ
好
武彦

兼題「流行る」 飛永ふりこ 選

巡り来る流行待っている筆筒
 流行の服にも欲しい自己主張 准 キヨミ
 真知子巻き悲恋ドラマに火がついた 寿子
 流行などどこ吹く風とオンリーワン (矢)五月
 流行に疎くて今夜もひばり節 アキ
 鳥インフル流行っています黄砂連れ 柳 弘
 流行は追わぬと決めた象の鼻 希久子
 ファッションで村上春樹読んでます (田)章子
 ばあちゃんの背で聞いてた流行り唄 万紗子
 二十年前のスーツはニューモード たもつ
 チャーシューを倍にしてからよく流行り 大 輪
 流行の圏外にいるわたし流 富美子
 流行語に振り回される広辞苑 茂
 あれやこれ流行り追いかけて飲むサブリ 郁 夫
 政治家の失敗元に流行語 篤
 キンキラの流行りをまとい君と逢う (渡)富子
 フリガナが要るよな名前増えている 宣子
 ミニスカート流行った頃が華でした 美智代
 イクメンの流行ババのおんぶ紐 能子
 幼稚化が流行る言葉もファッションも 千恵子
 考えは同じポツクリ寺に列 淳 司
 目のやりば困る短パン流行る今 なぎさ
 アベノミクス老いの財布も踊りだす 直 樹
 流行の頂点で待つ仕掛人 誠 一

もう思い出せぬ去年の流行語
 流行の脆さを知っている鎖骨

棚ぼたが流行っていますすトセブン 奏子
 デイケアー女子太会と呼ぶおばあちゃん 由一
 流行るようテレビが力入れている 月子
 流行が去ってから知る流行りもの 千枝子
 流行大賞頭を搔いて受けている 肇
 手許には明日廃れる物ばかり 惠
 ばあちゃんもら抜き言葉を使ってる 月子
 親戚もお隣さんも家族葬 いさお
 流行らせた仕掛人らの高笑い 宏子
 流行の先端いつも妻がいる 山久
 流行に乗れぬ男のふとっばら 山久
 佳
 どの猫もスマホ握っている車内 完次
 カタカナ語の森で無口になってゆく 富美子
 AKB妻に隠していますCD 善純
 即興のギャグが列島駆け廻る 肇
 鳥の風邪空港で熱測られる 六 点
 人
 流行など縁なく立っている大地 ダン吉
 地
 詐欺までがアベノミクスをネタにする 善 純
 天
 流行りコトバには実弾を込めやすい あきこ
 軸
 流行りなど屈せぬ叫びヨイトマケ

兼題「ツアー」 北村 賢子 選

トラランクに梅干しそつと忍ばせる 雅明
 バスツアー黙ってるのはみな夫婦 則彦
 天国へ寄ってしまったバスツアー 大 輪
 世界遺産どんどん増えて旅続く 蕉子
 一泊の旅に健康保険証 由一
 土砂降りでも行程通り見るツアー まつお
 グルメツアーしばし秤を気にしない 克己
 後ろめたい介護まかせて行くツアー 惠美
 道の駅小松菜買っているツアー 恵子
 結婚というミステリーツアーです 真理子
 被災地を巡るツアーで増す怒り 一 歩
 別別のツアーで夫婦旅の宿 月子
 九割が寝てる復路のバスツアー 六 点
 観光地外国人に乗っ取られ 篤
 バスツアー無理にもトイレ行かされる すみ子
 バスツアー誰もが涙した知覧 善 純
 グルメツアー行くなど釘を刺す主治医 茂
 まだ砂が吐けないわたくしのツアー あきこ
 ちよつとわけあり秘湯めぐりのバスツアー ばつは
 おばあちゃんの鮎がとび交うバスツアー アキ
 期待乗せ婚活ツアー発車する 万紗子
 格安のバスも気球も無いツアー 六 点
 御婦人が男子トイレに来るツアー 朋 月
 馴れ初めはおひとり様のバスツアー 万紗子

遍路ツアー募集してまず春うらら
ひまつぶしネジをほどこいてバスツアー

人生のツアー約束守り抜く
旅に出てスマホばかりを見て終わり

青空と海をひと飲みバスツアー
名所旧跡流れ作業で観るツアー

人柄が丸出しになるカニツアー
降圧剤二ヶ所に入れて行くツアー

ツアーでもふたりの世界ふるムーン
グルメツアー鞆に詰める処方箋

バスツアー遠くの視野にいた案山子
団体が落ちて帰る旅の恥

一期一会の出会いと眠るバスツアー

バスツアー車体ナンバー写メしとく
春ですねツアー始めたアリの列

目の端で頭数よむガイドさん
保険金沢山掛けてバスツアー

二列目はうなずき役のバスツアー

ほとほとの幸せが乗るバスツアー

花咲けば花を追いかけ花ツアー

歴史街道夢追い人になるツアー

格安ツアー部屋に布団を敷いてある

たもつ

文代

千恵子

なぎさ

玄也

楓楽

堅坊

朝子

哲夫

瑠美子

久美子

希久子

宣子

宏子

好昭

忠昭

千代

あかね

富子

柳弘

兼題「茶」 都倉 求芽 選

グランフロント人に疲れてお茶にする
遺憾ですたったの二字でお茶濁す

茶畑が裂けて天災怖くなる
茶つきり節歌って富士を祝わんか

ペトリポトル茶柱が立つこともなし
東大出急須を知らぬ嫁が来た

アナログのレコードかける喫茶店
赤茶けたころへみどり浴びている

オーイお茶均等法が守れない
芦屋川オープン喫茶風も客

出がらしの僕にも味があるので
休日の紅茶とつときのウイスキー

野点席今日の正客揚げ雲雀
風みどり野点に丁度よい日和

生きている限り演じる茶番劇
古希迎え茶飲み友達出来て春

ラブレターの返事茶封筒で来る
我が家では天目茶碗に猫の餌

休戦の合図二人で飲む新茶
口説くにはやっぱりムリなウーロン茶

雑音もお茶うけにする社交性
他人事になるとわいわい茶がうまい

お茶だけで終りたくない露天風呂
春が過ぎ元の二人で茶を啜る

セツ子

ダン吉

一步

航太郎

千恵子

真理子

お茶だけの約束帰る千鳥足
おなごはんにお茶さそわれた先斗町

百歳を視野にしている黒豆茶
スキヤングルと茶髪を嫌う母の櫛

お茶にする母さんの手が荒れている
茶飲み友達ひとり出来たよ趣味の会

酒の席お茶で五角にわたり合う
言い勝てばお茶さえ喉に引っかかる

茶断ちして母はますます小さくなる
水も茶も呑めぬ病母にある笑顔

白旗のつもりで妻に茶を淹れる
何もかもお見透しです妻のお茶

お茶の時間ですよと仏さまに言う

茶渋にも主張システムキッチンで
お茶だけの誘いでないと判ってた

父さんはときどきお茶で酔っ払う
茶飲み友達お受けしますわ貴方なら

心ならずも茶飲み友達増えました

お茶飲んだ事が噂になっている

粗供養の抹茶で用を足している

お茶点てる仕事恋をしているな

佐助を供えて亡母とのむ新茶

六 点

富美子

唯 教

ダン吉

善 純

一步

和 夫

シマ子

朱 夏

楓 楽

和 夫

武 彦

朱 夏

柳 伸

修

富美子

茂

和 夫

扶美代

いくひろ

由 一

兼題「嬉しい」 鴨谷瑠美子 選

肩書きが付いて小躍りする名刺
嬉しくて二メートル程とび上がる
この歳でやっと嬉しい逆上がり
親友がタバコをやめてくれました
留学の孫のメールに子ができた
一年ぶりの猫が覚えていてくれた
この嬉しさ知られたくない胸の中
嬉しいこと嬉しく言える嬉しい日
新妻の嬉しい寝言覚えてる
あきらめた返事が速達で届く
長嶋さんうれしなみだのファンです (冊)章子
雅子妃の公務笑顔で無事に済み
嬉しさはうしろ姿に出るようだ
御世辞でもお若いですネ言われたい
嬉しいネ九秒台に夢咲かす
宿敵の巨人射程の距離におく
彼に返杯した父の目に見た涙
子が無くて友から届くカーネーション
ウエディングドレスは母が縫いました
満面の笑顔嬉しい時に出る
こいのぼりまごい一匹増えました
嬉しいに女がついていて嬉し
僕のおみ知っててくれたプレゼント
靴が鳴るを唄えば靴がなりだした (志)千代

彼ですと言われ嫉妬と嬉しさと
嬉しさに涙が先に堰を切る
うつつらと毛生え薬が効いてくる
アフリカで見ると涙の出る国旗
阪神は勝ったし花粉も治ったし
朝掘りの筍糠付けて届く
嫁の誘いに嬉しい顔を持ってゆく
嬉しくていつしか声が高くなる
嬉しさを倍にしたくて花を買う
君となら片道切符だけでよい
無事な顔見たらハラハラ出る涙
じいちゃんとキャッチボールをしよう
ありがとう言い尽くせない人と添い
住
十歳は若いですねと骨密度
嬉しいとついつい口が軽くなり
嬉しい時うれし顔していいのです
合格へ誰も聞いては下さらぬ
嬉しいと顔が笑ってすぐばれる
嬉しさは黙っていても解ります
地
嬉しいなボクの助言がきいている
天
富士山の世界遺産へ大拍手
軸
健康に感謝嬉しい五月晴れ

航太郎
堅坊
まつお
淳司
アキ
みつ子
楓 楽
保州
茂
耕治
加お里
航太郎
大子
たもつ
朱夏
大子
舞夢
扶美代
富子
好 篤
兼題「偉大」 小島 蘭幸 選
亡くなつてみれば偉大であった妻
花の偉大天下をばつと春にする
しんどいだらう偉大な人を父に持ち
あの綺麗星はスーさんとバタヤンだ
蒼天へ伸びゆく豆粒の偉大
路傍にも偉大な石が埋もれてる (七)順子
アベノミクスが歴史に名前刻むかも
太陽の偉大を知つて花は咲く
祭日も土日も蟻の列つづく
偉大な方へ黙祷がまだ足りぬ
絶対にも一歩も引かず国守る
八十歳挑むのはあのエベレスト
偉大な人になると周りが騒がしい
母の日の亡母に家族榮譽賞
偉大な父日々幼くなつていく
海賊と呼ばれ偉大な人でした
古里は偉大な人が並んでる
生前は変わり者だと言われてた
偉大さの評価歴史が裏返す
噴火などする偉大なる遺産
戦争を諫める神はいませんか
世界遺産祝して古稀の富士登山
懐に母は枯れない井戸を抱く
手が届きそう偉大な父老いる

堅坊
公誠
すみえ
航太郎
あきこ
靖博
恵美
富美子
瑠美子
ルイ子
まつお
いくひろ
和夫
富子
遠野
紀華
千代
哲男
求芽
ダン吉
哲夫
富美子
奏子

母はみな偉大そうでもない親父
偉大な人だったと知ったのは没後
理屈など抜きで千年杉偉大
失敗も美化されている偉人伝
私の偉大はガンに負けぬこと
母は偉大妻と女は怖いです
人間は偉大だろうか愚かだろうか
魔法の手持った主治医と生きてる
痛越えて世界の小澤タクト振る
偉大なるやんちゃ老舗を立て直す
泣く子もだまるオッパイを持つている (志) 千
十七歳ポルトと走る夢貰い 佳 紀 子 代

メシフロネル通した偉大なり男
目立たない偉人がひとり側にいる
キリストもアラーム偉大過ぎて揉め
偉大な顔に偉大な鼻が付いている
遺伝子の偉大メダカの子はメダカ
人 ア 朋 誠 扶 宏
キ 月 一 美 子 代

寄せ書きの隅に居たのが時の人
地 武 彦
仮の名は鉄人でしたひとりの死
天 哲 夫

今更に師の偉大さよ風薫る
軸 山本希久子

偉大なる父 笑われてばかりいた

楓 見
航 清
太 郎

日 好
の 出

楓 文
楽 代

篤 淳
子 司

哲 千
子 代

宏 紀
子 代

扶 誠
美 一

朋 月
一 子

ア 朋
キ 月

武 彦
哲 夫

山本希久子

句会 燦 燦

4月句会を読む

ひろ 博
が 賀
は 芳
こ 子

純白のころに染みをつけた風

朱 夏

あつ、染み。それも風の仕業なんて。風はころを洗ってく
れるものとはかり思っていた。「純白」とは、たとえば忘却だ
ろうか。すべて忘れて真つ白にしたはずのころに、ふつとあ
の頃の記憶をこぼし去ったのはどこからの風。

卵産みそうで探している凹み

保 州

いきなり産みそうになっておろおろしている感じが可笑し
い。さて卵は発明の卵、川柳の卵、はたまたまんの卵であれ、
内から殻が破られる日まで大切に温めなくてはね。

とろとろと優雅にやってくる花粉

美 花

花粉症ではなく恋の句と読みたい。空をやってくる恋の粒子
をハイスピードカメラでとらえたような「とろとろ」。まさに
優雅で、待つ身もうっとりとする。

介護ロボット待つて待つてます 私

義 子

一転、こちらの待つては切実だ。「私」からの発信でありつつ、
介護は社会が直面する一大テーマ。大変さを軽減してくれる介
護ロボットは介護する側、される側の両方に待ち望まれている。
しゃっくりが止まりようやく紅を引く 哲 子

なんでもない一瞬の切り取りが絶妙。日常の「あるある」を
気負わず十七音に仕立ててしまう作者のワザ。

牛井の並にたつぷり紅しようが

まつお

句から浮かびあがる牛井屋のカウンター。牛井だつて並なら
三百円も出せばありつける幸せなど考えながら、たつぷりとの
せられた紅しようが、その鮮やか過ぎる紅色が放つベソスに
見入る。

老せぬ増

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

薩摩切子今宵は冷やになさいませ
化粧水とことん叩くビンの底
粉々のガラス片から足掛かり
ベネチアンガラスの馬と銀河まで
水中花バツと散る夢捨て切れず
神の子が生まれるフラスコの中で
シャールから夢の未来が発芽する
ガラス越し初めましてと呱呱の声
ガラス越し母とゆつくり日向ぼこ
恋終り青い切子が残るだけ
梅一輪ガレの花瓶に挿す至福
少年の心ガラスに似る脆さ
書き慣れた漢字一つが出てこない
見舞客に早く治れと急かされる
晩年の焦りやたらと蹴躓く
平静をよそおっている鍋の蓋
平常心持てず倒れたやしろべえ
宿命と悟れば焦ることもない

和子 美枝子 町子 章子 純子 次根 起世子 イセ みつ江 孝子 典子 みね 保摘 菜摘 富夫 高夫

風の向き変わって焦る宮仕え
焦ります老いが出ました名が出ない
南極で氷溶けるという寒さ
カタカタとシャッター通り寒い朝
言い勝ってそれから寒い日が続く
風評に負けるものかと寒椿
技は良い心磨けと寒稽古
体罰を許す学校隙間風
三寒四温おんなころが掴めない
北国は雪の重さに耐えている
真っ白に今日の約束消す吹雪
ポツカリとメレンゲ浮かぶ青い空
冤罪を晴らし頭髮白くなる
日記帳白い痛みをとじ込める
定年後余白が多い日記帳
真心を色で書くなら白だろう
白いセーター心に春を響かせて
かあさんは木綿豆腐の味がする

川柳塔打吹鳥取

野口 節子報

昭枝 弘子 昇枝 俊枝 俣子 当代 義三 美羽 絹子 八重子 義雄 幹子 准一 智三 美花 ひろ子 大あくび酸素を吸ってリフレッシュ
春なのにあくびも出来ぬ輸入粉
なまあくび朝も昼も春告げる
酸欠か魚のような生あくび
一人居に靴音止まりあくびとぶ
総理殿田んぼの欠伸見えますか
紅椿ポトリと落ちる運命かも
無言でも胸に抱きたい落ち椿
落ち椿色気も失せぬ花の精
椿という名前も知らず椿咲く
柔らかに芝生に落ちる尊厳死

そつと見て触れては駄目と花が散る
花びらに恋をしたいな寒椿
椿の下で私の鼓動だけになる
美しいままに椿は死んでいる
スカスカで認知の門に立つ老爺
スカスカの脳を戴き八十路生き
どうしようスカスカだつた骨密度
スカスカの頭に入れる五七七
スカスカのパス私だけの貸し切りだ
スカスカの脳でひねって天に抜け
スカスカの心に春の海をそぐ
スカスカの財布にせめて夢を詰め
産声が埋めてくれます隙間風
一輪の花に空虚を埋められる
いつもより五日早いと梅が咲く
八十路でも花を咲かせて羽ばたこう
咲いたなら散る時期も来る世の定め
老いてなお夢を沢山咲かせたい
両側に咲いているのは美人花
ササユリが咲くとおらは有頂天
手をかけて咲いた花ほど美しい
おはようの声で我が家の花が咲く
ゴッホが死んでヒマワリが咲きました
マドンナが一輪咲いてクラス会

和子 記美恵 美ツ千 くにこ 清滋 重利 美代子 貴恵 泰山 照彦 玲坊 節子 義人 ひかり 久芽代 陽之助 悦子 勝憲 重忠 耕治 美知江 石花菜 紀の治

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

書くことが嫌いで辞書がはなせない
丁ねいに辞書が教えてくれました
辞書にない言葉並べて平成びと
すりきれた辞書が師を恋う静水忌
辞書にないお国訛が温かい

規代 房子 千代美 静風 幸子

父ゆずり辞書の裏にもある歴史
人間を顎で使っておネコ様
出来るだけ居留守使うの止めにする
ロボットの掃除が終わるまで眠る
新しい家電が使いこなせない
にんげんだけが使える愛を持っている
諦めて堪忍袋又すぼむ
酒袋いまはバッグにして洒落る
風船も袋もボンと叩きたい
慈母観音愛の袋の無限大
喜怒哀楽いっぱい入れた紙袋
給料袋一家で待ったのは昭和
三分で消える私の腹立ちよ
君の笑顔でサクラが咲くんだよ
熟女たち電池入れ替え喋り出す
春風が安定剤のように吹く
母の味何年経っても真似できぬ
新しいスタートライン桜咲く
月曜日体のスイッチオンにする
有難う口には出さぬけど家族

米子佳吉川柳会(鳥取) (前月分) 渡辺多美子報

近況に元気ですよと書いておく
天地人荒れる世の中すみにくい
惚け自慢皆な笑顔で盛り上がり
家に居て日日の情報テレビから
大気汚染マスク美人見飽きた夜
棟梁の告別式は町内会
ロードショーリズムを刻むビーナツ
誘い合い庇いあつてる友を持つ
鍋料理そろそろみんな飽きてきた

敬子 厚子 半德 蘭幸 年子 汎美 慶子 笑子 淑子 栄恵 力恵 輝恵 あゆみ 栄香 比呂子 歩美 史子 千枝 一路

今の世にうれしいことが残つた
宏之
松露川柳会(鳥取) 山本 正光報

立ち話道の往来雨模様
立ち話悲喜こもごもの話聞く
立ち話できる近所が好きななる
アイディアが立ち話からわいてくる
立ち話桜ひらら丸い背へ
ご近所の立ち話には価値がある
立ち話人の噂が行き来する
満開の桜たたえて立ち話
立ち話屋根の鴉も聞いていた
朋友と立ち話聞くよい知らせ

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

派手すぎる女に汚染されそうだ
もう一度やる気にさせるにぎり飯
土壇場でペコペコしないほんまもん
慰謝料をごっそり取つて離婚する
美代ちゃんも大きくなつてもずめない
派手な服吊るせばパツと春が来る
親の汗一杯吸つて子は育ち
もすまれて毒気を抜かれ猫となり
信念を貫きや出来ぬペコペコだ
入学祝い一寸派手目の熨斗袋
子育ての上手さ重石の利き具合
もすもより共存をする道もある
ペコペコとしているが腹は真っ黒け
ペコペコも生きる糧だと神の声
根回しの酒とは知らず派手に酔い
ごっそりとバケツに入れる過去の事
明子

公美枝 久枝 弘子 豊枝 静江 智恵子 和代 雄々 正光 洋々 無限 美恵子 凱柳 清信 文香 雅女 金祥 千代 妻子 みゆき 一瑤 毅 とも湖

井丸昌紀選

貧乏神が留守番空巢入れない
地動説信じるほかはない日の出
受け取つた言葉は丸くして返す
時々日は焼けもしたい足の裏
ネジ一つ余つてしまつ日曜日
本心は残さず桜散つてゆく
風向きを見てネクタイを締め直す
さくらにも駆引きがある開花時期
金もない知恵もないけど今日も飲む
眉ひとつ描いたとろろでチャイム鳴る
けいこ

佳句地十選 (5月号から)

松本文子選

机から筆と硯が消えたまま
予定表つろつろしてる暇がない
割れなべでよかつた蓋として生きる
うつらうつら童宮城へ着きました
飲み過ぎて妻の寒波に耐えている
足枷にならないうちに消えましよう
ぼつぼつと行つて三角まるになる
仏壇にあの日と同じ雪ですよ
君の住む街にも春は来ましたか
友達をいっぱい持つている桜
晴美 千歩 信子 典子 一呑 夕胡 知恵子 澄空 ひとみ 扶美代

金借りる時はベコベコ腰低い
 仲裁が派手な喧嘩の泥被る
 これからも大事な人だ五十年
 もずむため金に糸目はつけません
 年金はごっそり嫁に預けます
 朝帰り頭下げますベコベコと
 派手な妻地味な夫で悲無い
 目標の百万円が未だ出来ぬ
 派手な事出来ぬ家計にひびきそう
 私のハートごっそり彼にあげました
 ベコベコと頭下げても断られ
 ごっそりと捨てられそうな高齢者
 怒り心頭ベコベコ詫びが通じない
 ベコベコをするなど妻が釘をさす
 張りボテの虎がベコベコ頭下げ
 男一匹派手な女に騙される
 ベコベコとして私の下心
 重すぎた夢をごっそり捨てました

富柳会(大阪)

古田 千華報

昌 鼓
 地佳平
 善 夫
 圭一郎
 茂登子
 隆 浩
 秋 月
 一 京
 はつ江
 蟹 郎
 節 子
 春 名
 由美子
 孝 二
 弘 康
 行 男
 房 江
 一 粹

昂ぶりを交すグラスは目の高さ
 五感映くみごとな闇を知っている
 闇抜けてやっとな掴んだ主役の座
 節分の鬼は追われる走らねば
 コップ煮三角四角丸を刺す
 おでん煮る明日はわたしのお出掛け日
 おでん鍋家族まあるくつつむ湯気
 頑張るぞ掛け声ばかり先走る
 咲き誇る月下美人と闇に酔う
 柗の勝手鬼など追うものか
 関東だき今宵やんわり攻めようか
 しがらみを捨てて走れと風が押す
 私の浅き器に盛る大志
 好物は冬のおでんに夏はそば
 おでん鍋置いて一泊妻の旅
 ハンカチに包める小さな春である
 太陽を浴びよ男の生乾き
 深い闇おんなは意地に火を灯す

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

彦 次
 未 知
 深 雪
 惠
 和 子
 晴 美
 千 恵
 慶 子
 正 治
 寿 之
 ア キ

しつこさは食だけでいいのは中華
 北は雪南は桜ふぶく春
 医学部へあと六年の辛抱を
 上げ潮にのつた男に逆らえぬ
 小屋に花犬の命日ついほろり
 通夜葬儀いつか他人も耐えてくれ
 有り金をはたいて喰る黒田節
 川柳塔おっぱい吟社(香川)川崎ひかり報
 佛前に母が好んだ桜餅
 満開の桜に老母の背がのびる

欣 之
 信 子
 佳 子
 浩 子
 武 人
 奏 子
 登 子
 壽 峰
 高 鷲
 よしみ
 清 華
 千 華
 澄 子
 七 朗
 澄 子
 扶美代
 紅紫朗
 森 子

思い出す桜花の下の初デート
 桜咲く孫のカバンが光り出す
 咲き誇る桜の下で祝い酒
 ヘアピースつけて心もリフレッシュ
 ひと握りしめない老母の髪を梳く
 北澤 稠民報

川柳さざやま(兵庫)

久子

今昔リンゴかぶった歯がほしい
 一つを捨てて豆を数えた亡母を恋う
 句の味特別一品増えて春
 カラオケは年金もらうものばかり
 合格の御礼の絵馬が見当たらぬ
 老いて行く不安だらけの寒い坂
 安っぽい同情などはいりません
 無器用が生きる道ですマイペース
 平凡な幸せおでんの一人鍋
 介護してうまい息抜き身について
 長男に生まれとことん土に生き
 する事があって健康保たれる
 高齢の弱い野心で炎出す
 もう年だと思わぬように心がけ
 脳散歩辞書と遊んで心満つ
 もう少し燃えていたいな七十路
 高知川柳社 小川てるみ報
 お手植の苗木に触れた植樹祭
 苗木に日本育てる菌も居る
 花好きな男へ苗のお裾分け
 苗床にずらりと春を待つふた葉
 子育てと同じ気持の苗作り
 津波対策メタセコイアの苗植える

よしみ
 弘
 いさむ
 くに子
 ひかり
 久子
 美緒子
 純子
 美紗子
 哲男
 稠民
 真由
 多美子
 開子
 可住
 かほる
 幸子
 ちかゑ
 照代
 美智子
 ふき
 哲史
 暖
 千鳥
 てるみ
 圭二

ジルバ駄目チークダンスは得意です
人生を変えたあの夜の盆踊り
出番ないダンスシューズが欠伸する
踊ったらこちらを向いてくれますか
春うらら犬も昼寝で日向ぼこ
母恋し桜吹雪の真ん中で
関根が闊歩三月の大阪
母さんの笑顔に見えるおぼろ月
脱ぎ捨てて春の日差しに遊ばれる
神造られた指一本に無駄がない

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

毒舌の裏に潜んでいる慈愛
極太の線を足したい老いの坂
据え膳で雑魚の域から出られない
誘うならお酒にしてよお茶は嫌
春うらら桜分一新して挑む
薄墨の桜よ凜として母に
美しい方がやっぱり毒キノコ
無礼講虎の尾を踏むこともある
無になろう酔うだけ酔うて仏さま
お水取り冬をめくつて春を呼ぶ
明日知らぬ花満開の有頂天
躓いた心の中にある懺悔
ハチキンを三人掛りて酔い潰す
生と死の間を埋めた運不運
だまされてあげよう春の玉手箱
一本の權を与えて子の船出

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

ふるさとへ私ひとりの風が吹く
三才児りモコン駆使し機嫌良い

忠 昭
弘 風
あさ子
典 子
タカイ
あおい
昌 紀
志華子
柳 伸
たもつ

いよいよになれば私が腹を切る
古里は私を好きに泳がせる
四季巡る日本の時は万華鏡
いよいよか生きた菩薩に見えてきた
時々の非情の顔は気付けせぬ
リモコンで動かすメタボかすつて
イケメンウーマン八重の桜を真似て生く
リモコンの奴隷なんかななるもんか
胡坐かき女が足の爪を切る
この家に座り続けて灰になる
美しく貧しく老いた座りだこ
労働旗高く揚げた吾が青春
リモコンに慣れたいのちが薄くなる
空に月リモコンそつとOFFにする
宴会を退く汐時に袖引かれ
今日も元氣朝餉の椀に生命盛る
時々手抜きするのまた介護
下座から鯛のしつぽを眺めてる
子を想う時々電話かけてみる
米びつの底がよいよ見えてきた
リモコンの便利さ寝床から甘え
座らずにもう少しだけ歩こうか
残高もいよいよ底をついてきた
正座して正面見据え嘘もつく
安穩な時が続いて不安
我が妻もリモコン操作してみたい
学び舎をいよいよ巣立つ娘の瞳

茶 子
和 子
実 満
孔 美子
盛 桜
弘 子
石花菜
はるお
宣 子
八 重
照 彦
小 鹿
美 千
蟹 郎
彩 子
いさを
すみれ
くに子
京 子
かおる
富久江
みさ子
満 子
惣 子
露 子
美代子

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

不揃いがうまい証と手打ち麵
二八蕎麦好きで粘りが足りぬ人
旅先のおどんの味に地理・歴史

末吉のおみくじリクルートスーツ
占いは駄目だったのに桜咲く
真夜中に星占いを魔女も見る
当るなら惜しい見料ではないが
つくづく前世古方胸の鏡
占つて明日が晴れなら跳ねもする
酔いつぶれうっかり三途の川のそば
うっかりかボケ始めたか微妙です
デートの日うっかり忘れそれっきり
うっかりへつかりしんばから春もらう
渦を避けうっかり者で押し潰す
うっかりと記念日忘れ妻噴火
受話器手にうっかり聞けぬ孫の声
敬老日祝いもひとりなれて

春 代
信 男
正 勝
郁 子
契 子
黒 兎
長 一
順 子
正 代
桂 子
久 桂
幹 治
康 子
久 仁子

春 代
信 男
正 勝
郁 子
契 子
黒 兎
長 一
順 子
正 代
桂 子
久 桂
幹 治
康 子
久 仁子

昭和史を生きて祈りの夫婦花
ふる里の星空はこんなにも近い
春の芽が今か今かと天仰ぐ
太陽が出て雪下ろししていった

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

セールのしつこさそんな暇はない
挑戦にケチつけられて奮起する
嫁姑耐えてるうちは笑えない
縁側の甘い話に蟻が寄る
なるほどとメモに残してそのまんま
このために働いている給料日
新品も質屋流れのルイヴィトン

わかあゆ川柳会(島根) 松本はるみ報

深呼吸予定どおりに日が暮れる
ほのほのとさせるしぐさの孫二人
一杯の水が美味しい二日酔い
譲られた席はほのほの暖かい
とおい日の歌覚えてる姉の声
妥協して少し冷たい酒を飲む
どうしても心が揺れる神だのみ
外国で挙式一日クリスチャン
一線に隠れた技の筆の跡

川柳やがわ(大阪) 籠島 恵子報

風車ゆつくり廻す風がある
少しでも明るい彩で老い払い
病院で待たされ人を観察す
信頼する組織みんなが盛り立てる
散ることがかなわず褪せていく造花

花匠 黙人 慕情 姦

遡行 幸子 まみ子 雅美 百合 かつ子

恵美子 澄子 ちよえ かつ子 英子 はるみ 好栄 昌 泉

博泉 かつみ さち子 ルイ子 弘一

真つ新たな命希望の幕開ける
奈良町のロマンにひたる花の旅
世渡りの下手な男と居る不便
紅をさす蓄の鼓動きく詩人
不便さで人情あつく助け合い
組織からがんじがために縛られる
花の種まいて幸せ募集する
脳みそも賞味期限が切れるそうだ
便利すぎ不便知らない子が育ち
春風耐えて咲きたる八重桜
部員募集体罰無しと書いてある

川柳クラブわたの花(大阪)西川 義明報

贈り物やっぱり論吉様にする
母の日はやっぱり欲しい贈り物
輪の中ではっこりしての趣味の会
議員秘書から札束の罪あばかれる
出勤に持たされてるゴミ袋
カードなら人並み以上ある財布
寒い春母のお墓にカイロ当て
底力気持ちひとつで華が咲く
人生はまさかまさかの運不運
雑納め離ればなれに歳の中
筆不精老母に携帯プレゼント
帰り際娘にそつと無地袋
老いてゆつくり丁度いい道亀のごと
ねぎらいと感謝の言葉が持つ魔法
切に願えば一瞬光る母の星
先生もいじめつ子にいじめられ
ありがたい五体動かし物忘れ
母から子受けつがれてる家の味

賢子 美江 朝子 洋 忠央 三郎 一風 仁清 薫 尚世 祥昭

義明報

ますみ 知佐子 美代子 宏至 いつみ 宏 晴美 俊子 義明 はじむ 浩三 愛子 博子 和子 耀一 正春 孝子 かなえ

宿六は話題にのらぬ味気なき
知恵袋あるはずなのに見当らず
鶴と亀長生きしたのを誰が見た
あたたかい和みを抱いて孫がくる

長柳会(大阪) 坂上 淳司報

霊柩車の試乗切符はいかがです
間違っても結果良ければ全てよし
間違つて肩を叩けば知らぬ人
お化粧をとれば全く別の人
着物着て気取り気付かず左前
間違つてふわり下着が隣りの木
装いにママを間違つ幼稚園
間違つて核のボタンを押さないで
ビールから発泡酒へと口も慣れ
遣り直せると母のエルが飴する
成し遂げて未練残さず野に下る
大げさな介護者四人通り抜け
ラッシュ時に論吉で切符ブーイング
故里へもう通らない顔切符
肩たたき券母に贈つた幼い日
靴箱に間違ひ入れたラブレター
晴天に切符の要らぬ花見席
間違ひを認め笑える歳になる
故郷発つ不安と希望抱く切符
ふる里への片道切符母の顔
よく笑い長寿切符を手に入れる
合掌の手に宿す極楽切符
二代目は社長切符を手におギヤ
助けてくれ花粉に黄砂2:5
切符代高くて町が遠くなり

弘光 正博 ふみ たけし 靖博 克三 和代 敬二 けい子 幸和子 芳野 孝代 隆彦 弘篤 正光

福子 もこ 輝子 武男 辰男 淳司 福子 もこ 輝子 武男 辰男 淳司

旨い酒五臟六腑と酌み交わす 久美子

ローズ川柳会(兵庫) 木村貴代子報

エレベーター「2Fです」と微笑まれ
十年満期はるか先だと思つたが
七光りばかりが目立つ永田町
尼寺に竹箒あり苔光る
かたつむりこの木の高さ知つてるか
十時間飛んで遙かへ友は旅
一週に光に遠い夢託す
哀しみも遙かになれば美しい
哲子 藍 子 藍 子 藍 子 藍 子

川柳塔きやらほく(鳥取)大塚 恵子報

天真爛漫優しく鬼を抱く桜
唇をチエリーピンクに変える春
天変地異さくら待つのもくたびれた
あれこれとやりたい季節やつて来た
レントゲン医者の無言が長すぎる
許し合う心があればもつれない
百箇日このあたりから立ち直る
頂上はまだまだ山坂こえながら
落書の続きが書いてある扉
キョービット木がふらふらとジイ共
咲き終えて一本松に折り続けて
シンボルの一本松に折り続けて
瑞枝 麗 子 晴 子 鶴 子 富美子 未延子 亜弥 喜周 寿々子 千代 恵子

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

笑い袋なみだ混入したの誰
繁昌亭笑つて心空っぽに
人生を考えすぎて鬱になる
入学式爺婆付きで席がない
扶美代 賀世子 秀夫 敏子

値上げだけアベノミクスがプレゼント
百均を一ドル店にする政治
まだ引退出来ぬ自転車今日も漕ぐ
腹かかえ笑いころげている無心
原発の引退お早く願います
サングラスもつたないよこの瞳
つぶらな瞳も白内障になりました
この辺に夢の欠片が落ちて
シンデレラの瞳も曇る遺産分け
懸命に求婚ダンス鳥社会
真剣に咲いて儂く散るさくら
たつぷりと曇含ませて詰める息
株高値笑える側に回りたい
笑うてたらあかん憲法消えまっせ
親しんだ椅子に別れを告げられる
引退後家事分け合つて悉無し
ほちほちと引退しよか浮気癖
モナリザの瞳を横切つたピエロ
痩せてなお瞳かがやく裸足の子
オスブレイ飛ぶならどうぞ失脚で
丸腰の真剣勝負腕相撲
盲導犬引退したら遊ばうね
惜しまれ引退野の花を愛でる
三つた矢庶民ばかりに突き刺さる
琉球の昔に戻せ美らの海
男坂笑い飛ばせぬ落し物
母の瞳宝石でした私には
小手先の0増5減許せない
脅かしのポーズふくらむ北の核
実印もカードも持たぬ年金者
袈裟懸けてズバツと斬りたい男いる

峯二 哲男 朝子 桃花 直子 和代 信子 たかこ ばっは 克己 穂夫 一志 和志 たもつ 壽峰 大気 敏治 隆昭 団扇 六點 愿 鈍甲 いさお 信二 生枝 和雄 紀乃 忠昭 勝弘

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

東北へ花の便りも急ぎ足
野の木々に名前をつけていとおしむ
みちのくへ繋ぐ絆があたたかい
年賀状手書きで一句添えて出す
花いかだ母の便りはひらえてなで
木蓮は田舎の白いにぎり飯
テレビ見る祖母の膝にはいつも猫
春うららら花を連れ出す車椅子
春うららら花に疲れて飲むコーヒー
長丁場耐えて花咲く宮仕え
葛城の山裾花の九十九折
雨風の日には語らずに咲いている
春一番百のみどりが動きだす
いよやかで春の鼓動に耳澄ます
いよやかの小さい里にも戦没碑
いよやか山の気澄みて桜舞う
赤ワイン人肌ほどの爛も善し
山紫水明心もかくやあらまほし
紫木蓮気品そなえた春の顔
伴走のロープの先に暖かさ
媚びる事知らぬ深山の八重桜
真実は川の淀みの底にある
重ね着もやさしく脱いで友が来る
焼ききたてとお好み提げて
脇役の花がびつたりです私
新緑のベール私を抱きにくる
花の有るひとで一座を盛り上げる
生活苦花より団子の方が良い
いよやかな景色家まで連れ帰る

蛙城 昭 益祥 和子 香代 和美 絹子 准一 幸子 智三 珠昭 隆輔 大團 保州 弘子 英夫 ひろ子 宏夫 まき子 みつ江 美羽 美枝子 義雄

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

春風に乗ってどこかへ旅したい
耳元で大きな声で話してる
ひとりでもやっぱり声を上げて
シンブルに暮らす家庭にゴミが減り
ひとり者煙草の始末気になる
雪女に会える気がする山の宿
後ろめたい味になつてきた煙草
ふたりより友が気遣う長い春
耳元で囁く鬼の美辞麗句
煙草止めて良かったなあと思
禁煙を誓いストレス溜めて
渡り鳥宿替え準備夏還拳
亡夫との思い出探し伊豆の宿
現世は仮寝の宿と知る余生
年一度家族の絆繋ぐ宿
声をかけ振り向く顔は人違い
傘寿にも愛の告白してほしい
音痴でもきれいな声は心地いい
シンブルに生きるしかない預金帳
寄り添って一緒に泣ける人になろ
人生の終焉願う家族葬
単純なひと喜怒哀楽がすぐに出る
鋤焼きが教える今日は特売日
開花予想幹事悩まず春天気

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

手助けの要る坊ちゃんをもて余す
父さんの小遣い上げるゆとりない
あげた手の落とし所もみな読まれ

雄太 アヤ子 ダン吉 里喜雄 六つ美 扶美代 庸佑 美代子 いさお 章司 光男 ヨシ枝 久仁子 ちづる フジ 敏 千鶴子 泰子 美喜 高鷲 登志子 佳代子 喜久子 月子 さくら 誠一

駄目押しが出来ず息吹き返される
はきはきとまっかなほつちび役者
切り花が水を上げたか生き返る
残り火も花火上げられ消えていく
張り上げた声に自信がありそうだ
手を上げる人がいなくてあみだ籤
別注の極つてあるゆとり
貰う上げるどちらも無縁赤いバラ
手を上げる我慢幾度か五十年
自分のこと棚上げてと子に衝かれ
年金の枠で平和に暮らしてる
ラッシュアワー押されて押し無いゆとり
堪り兼ね熱血教師手を上げる
時間ならおすそ分けするほどにある
ゆとりある暮し装う火の車
無理せず電車で一本待つゆとり
春のドアまっすぐ開けるチューリップ
良い方に何でも取って元氣出す
反論を鼻で笑っているゆとり
少年は手ぬるい法を知っている
育ち盛り大きい服を着せられる
精一杯して差し上げて事終る
父さんはまつりあげられ蚊帳の外
大事なものは大事なものにあげますの
愚図じゃないゆとりと言つてもらいたい
手ぬるいのが心やさしい人が好き
年金のほかにへそくりあるゆとり
無免許の事故判決が手ぬるすぎ
網棚の荷よさようならドア閉まる
打ち上げのあとは幹事の独り酒
音を上げること許さぬ草のび

玄也 冬虹 のん子 りつえ かりん 五月 愿 好 山 澄空 舞夢 光 八千代 和幸 雅明 俣子 ばっは 日の出 清 雄 時雄 世紀子 半銭 千代 とし 敏治 唯教 朋月 健吾 清晋 和夫 天笑

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

ストレスは溜めずお金を貯めている
あれ以来大の好物握り飯
別れて以来肋骨のあたり彼がいる
懺悔以来鬼の住処がひかりだす
はいわよと受けた荷物重いけれど
安請け合い公約程でないけれど
縦にしか首を振らない好々爺
それならと総理大臣引き受ける
はいはいと安請けしては肩が凝り
ゴミ置場気軽に承知妻不服
喜んで安請け合いの孫の守り
はいはいといつも悪いくせが出る
日銀はいくら刷つても罪ならず
少子化に子供三人銀メダル
長老の一語一語はいぶし銀
大銀杏夢みて今は四股を踏む
銀婚を迎えてやつとわかり合う
アイシヤドー金銀赤で変身す
亡母の形見ゆつくりませる銀の匙
三吉の銀が泣いてるそっぽ向き
銀舍利に梅干しの紅玉の愛
銀世界人の命も脅かす
いつの日か銀河泳いでみたいもの
水なすも走りやからと高値つき
全力で10分走るときと死ぬ
走り書き残して妻の反抗期
丁寧になが道を行くラストシーン
答え出す歎異抄へと走り込む
押し込めた思い堰切りほとばしる

日の出 克己 シマ子 靖子 蕉子 半銭 和代 昌紀 りつえ 定子 満知子 芳香 勝弘 志津子 公誠 克博 順子 美世子 たかこ 一歩 裕之 萌 典子 チエコ まつお 直子 美籠 五月 賢子 (矢)

追悼の鉄の女へ反旗揺れ
人生のルールの中で花咲かす
息災に手を振る母の祈り旗
駆けてくる君の背中に羽根がある
ルールから解放された退職者
円満な家庭母さん旗を振る
子の為に振る手を止めぬ母の旗
乗り過ごし出合った恋もありました
日曜のコックはパパと言うルール

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

悪友になった因果は縄のれん
ふたりより傍が焦れてる長い春
滅多にないことなんですと詫びられる
正直な人の心は真ん丸い
再会でまた理み火が赤くなる
サッチャーが我が家にも居る安堵感
サクラサク滅多に吞まぬ父の酔
さあ夜明け妻が旅行だ頑張るぞ
万歩計滅多に万歩越えませぬ
滅くちやでもいから欲しい諭吉なら
心音はいぞまだまだ飲めませぬ
朝ばらけ昨夜の酒と乗る始発
公園で二人花見の車椅子
若者の言葉を真似ている無粋
夜が明けるまでには心定めます
生涯に出合えた友は宝物
桜さくらサクラが誘う花の下
運命の出合いは神の軽いしゃれ
同じ日には滅多に死ぬぬのが夫婦
運命の出合いへ神が味方する

宣子 順子 一子 ひとみ 歳子 淑子 キヨミ 章子 正和 行兵衛 庸佑 比ろ志 くらり 徹二 健二 美津子 幹治 美留子 歌留多 美佐子 隆 紀子 満子 勝弘 久子 則彦 美籠

年金で食わせて貰う有難み
生き抜いた父の時計は狂わない
ハシゴ酒そつと夜明けに頭痛薬
愛犬がいつも心配してくる
出合うのは定めどうするかはわたし
スーチーさん正義崩さぬ手本なり
ここ空いていますかはい言う出合い
ふらふらと正解のない世を生きる
いい夜にみんなを包むおぼろ月
不器用に生きて今年もさくら見る
再びの出合いを願う花筏
夜明け前しじまを破る呱呱の声

京都塔の会 樹本 宏子報

掘り起こすたびにあちこちゆく卑弥呼
無理無理に起こしています記憶力
窓際でヤル気起こして飛ばされる
案の定妻はわが家の指揮をとり
人はみな死して煙になる定め
あなたとはしつくりいったことがない
輸人品買わず野菜は道の駅
起きた事あるがままにと受ける年
会うたびに好きと言うのがお定まり
ごつごつがしつくりとなる五十年
しつくりと優先席に坐っている
日米でしつくり行かぬ米や肉
ユキヤナギどんな花器にもしつくりと
しつくりと着こなす君がまぶし過ぎ
切れ過ぎの剪定ばさみ花芽切る
髪型もリボンにしつくり良い天気
夫婦の子奇跡起こすはちと無理か

武臣 千代 茂子 菜々子 玲子 清子 耕治 巴子 求芽 美智代 千鶴子 いさお 求芽 葉子 則彦 昭 英旺 紀乃 満子 文代 義昭 啓生 森子 益子 泰夫 宏弘 悦子

共白髪いつかひとりになる定め
ニセ舞妓しつくりしない歩き方
白髪に和服姿が素敵です
佐保姫の声で桜は目を覚ます
定期便小島の春は船で来る
しつくりとこない隙間に肩のこり
一斉に起床ラッパは山の家
起こさずに寝かせてやれと日曜日
起こしてね言われた私が起こされる
定款を変えねばならぬ新事業
定年の時が危ない離縁状
雲の上歩いたような日を過す
このままで何も起こさず生きていこ
復興の起爆にも松の苗

川柳塔まつえ吟社(島根)相見 柳歩報

ささくれた指でデザイン生まれます
デザインの軽さに秘密シヤボン玉
デザインを評価したのは自分だけ
デザインは明日の天気見て決める
卵抱く鳥の嫩しい眼と出会う
口下手なマトリに入れまご抱えている
正解はたまごの中に入れている
われわれは偉大な川柳たまごです
偉そうに皿の真ん中目玉焼
病気から逃げるもつともつと遠くへ
がつがつとすればする程逃げる運
流行がタンスの中で逃げて行く
死神にちよつと待てよとにげてきた
ブロッコリーの森へと世間から逃げる
もの好きでいろいろなた物貯めている

万紗子 さゆり めぐ 比ろ志 篤子 篤子 篤子 欣之 庸佑 五月 輝美 福子 美津子 ちえこ とも子 青帆 桂子 松丘 裕子 美智子 聡美 久枝 幸代 芳恵 輝山 芳山 叮紅

いろいろを越えて築いて来た阿吽
 十人十色一期一会のバスツアー
 いろいろと文句並べて逃げる風
 振りかえりやいろいろ踏んだ迷い道
 いろいろと天井の節間いける
 さくら散る下であわいら聞いている
 首にカメラ二つ下げてる日本人
 悪徳を防犯カメラ見逃さぬ
 ビンボケが歓迎される顔の皺
 監視カメラに残高ゼロを笑われる
 北へ飛ぶ鳥の哀愁撮るカメラ
 胃カメラへ覚悟かごの深呼吸吸
 カミさんや美人に写すいいカメラ
 胃カメラに写る失恋の傷跡
 震える手おおよそで撮る花の滝

米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

市場では山菜並び春香る
 病の巣ドック入りして探し出す
 世の中はくでもできることがある
 学期末上へ下への通信簿
 新人を勝手に同志にしてしまふ
 優勝旗モンゴル好きと離さない
 川柳に深い人生修羅を観る
 花に囲まれ春が訪れる
 葛参り恩を返せぬ人ばかり
 高菜茹ですぎ何度も母に叱られた

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

積んだ本早く始末をせまる本
 阿呆やかおんなじことしてまた泣いて

昌枝 たけし 涼子 幸子 雪代 柳歩 知恵子 注湖 長吉 草庵 久絵 左余 千里 弘充 寿代 禮子

礼子 正二 公一 ひろし 宏之 貞雄 幹啓 登美枝 紀の治 未延子 じろう わこ

始めだけ人見知りするおしゃまな子
 戻り寒コート出たり入ったり
 泥の世も真似て咲きたい蓮の花
 魚棚に春の訪れてんこ盛り
 一日一旬年始の誓い守られず
 ごくろうさん制服畳む定年日
 一期一会少女と春が戯れる
 泣いたつていよいよ立ち上がり
 鼓動音エコーで分かち母となる
 母と見た桜笑ってくれました
 ためらいの奥にちらつく人の好き
 惚れているだからあなたに笑い下手
 飾らない笑いこころのドア開ける
 ふる里は終着駅で始発駅
 花笑う庭に誘われ紋太句碑
 ロッカーで制服脱ぐと主婦の顔
 子の笑顔一生分を親孝行
 制服が一年生をらしくする
 満開のさくらと共に散るいのち
 制服でかしまつてた初デート
 親子でも一歩ゆずって笑い合う
 始めから返らぬものと貸すお金
 昔のようにさつと跳べない水たまり
 人生のドラマ始まる呱呱の声
 ためらつて追伸一行本音書く
 始末書を折角出して左遷とは
 制服の先入観に欺かれ
 モンシロチョウひらりふわりと思案中
 へこたれず泣いた数だけ笑顔ふえ
 大家族笑い声さえ五重奏
 三途の川行きつ戻りつ生きている

歳子 キヨミ 文香 千賀子 利子 淑子 秋果 ひとみ 晶子 章子 直子 忠子 美籠 盛夫 哲男 伯備 比ろ志 朋月 一徳 光子 千代 美津子 折杭 武臣 浩司 遼子 野鶴 弘子 玲子

カミノリより鈍刀でいい僕の子だ
 小銭なく千円入れたお賽銭
 六甲川柳会(兵庫) 伊勢田 毅報
 白秋のリズムに弾む脳細胞
 今日も無事鼻唄まじる仕舞風呂
 通気孔がなぜか高さを競い合う
 鼻唄をお隣さんに褒められる
 鼻歌が流れ長湯を覚悟する
 ビノキオの鼻は折れてもセメダイン
 鼻歌を聞く日は祖母のちらしずし
 すぐわかる親子だ鼻が胡坐かく
 鼻先でふる香水はパリの風
 痛いほどときめいたのは大昔
 お医者さん首をひねると増す痛み
 トンカツの衣ちくちく胃をつつく
 痛いとお衝かれて暫し無言劇
 門限の今か今かと待つチャイム
 子のチャイム見過ごさないでお母さん
 人生の終わりのチャイム鳴り始め
 幸せをチャイムに祈る朝のミサ
 御無沙汰に詫びるチャイムをそと押す
 チャイム鳴り元気な孫の声はずむ
 ただいまと聞こえるように押すチャイム
 いやな事聞えた脳にチャイム鳴る
 はずのない人のチャイムを待つている
 スタートは同時努力が差をつける
 都合よい言葉補聴器拾ってき
 傘寿でも女忘れぬ紐を引く
 満開の桜の下で伸直り
 今朝の揺れあの日の地震よみがえり

武彦 茂 毅報 いわゑ 千賀子 和郎 登美子 茂 和子 武彦 寛子 洋一 道博 義博 能子 ひろ 博史 繁義 美恵子 忠貞 邦臣 邦臣 洋次郎 光久 美穂 弘子 康子 ひとみ

お守りに頼つてばかりいる弱さ
人生の終りはせめて在宅で
挨拶は人の心を動かせる

君思い桜吹雪の春に酔う
青空になるまでハート休ませる
少子化を憂うプランコ錆が浮き

ためらわず一歩踏み出す野はみどり
ここだけの話はいつもキナ臭い

楓 楽

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪

拉致と核無くす願いへ掌を合わす
安産を願うお守り持つて母
手を合わす一途な願い天を衝く

穏便に平和願うも親心
りハビリで母の半歩が出せるよう
願つても動かぬ人の底力

願掛けにどうぞ神さまま仏さま
欲深い願いに遺影困らせる
願ひ込め被災地に吹け春の風

近頃は神の死角に居るらしい
我儘なら誰にも負けぬ柱石
情念の火柱胸に秘めている

歪んでる柱絆で立て直す
続編で少し揺らいできた柱
柱のキズ家族の歴史刻んでる

それからの話聞いてよいやら悪いやら
出来ちゃったそれから親は大騒ぎ
その先はご飯の後にしませんか

類杖のまんま昨日がためない
それからの貴方に逢えるクラス会

なる子

敏夫 寿朗 盛夫 無限 毅 みつ子

翠洋会(大阪) 佐々木満作

人肌のお酒をつけてひとり酒
赤チャンとスキャンシップをする湯舟
恋心抱いたスキャンシップの熱い夜

山越えて難民辿り着くキャンブ
テントから見上げた星が目に残る
キャンブ場山の空気がご馳走だ

裏庭にキャンブもどきのテント張る
難民のキャンブ笑顔に飢えている
四角四面とても付合ひ出来ません

すり切れた良心ですがしがさと持つ
曲ること嫌いな父の四角い字
剛情が上乘せされた几帳面

物差して計り羊羹五等分
細かくて几帳面救いのないおひと
湖北観音優美な姿態慈悲の顔

急な雨走つて帰れぬ歳となり
姉妹互いの中にははを見る
まさかそんな私がボケるはずがない

アペノミクスデフレを飛ばす春の風
川柳の友に生き方教へられ
さざえから潮騒を聞く台所

残り火を突つて奇跡持つている
老人は世のうつろいに置きさられ
始めからなかったことにしておこう

美しい日本語は今風の中

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

バスの中赤ちゃんを目と話し合ひ
手を抜いて寿司屋に頼る不精者

弘子 志華子 満作 桃花 日の出

蕉子 蕉昭 浩二 恭昌 紀子 げんえい すみ子 眞澄 善平 公之 正雄 千歩 知之 希久子

乾杯の声も弾んで新社員
ほどほどの位置でゆつくり生きて
折り返しゆつくり歩む下り坂

よしやるぞコップの酒を一気飲み
ごゆるり言つたばかりに長居され
衣食足り身なり装うて花の下

ゆつくりと出掛けたくなる春日和
喪服とき一人ですする熱いお茶
辛口のカレーにコップ忙しい

心変わりとうに知つてる散る桜
病癒え命の重さ思い知る
ゆつくりと残り少ない道歩く

寒梅に掛けられないと話しかけ
保護色を着ても自我は隠せない
ゆつくりのコップ並べて春うらら

おそろいのコップ並べて春うらら
最後まで咲いて満足花の笑み
水族館の帰り寿司屋は遠慮する

春おほる自問自答の半生記
幾年が過ぎ都賀川に春の音
盛り付けて一際光るシェフの味

蝶蝶も連れて野立しないバスケット
ぼちぼちと自立しないと捨てられる
男惑わす薄いブラウス闊歩する

貧しさを装いたんと貯めてはる
何故今日はお独りなのと訊くカップ
ゴキブリへ嫁と姑が武器を持つ

忘れずに非常袋へワンカップ
お花見の幹事を泣かす春風
おつとりとしてはる様で抜け目ない

装うところ別人なる私

千代子 晶子 初音 寛十郎 柳明 雪菜 洋子 よしひさ

幸香 野薫 純 里江 龍 ひとみ 美也子 靖鬼 ヨシエ 哲夫 五月 菜々子 祐康 かずお 朋月 見清 シマ子 正和 勝巳 哲男 舞夢

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田 川柳会	15日(土) 14時締切 斜め・湧く・ひたすら シナリオ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川柳 ねやがわ	16日(日) 14時締切 警戒・温情・ダンス・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	16日(日) 14時締切 習う・ブーケ・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	16日(日) 13時開場 ロビー・好奇心・のんびり	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
中もくせい 川柳会	17日(月) 13時40分締切 疑う・あて・ほっと・自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曾根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	18日(火) 13時30分締切 煙・レトロ・歌う・びったり 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳塔 すみよし	22日(土) 14時15分締切 ノック・めきめき・きつと無理	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂燕子
和歌山 三幸柳会	22日(土) 12時30分開場 菌・さまざま・音	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸柳会」
はびきの 市川柳会	23日(日) 14時締切 笑う・ほどほど・梅雨 スタート	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうも社	23日(日) 13時30分開場 ハンディ・値引き・ざまあ見ろ	開発ビル 2Fホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪 川柳会	24日(月) 18時開場 女々しい・メタボ ずる休み・針	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	24日(月) 14時締切 すっきり・雑・刻む	宝ヶ池～山端平八茶屋 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露 川柳会	24日(月) 20時締切 昔・地図・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光
川柳クラブ わたの花	28日(金) 10時開場 がっかり・支える・白・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北会 川柳会	1日(土) 13時開場 呆れる・奇抜・びくびく 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	1日(土) 14時締切 小・都合・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉吉会 川柳会	1日(土) 14時締切 ぶかぶか・読む・凝る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつえ	1日(土) 13時45分締切 旗・余る・甘い・ノート	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川柳塔 なら	6日(木) 14時締切 待つ・腕・身内	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川柳大阪	8日(土) 14時締切 あっぱれ・顔・世界	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 打吹	8日(土) 14時締切 首・スリル・遊ぶ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川柳会	9日(日) 14時締切 人気・潮・喋る・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	10日(月) 14時10分締切 兼題=訳・ばらばら・的外れ 課題吟=サラダ	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 泉原道夫
西宮北口 川柳会	10日(月) 14時締切 気儘・占める・さすが・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川柳 あまがさき	11日(火) 14時締切 背く・闊・ありあり・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	11日(火) 13時30分締切 雨・苦しい・ぐんぐん	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 さかい	13日(木) 13時開場 外す・真似・折句=か・つ・お	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
あかつき 川柳会	14日(金) 14時締切 宿る・母・瞬間・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳塔 みちのく	15日(土) 16時開場 花粉・くるくる・庇う	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯

柳界展望

★第13回春はくろほこ川柳大会は、4月7日鳥取市さざんか会館で開催。事前投句307名、当日出席115名、当日投句80名。同人成績次の通り。

鳥取県知事賞

果樹園のどこかで鳴っているラジオ

両川 無限

鳥取市長賞

反骨心輪ゴムで飛ばすほどはある

稲村 遊子

鳥取市議会議長賞

霧の中熟れたわたしに気付かない

板尾 岳人

鳥取県教育委員会教育長賞

不器用な泳ぎしっかり子が見てる

細田 裕花

全日本川柳協会会長賞

老いたれど輪ゴム位の武器は持つ

倉益 一瑠

秀句

オスブレイ落とす輪ゴムは買ってある

鈴木 公弘

両雄が並ぶと揺れてくる舞台

竹治ちかし

範を示せば背後に列が

山本希久子

霧晴れて腹をかかえて

笑い合う 河内 月子

★2013ふあうすと川柳大会は4月14日兵庫県民会館で開催。出席者281名。同人成績は次の通り。

全日本川柳協会賞

振り向くと笑い話になつていた

小島 蘭幸

ふあうすと大賞

今はむかしの話をしよう花の下

木本 朱夏

★第24回時の川柳交歓川柳会は5月5日、兵庫県民会館にて開催。参加者215名。本社同人成績。

神戸市長賞

朝日新聞社賞

西川 無限

★第3回高田奇生木賞には249名の参加。

大賞

寝たきりのゆうこにも毎月生理

高瀬 霜石

特選

10万年たつたら開けていい詞

☆山本三郎氏(理事・寝屋川市)は地方自治の功績により、春の叙勲で旭日小綬章を授賞。

▽出 版△

◇「川柳さんだ」は150回目の句会を記念して、句集「メダカの詩Ⅲ」を発売。A5判、162頁。

▽計 報▲

■中原諷人氏(理事・鳥取市)は4月27日逝去。行年70。通夜・告別式には新家完司副主幹、森山盛桜理事、吉岡未延子理事他、同人多数が参列。森山理事が弔辞を奉読。

新同人紹介

—蘭幸・楓楽・朱夏・千代推薦
酒井紀華

紹介者 政岡未延子

▽御芳志お礼△

○村上ミツさん(同人・八尾市)より亡夫(元同人・剛治氏)十三回忌供養として金一封拝受。

○コーキ封筒(株)より封筒拝受。

▽お詫びして訂正△

▼4月号P105下段1行目、お茶の味 淡で自分の墓のこと↓淡々。12行目、明美↓和美。

エッセー(同人のみ) たて18字 65行まで

ひとこと(同人・誌友) たて18字 20行まで

共にタイトルは別につけて下さい。締切は自由。ただし原稿の採否、添削・整理は編集部に一任願います。

原稿募集

▼5月号P49、大阪川柳の会、垣花和夫↓柿花 P125下段17行目、お聞きする↓お聞きする。P136上段22行目、繁治↓敏治。常任理事会P5月7日(火)①第19回川柳塔まつり関連②平成25年同人総会式次第案③合同句集について④定例確認事項⑤各報告事項⑥その他
次回P6月7日(金)AM10時

第14回 生駒市民川柳大会

日時 7月21日(日) 12時30分開場
 会場 生駒コミュニティーセンター
 (セイセイビル内) TEL.0743-73-0500
 〒630-0257 生駒市元町1-6-12

事前投句 「節約」 宮田 宜子 選
 葉書に1句 6月20日締切

宿題 「言葉」 上野多恵子 選
 「洗う」 大楠 紀子 選
 「魂」 阪本 高士 選
 「流れ」 藤原 一志 選
 「きっと」 渡辺 富子 選

締切 13時30分 出句
 各題2句(欠席投句拝辞)

事前投句先 専用葉書または普通葉書にて
 〒630-0288 生駒市東新町8-38

生駒市生涯学習課 宛
 TEL.0743-74-1111 (内線649)

主催 生駒市・生駒番傘川柳会

第57回 全国鉄道川柳人連盟鳥取大会

日時 7月8日(月)
 投句締切 11時50分
 場所 ホテル・砂丘センター
 会費 2500円
 (昼食・記念品・記念写真・発表誌)

兼題と選者

(各題2句・席題なし・欠席投句拝辞)

「ポッポ屋(鉄道員)」 新家 完司 選
 「砂」 田中寿々夢 選
 「像」 堀 松白 選
 「けものみち」 兼行 幸枝 選
 「プレッシャー」 高塚 夏生 選
 「逆ギレ」 北川 拓治 選
 「いじめ」 長谷川酔月 選
 「女々しい」 鈴木 かこ 選

★前夜祭及び宿泊・大会当日懇親宴は下記宛にお問い合わせください

宿泊申し込み締切は 6月25日(火)
 〒680-1105 鳥取市東大路64
 両川 洋々 携帯 090-8990-7898

第44回 奈良新聞川柳大会

日時 7月28日(日) 10時開場
 会場 奈良県文化会館 小ホール
 (奈良市登大路)
 バス(市内循環・他)

席題 「ニュース川柳」 大西 将文 選
 宿題 「しんどい」 坊農 柳弘 選
 「波」 大楠 紀子 選
 「主人」 牧浦 完次 選
 「森」 鶴本むねお 選
 「テーブル」 阪本 高士 選
 「巻く」 西川 國治 選
 「魔法」 田中 新一 選

各題2句 出句締切 11時30分
 会費 3000円(昼食・発表誌呈)

出席申込み 7月10日まで
 欠席投句 500円同封下記へ(発表誌呈)
 〒630-8325 奈良市西木辻町122-1-801
 吉富ひろし 宛

締切 7月10日(水) 消印有効

主催 奈良新聞社

平成25年度 川柳研究社誌上大大会

課題(各二句)二人選

「まあまあ」 { 千島 鉄男 選
 齊藤由紀子 選
 「粗い」 { 萩原美知子 選
 梶原 勝雄 選
 「困む」 { 天根 夢草 選
 土田 今日子 選
 「卵」 { 小島 蘭幸 選
 津田 暹 選

要項 所定用紙または便箋に住所・氏名・電話を明記

投句料 1000円(切手不可)
 発表誌呈

締切 7月10日(必着)

投句先 〒176-0222
 東京都練馬区向山3-18-5

五十嵐淳隆 方
 川柳研究社誌上大大会係

編集後記

★争いはない地球儀の海
の青 薫風

★「十四字詩について」は
いかがでしたか。路郎に
も「二階を降りてどこへ
行く身ぞ」がある。十四
字詩という呼称もまだ正
式には決まっていないと
か。お忙しい中を御執筆
くださった佐藤美文先生
先生に、深くお礼申しあ
げます。

★某月某日、JR環状線
内でびわこ番傘の徳永政
二さんにはったり。墨作
二郎さんの「点鐘散歩会」
に参加する途上とか。一
度は参加しなかった「散
歩会」。急遽予定を変更し
て一緒にすることには……

★大阪市立美術館で開催中
の「ポストン美術館展」を
觀賞して、作句するとい
う。いきなり句箋を一つ
かみ渡される。ざっと80
枚はあろう。参加者は19

人。天王寺区民センター
での互選は、70句の中か
ら10句を選ぶ。川柳との
格闘技である。凝り固まっ
ていた脳細胞に強烈なパ
ンチを食らった……

★猪瀬都知事のニュー
ヨークタイムスでのイス
ラムに関する「不適切発
言」が波紋を生んだ。パ
ティーなどで宗教と政治
の話はタブーとされる。
前編集長の故穴吹尚土さ
んの体験をひとつ。

★東京でタクシーに乗っ
たときのこと。トラキチ
同士大いに盛り上がりつ
いたところ、突然タクシ
ーが停車。ドアが開いて「お
金はいいから降りてくれ
」。宗教、政治の他にプ
ロ野球の話もタブーのよ
うですね。フানের皆さま
ん、くれぐれもご用心をさ
★「川柳すずか」4月号
吉崎柳歩さんの「没句は
誰のものか」がおもしろ
い。はて？ 言われてみ

れば本当に誰のものか。
大会主催社側のものか、
選者のものか。「当然、作
者のものである。選者は
その句を没にした時点で、
その句を作者に畏れにな
らとお返ししたことになる
」が柳歩さんの結論。

★温故知新は「谷垣史好
遺句集」に変わりました。
お楽しみください。(朱)

○江戸川柳で楽しむ忠臣
蔵
○江戸の浅野藩邸から播
野家再興を願う城を明け
忠」となる。(末)

ひとつこと

苦勞してまずユーモア句

私が川柳を始めて、この五月で丸五年になりました。私は、もともと無学だし読書家でもなかったのでもキヤプラリーも貧弱で困ったものでした。でもその一方、男性からも、女性からも「あなたと喋ってる肩がこらない」といつて下さる方が少なからずありました。良くなるも悪くもこれが自分の持ち味かなあと思ひ、背伸びせずに自分らしいユーモア句を主体に作るようになりました。句は、テンシヨ

州赤穂までは百五十五里
渡す事に決定した。
黄金もござるはづだと
大野いひ (22)

飛ぶと鷹は緑語
ご別家の不慮葉岳まで
煮えかえり (95)

浅野家の分家。葉岳は広
島の特産品で本家を表す。
○赤穂城での評議の末、
藩士に割賦金を支給、内
匠頭の弟・大学による浅
野家再興を願う城を明け
忠」となる。(末)

一人くらいこんな奴がいてもいいだろうと、今日もせせせと駄作を作り続けています。
ユーモア句
ユーモアと言われてもなお
(足立 茂)

ンが落ちていない時に気持のリズムで、まとめて作ります。
また推敲もほどほどにして、多少粗くても気持がうまく言えた句を大事にしています。だけど、句になつてののかなか。(笑) 川柳塔誌で皆さまの上手な句に触れて勉強させて頂いています。私にはとても無理やなあと思います。

石と野は大きな忠と不
忠なり (39)

○家老、大野九郎兵衛は
割賦金に関して勘定奉行
岡島八十右衛門に、もつ
と渡せと詰め寄つた。大
野は城明け渡し後、行方
不明になり、大きい「石」
(内蔵助)は「忠」で、大
匠頭の弟・大学による浅
野家再興を願う城を明け
忠」となる。(末)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(8月号)

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「拭く」(6月15日締切)

7月号発表

奥田みつ子 選 — 共選 — 森山 盛桜 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

8月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (8句)	小島蘭幸選
水煙抄 (8句)	西出楓楽選
愛染帖 (3句)	新家完司選
檸檬抄「拭く」 (2句)	奥山盛桜共選
一路集 (3句)	川端一歩選
初歩教室	「マジック」(3句) 太田昭担当

9月号

檸檬抄「しっかり」	一路集「呆然」「引きずる」 「ジョーク」	初歩教室「明るい」
-----------	-------------------------	-----------

本社6月句会

とき 6月7日(金) 13時開場・13時40分締切
 ー開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。ー
 ところ アウイーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
 おはなし「栄光のアマノジャク」
 兼席 藤井則彦選
 題「徴」 森松まつお選
 「吊す」 松尾美智代選
 「それきり」 伊達郁夫選
 「図太い」 山岡富美子選
 「違反」 新家完司選
 小島蘭幸選 (各題2句以内)

路郎忌7月句会
 5日(金) 午後1時から
 兼題「供」「這う」「ボトリ」
 「仕掛け」「程度」

第32年度 夜市川柳募集

第1回「歴史」新家完司選
 ハガキに3句 6月20日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料84円)
 半年分 五千円 (送料共)
 一年分 九千八百円 (同)
 二〇一三年(平成二十五年)六月一日発行

発行人 小島和幸
 編集人 木本朱夏
 印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
 花野ビル201号室
 電話 (06)六七七九三三四九〇番
 振替 〇〇九八〇一四一二九八四七九番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳筆(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの

つぎごま

長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。

今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL  0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>